

本願加倉井重久

○裏 妙法坊日妙

本願加倉井讚岐守重久
台圓阿日應

高田大藏助

出雲 太田

たちね美殿

一本妙實ノ片カキ
大谷新兵衛
寺原内

おまこ

さわぬいの助

妙實尼

大谷雅助内儀

同妙永

鈴木大學助

ねこや
助へもん

御東 つほね女

同与七郎

太田(頭註)
篠嶋越後守

同彦四郎

郡垂 瀬谷因幡守

しんと之弟
太郎左衛門

安土治部左衛門

荒屋ノ千代女

ならのさい
伊賀守

同内儀

安清(頭註)
一本安清ヲ妙實尼ノ下ニカキ、其
ツキ順々ニ送ル、コレヲ是トス、

太郎衛門

同おのた

孫左衛門

同おのた

水戸一本
ひきた内儀

花の

しんさへもんの

篠嶋越後守

佐藤若狭守

佐藤若狭守

六位介のは一本

とぎ美濃守

いづこ
彦四郎

加倉井道水

東ノ
同おのた

同新左衛門

こゝのへ
門前ノ
二郎三郎

同甚衛門

二郎三郎

外岡圖書

二郎四郎

市家源左衛門

新三郎

武藤清左衛門

内藏介

谷部二郎衛門

成澤
同おのた

加倉井源左衛門

六郎左衛門

橋本道和

むやくめ

于時享保十年巳七月十四日寫之、

加倉井村住 加倉井金左衛門源則久

〔園城寺古記〕

元龜・天正・文祿・
永祿私元・慶長
日次古記寫

こ一本(頭註)
こらこ
下ニカキ、彦四郎ヲ道永ノ下ニカキ、
順々ニツギヘヨクハ未ノむやく女ハ
少シ並ヨリハ外ヘ出タリ、コレヲヨシ
トスベシ、

大工加倉井主税助
石澤丹波守

番匠三百人隙ニ而擔

おへ申候、

萱手弥左衛門
太郎衛門

加倉井・水戸・太田・郡垂

成澤之衆旦等

沙門治部卿日登書之、

三尾社法會

天正十二甲申三月二日、三尾社法會出仕日記

六坏 咒師日光院 六坏 導師初乘坊 三坏 千乘坊

右之外同斷、略之、

天正十二、卯月十六日、護法社法會出仕、

壹斗 咒師日光院 壹斗 導師西乘坊 五舛 善學坊

右之外同斷、略之、

天正十二年六月四日、華光坊 公文所奉行衆法眼・式部・大進三人者定出仕、残り二人ハ輪番、 大會初探題寺家出仕次第

法眼 式部法橋 但饗公文所へ取也、 備中法橋 大進上座

以上四人

專當衆 善來 一圓 良住 菊僧 大力

以上五人 貳人カンモン

申年六月四日、華光坊大會初探題時、同問役之衆

立者 少納言 一問 寶壽坊 二問 淨花坊 三問 堯雲院

四問 東林坊 五問 法相坊 注記 西林坊

護法社法會

三百帖見聞

〔三百帖見聞〕○近江實藏坊所藏

(上裏書) 右寫本急用之儘、早筆書寫仕候、可爲損落斗候、後日之清書所仰候、後見之方々圓頓

御廻向奉憑入候、

(下裏書) 天正拾貳年八月十五日書之、

右寫本急用之間、早筆書寫仕候、損落數多可有之候、後日之清書所希候、後見之方々

御廻向奉憑入候、

〔天台宗玄旨歸命壇傳記〕○近江實藏坊所藏

(奥書) 于時天正十二年甲申冬日、

右相傳定珍法印帝釋・神藏兩寺ニ追テ二師ノ言上之趣、粗記玉フ、台家ノ深祕也、不

可口外、可祕々々、然ルニ予玄旨歸命且傳受心悅已而、故祕書之者也、

于時慶安二年孟春十二日、宿緣所追令後書之、

無親無師沙門實俊

〔來迎寺文書〕○近江

(端裏書) 一圓頓戒體十重

天正十二年雜載

梵網十重禁戒

- 第一、不殺人戒 殺畜生罪輕、雖有制爲輕垢罪、以殺人爲十重禁、
- 第二、不與取戒 付錢分輕重、四錢以下輕垢、五錢以上物、又不偷盜戒、
- 第三、不媼欲戒 付之有邪媼、不媼、出家人不媼、在家人不邪媼也、邪媼不通他夫他妻也、
- 第四、不大妄語戒 於世事不見云見、非大妄語、或天人被敬、或云得證利等此也、
- 第五、不沽酒戒 菩薩可與藥沽酒、醉物非菩薩也、
- 第六、不說四衆過罪戒 不說四衆名德過也、非餘人、
- 第七、不自讚毀他戒 菩薩先人前身、而其心背菩薩故制之、
- 第八、不慳貪加毀戒 非不与物致罵辱也、於來求者、或慳法慳財不與此、
- 第九、瞋心不受懺謝戒 非起瞋恚不受懺謝也、
- 第十、不謗三寶戒 此不謗佛法僧戒也、

一九六

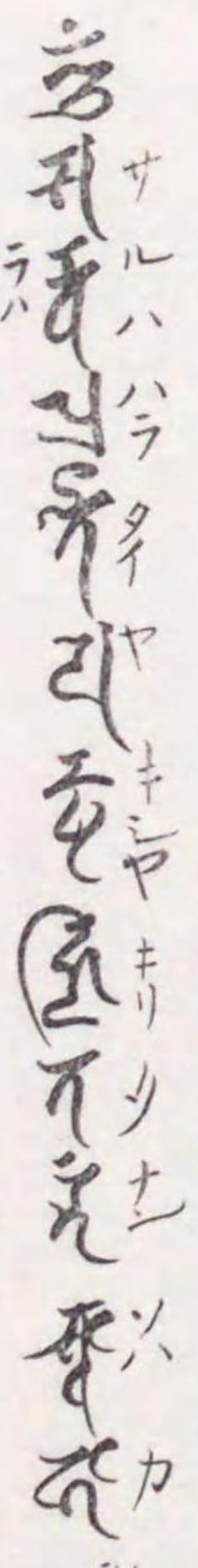
〔佛藏書〕
菩薩戒印

菩薩戒印明

印

明

佛部三昧耶印 二天指開、二頭指根三付之也、



天正十二年 甲申三月十一日

三部都法大阿闍梨位智光

血脉

文殊師利	明惠上人	義淵房
盛遍上人	良含上人	了然上人
傳法和尚	永慶	圓俊
靜鎮	俊祐	昌慶
有俊	智光	眞雄

今夜奉受菩薩戒、師主讀十重禁戒、授予給、即傳受、重授印信云、是本願上人大聖文殊ニ受給、只先師義上人一人被授之、先師又授予、々又授汝々、

天正十二年雜載

一九七

梵網大事

〔論義書〕
「梵網大事決」

梵網大事

示云、文殊傳授之時、無別口決、而私印明義勘云、印者佛部印即佛性戒也、梵網衆生受佛戒、即入諸佛位、位同大覺位、真是諸佛子義也、故梵網戒淺略、是者深祕也、是則相契義決意、彼文云、此土梵網經者、金剛頂淺略行相也、文、此印明口決東寺無其沙汰、谷阿闍梨御房御口決云佛頂戒也、佛頂者、即佛部通三昧耶也、三部三昧耶通戒、今佛部印用佛性戒意也、又惣體之故、蓮金具足之、次明句義、凡一切心別解脫云祕密心戒云事也、則一切別祕密心也、此中文云八轉異也、私云、業聲也、以上注、一切佛別解脫祕密心地戒云事也、佛真言中雖無之、印即佛部故、印明合可得意也、上人此明自文殊傳受之後、一切經被覽之時、或經中此明在之云々、梵網心地佛性戒祕密故、顯密一致習合之、文殊現身明惠上人被授之、云、又示云、衆生受佛戒文、五大院真言眼即身成佛義得給、

天正十二年甲申三月十一日

菩薩戒沙門智光

彼寺上人之時、梵網經讀、自能持々々云、自誓受戒作法用、別無師傳受戒作法也、但今

印明等至自受之義不聽故、必可傳受也、世相傳戒師無之故、自誓儀作也、

〔明王院文書〕四
○近江

天正十二年六月會、於葛川行者中衆議曰、夫興廢者紹隆太本云々、寔山上破隔之後、行門雖有名、滿徒歸山之今、再興修驗頓遂也、然而山亂已來國々住宅之行者、密々不律之沙汰、都鄙嘲哂其實難知、所詮仰于明王之照覽、任于和尚之冥鑒、再翻于牛玉寶印之紙面、所註于大師勸請之起請也、自今已後再入之行者、向先達前嚴重可被加判形也、就中近年爲體、所々靈地皆退轉、方々^秀衆希代歟、就而當山不動不退之淨境、長久長延之勝所、名手不可不敬、不可不貴、行者中在行門勸發入者、如先規有修驗策勵、參籠護舊年之旨、一衆同心之連署者、于奧誓紙并罰文書本末歟、

護王裏書敬白

至心勸請、梵天・帝釋・四大王、龍神八部、諸護法衆、日本大小神祇、特者王城鎮守賀茂下上・祇園・北野・稻荷・松尾、住吉正八幡宮、愛宕權現、鞍馬毘沙門天王、別而山王七社王子眷屬・内外末社百有餘神、當寺鎮護地主大權現、大聖不動忿怒明王、三國傳來諸大祖師等、東西楞嚴滿山三寶、傳教・慈覺等諸大師、修驗元祖建立大師、顯密弘通

葛川行者衆
滿徒歸山
山ノ亂以來
行者諸國ニ
散在ス

近年所々ノ
靈地多ク退
轉ス

傳來祖師等、敬白、

右起請加判之衆、女犯無慙之過在之者、件神罰・冥罰深蒙其身、受厚其意、現生五體六根朽敗、五臟・六腑爛壞、頓受黑白二病、當來入無間火坑、墮阿鼻極底、雖經億々万劫、全不可爲出現者也、仍罰文如件、

連署次第不同

- 法印乘儔印
- 法印政俊印
- 法印豪圓印
- 法印相憲印
- 法印慶秀印
- 法印尋俊印
- 法印賢榮印
- 法印亮信印
- 法印心盛印
- 法印玄俊印
- 法印榮源印
- 法橋行盛印
- 擬講祐能印
- 憲儔印

以下 各々花押略之

〔明王院文書〕

○十七 葛川會諸役引付

天正十二年 甲申年六月會

葛川會

花頭慶秀 燈明頭尋俊 佛供頭賢榮 莊嚴頭祐能 大頭心盛 已上明年差定、
 大加持豪圓 相憲 蓮花會法則乘儔

天正十二年 甲申年拾月會

瀧許大々法印乘儔 法花會法則豪圓

〔定津院文書〕

○信濃

定

定津院住持職之事、^(玄忠)大休和尚任法嗣置、如先例寺產等不殘一所、令返進候之上者、永不可有相違候、爲後日染一翰進候、仍如件、

天正十二年 甲申

宮内大輔

卯月十日

昌綱^(綱連)(花押)

欣隆公

玉床下

〔信州臨川山定津院年表〕

○第八世大休玄忠禪師 信濃定津院所藏

欣隆禪師

元龜間艸創於信州新張村宗傳寺、住十餘年後、謁定津大休和尚、親侍巾瓶、實傳心印、^(興華)和尙臨終讓席於師、開基禰津宮内大輔昌綱會與師不相和、奪代所賜之寺產故不敢得進院、

天正十二年雜載

禰津昌綱欣隆ヲ信濃定津院住持トナス

天正十二年甲申四月、值大休和尚之第三回忌禰津師漸和睦、迎師入寺、依舊賜寺產、

〔如法經結衆帳〕濃○信

天正十二年經渡ル、
一俵出ル、仁岡宗麒禪定門前知久殿
知久殿 天正十二年經渡ル、
梅叟紹英大居士

〔日光常行堂記録〕三 三十講表白

天正十二年申別所造立畢、

淨土院昌策○瀧尾別所燒失ノコト、十一年雜載(補遺)ノ條ニ見ユ、

〔日光常行堂記録〕四 當内堂 大衆舞帳

天正十二年八月十八日

延年 昌察 昌應

〔日光行常堂記録〕四 常行堂施入帳

天正十二、八月十八日 上執事 昌長
下執事 重純
奉施入 綿子袈裟 一帖 昌長
奉施入 念數 一連 南(座) おつほね
奉施入 念數の糸 十五筋 宗清

前知久殿

日光山常行堂瀧尾別所再建

大衆舞帳

延年舞

常行堂施入帳

大檀那下野 小股ノ蓋川 義昌夫妻同 義勝

釋迦牟尼佛尊像

〔栃木縣足利郡小股村 鶏足寺釋迦如來像背鐫銘〕
大檀那源義昌并御閨、殊者義勝爲子孫繁昌、武運長久也、

仁王百八代

佛手山

奉鑄立釋迦牟尼佛尊像、盡未來際、不壞金剛、久遠繁榮、當地安全、亂入消除、諸人快樂、

鶏足寺

下野國小俣

學頭金剛院法印俊圓 本願賢□

天正十二年甲申八月廿一日

弟子尊賢

作者大田近江守忠定

〔喜連川家文書案〕二 ○下野

禪興寺御瑞世之儀、相公(義昭)樣雖御在位無之候、公帖任先規調進置候、闕御當家御相續之上、御直判追而可申請進候、恐々敬白、

公帖御印判日下こあり、

六月十五日

各々

(龜巻) 佛日庵周音和尚

昌珍西堂 印次取次

連署こ者和尚々書也、

(天正十二年) 甲申六月十五日、(甘栗院) 久喜純西堂

同十一月廿一日、(宗伯) 碩興西堂

同十一月廿一日、西堂、但明月院屬芳春院被相調、

(天正十七年) 己丑、八月廿一日、永存西堂、從矢作屬永仙院調之、(三伯島伊)

〔新編會津風土記〕

五十九 耶麻郡之八 長福寺 境内東西十間半、南 村中ニアリ、天正十二

西中明村 寺院

北二十間、年貢地、

年、淨土ノ徒本州岩城ノ産良殘ココニ來リ、一字ヲ菅神ノ廢趾ニ建テ、自天山長福寺ト號ス、二世良圓慶長中ニ寂シ、其後遂ニ廢絶セリ、寛永十九年、府下半兵衛町極樂寺ノ僧徒春察再興シ、極樂寺ノ末寺トナレリ、彌陀ヲ本尊トシ、客殿ニ安ス、

〔新編會津風土記〕

七十八 大沼郡之七 慈德寺 境内東西十二間、南 村中ニアリ、曹洞宗、

寺入村 寺院

北二十間、年貢地、

天正十二年
天寧寺ノ末
寺トナル

山號ヲ保呂山ト稱ス、開基ノ年月詳ナラス、モト村ヲ離レテ南ノ山中ニアリ、イツノ頃ニカ良徳ト云僧越後國ヨリ來リ住セシトキ、今ノ地ニ移セリト云、天正十二年、閩察ト云僧住セシ時、會津郡南青木組天寧村天寧寺ノ末山トナリ、天寧寺十世曇吉ヲ請テ開山トス、本尊地藏客殿ニ安ス、

〔能登 惣持寺文書〕 乾

卷目ノ上

(端裏ウハ書) 一五院御免僧中 星野

舜廓首座居屋敷之儀、契約申こ付而、五院ハ奉遂披露之處、得尊意之旨、重々御理承届候、於向後奉公并公批官(マ)之望御座候ハ、頓こ屋敷を明可申候、其上慮外狼藉是以如在有間敷候、仍如件、

惣持寺五院
免僧
舜廓首座

天正十二年雜載

星野源左衛門

二〇六

天正拾貳年 甲申拾月一日

光誠(花押)

惣持五院免僧禪師御披露

〔法道寺文書〕

後〇備

(折封ツハ書)

左近允

杉原盛重

寶幢寺

盛重

神のへそうひなくにうせう申候ハ、そのうへをもつて、十くわんめ申とゞのへ候て
り、あしく、

すこしもいつわりにて候ハす候、かたきため一筆申候、

天正十二ねん九月十八日

もり

ほうとうし殿ら

ほうとうし殿ら

一大みねきしん申候、神へそういなく候こおいてハ、五りやうむら晩分そういなくきし
ん申へく候、

天正十二ねん九月十八日

ほうとうし殿參

うしの歳
一志内

しん上

〔藝藩通志〕

三十九 安藝國安藝郡四

寺院 廢寺附

道場 瀬戸浦にあり、天正十二年、僧徳善開基、

〔藝藩通志〕

五十三 安藝國佐伯郡四

寺院 廢寺附

安樂寺 小栗林村にあり、雲林山と號す、天正十二年甲申、僧久嚴中興、

海藏寺 古江村にあり、九品山久本と號す、開基詳ならず、永正年中、僧立庵中興す、

天正十二年甲申、草津城主兒玉就方寄附の鐘あり、其他天正十四年、羽仁親玄寄附の

天正十二年雜載

二〇七

鐘もありし、嚴島戰の時、毛利氏陣中に用ひられしよし、今嚴島座主にあり、境内に觀音堂あり、行基の作といふ、もとハ鈴峯の麓小堂に安置し、毛利氏の家人島田正信島田、一に今田に作るハ訛なりといふもの、僧となり、看守せし、後草津に移り、淨教寺を建、改宗してより、當寺の子院慈光寺に移し、其後又當寺に納めしといふ、今鈴峯の麓觀音原・正信谷と名の舊跡なり、

〔毛利氏考證論斷〕二十五 都濃郡末武村受天寺由來書

周防國末武受天寺住持職

周防國都野郡末武受天寺住持職之事、爲隆繁手續宛行畢、者寺家云寺領云、任先判之旨、全可知行狀如件、

天正拾貳年五月廿三日

輝元御判

存茂藏司

受天寺存茂藏司

末武受天寺住持職事、爲隆繁手續其方被仰付條、寺家・寺領如前々無相違、可有御知行由、可申之旨候、恐々謹言、

天正十二

長井右衛門太夫

五月廿三日

元親判

兒玉市祐

元貫判

受天寺當住

〔毛利氏考證論斷〕二十五 小郡才判書出

防州白松長安寺之事、任祥岩長老与奪之旨、寺家云寺領云、全執務不可有違者也、仍相違也行如件、

天正十二年五月晦日

輝元 御判

當なし

〔高野山文書〕五 又續寶翰集四十九

納萃之事

合卅五シメ者、

右納所如件、

天正十二年雜載

二〇九

周防白松長安寺 祥岩長老

寺

天正十二年雜載

二二〇

小田原院

小田原院中

天正十二年七月晦日

來勢(黑印)

遍照光院

遍照光院

御弁

綱麻納在所

綱麻納在所目錄之事

天野 八把八料足ニテ納候、
一把ニ付テ四百文宛、

三谷 四把半

鞆淵 拾把

安樂川 拾把

毛原 六把

一、下狀(案) 一通

一、中院承仕日記一通

一、卜綱二筋、一筋同院主年行事江、當年者往生院分年納渡申、綱一尺二寸、

先年順識房

當年小田原 當年教順房

後年鏡尊房

天正十二年 甲申七月晦日

綱麻緒

每年之綱麻緒事、如例年、早速可納之者也、此於此綱麻者、自往古、水損・干損并亂入俱以聊無免許、若於無沙汰者、噉々以使可有催促也、此旨於庄中可被相觸者也、仍執達如件、

中院綱麻年預

中院綱麻年預

七月 日

龍——判

安樂川莊公文所

安樂川庄公文所

〔高野山文書〕

三續寶翰集四十九

〔千手堂修正所作人〕

千手堂御修正所作人事

天正十二年雜載

千手堂修正所作人

二二一

山堂所作人

導師 琛堯房
 唄士 長盛房
 讚頭 行宗房
 散華梵音 錫杖 朝深房
 三十二相 宗任房
 例時頭 禪觀房

山堂所作人

導師 琛堯房
 執筆 宗任房

右任恆例可脱カ令勤行狀如件、

天正拾二年極月吉日

入寺行昌

〔法住寺文書〕

登○能

當山護摩領知識之事、奥郡之内居住之輩可奉加之由、百姓等可存其沙汰旨、可被宛取行

所者、御祈禱、御家門長久可被精清誠子孫堅固如意之旨、奉寄進狀、仍如件、

天正拾貳年七月廿八日

法住寺御房

利家前田印印文利家馬印

○本文書疑ハシキトコロアリト雖モ姑クコ、ニ收ム、

〔加能越古文叢〕

四十

○上略、前掲前田利家黒印狀ニカ、ル、

右北徴遺文載之、

原書、能登國珠洲郡吼木山法住寺所藏、

按に、右印書の文中に、御祈禱、御家門長久可被精請子孫堅固如意之旨、云々と載られしハ、豊臣家の事を思召て、利家卿の内願の爲めに、知識米奉加勸進の事を許されたるならんか、當國にハ、知識米とて、家並に毎戸より初穂米を勸進して集る事、いにしへよりのならハしにて、一宮氣多神社などにも、羽咋・鹿嶋の諸村落より、知識米を勸進せしかと、慶長六年に石動山へ寄進するにより止たり、吼木山法住寺の知識米ハ鳳至・珠洲兩郡を勸進すといへり、

一、能登路記ニ云、吼木山法住寺ハ嵯峨天皇の勅願所にて、嵯峨天皇以來代々の綸旨・院宣數通ある中にも、鳳至・珠洲兩郡家並三舛宛の知識米之御朱印有て、むかしハ石

動山と同じく勸進せしかと、兵亂に中絶して、今ハ絶たりといへり、
按に、吼木山の知識米ハ前顯利家卿の印書にて考れハ、天正十二年七月、改て更に勸
進を許されしも、そのさき國亂にて中絶せしを、再興なさしめられたるならむの、さ
て今ハ絶たりといへるものハ、慶安三年に利常卿寺領寄附し給ふにより、知識米勸進
方此時命ありて止められたるにや、其事ハ同寺由來書等にも記載せず、利常卿寄進狀
如左、

(光應) 犬千代爲祈禱、能劬珠洲郡法住寺村之内、高三拾俵之所、爲吼木山法住寺領令寄附
訖、然則長日懇祈不可怠慢者也、仍寄進狀如件、

慶安三年十月廿八日

利常判

法住寺

〔味地草〕

十九

三原郡志知川浦

光明寺

○中

此寺は志知加藤氏の菩提所にして、天

正十二年、

(加藤茂勝)

加藤より重修を加へて、時の住僧伊傳上人也、總門ハ家老堀部市右衛門長勝

建立、棟牘に云、

天正十二甲申五月

堀部市右衛門尉勝書判

光明寺
志知加藤氏
ノ菩提所
天正十二年
五月家老堀
部長勝總門
ヲ建立ス

總門は後損亡す、

〔伊豫古文書〕

九 伊豫史談會所藏

山鳥坂江南庵虚空藏ノ後背書

天正十二年 甲九月廿四日

施主宗璫、且那直範、作者良善也、奉造立、右信心且那息災延命、寺内繁昌、諸人富
樂、當所安穩、富貴自在之所也、

〔古文叢〕

肆

奉再造上棟、大旦那高福山慶雲禪寺住山前圓覺見吸江登岳叟等肅營焉、納所慶藏主、祖
越秦元親、天正十二龍集九月吉辰、大工次郎右衛門尉、

右一通、吾川郡長濱村雪蹊寺棟札也、

〔大分石城川惟福寺六地藏塔銘〕

○豊後

現在未來天人衆、吾今懇懃付屬汝、以大神通方便力、勿令墮在諸惡趣、
立六地藏之事、
歸眞月窓妙梅禪尼靈位、爲頓證菩提也、

天正十二年雜載

二二五

土佐雪蹊寺
棟札祖越長
宗我部元親

豊後六地藏

安倍玄蕃允

天正十二年甲申十月八日

施主 安倍玄蕃允

貞述謹立

〔松浦家舊記〕

今福年宮舊記

役人池田左京亮

右意趣者、奉爲金輪聖皇、天長地久、御願圓滿、殊者信心大檀那松浦丹後守

當村役人池田左京亮、前大宮司右京允則忠并近江守則次、

松浦親山田野三所權現二祈願

〔山之〕
□田野三所大權現

源親朝臣并盛・同氏女、息災延命、御子孫繁昌、武運陽名、家門長榮、內安全、諸人快樂、惣而者當村人民如意自在、別而者當寺榮耀、佛法紹隆、法躰守護、兒孫

權少僧都住持阿泉申次河窪七良左衛門明

檀那松平盛

〔殿〕
□若波羅蜜多王宮家

堅固、心中善願、一々成就、皆令滿足所、右奉爲天長地久、御願圓滿、殊者信心大檀那松平丹後守源盛、息災延命、御子孫繁昌、武運長久、弓箭揚名、別而者代官池田武藏・同大隅、如意滿足也、

于時天正十二年二月吉日

代官池田武藏
池田大隅

〔定善寺文書〕

向日

南無妙蓮華經
南無日蓮大聖人
南無代々上人

天正十二年雜載

永祿肆年六月廿六日
山田野內記

右一天四海廣宣流布、本末繁昌、師弟・檀那等現當悉地所願成就所也、

天正十二年 甲申正月一日

日侃（花押）

島津義久戰捷ヲ祈ル

〔後薩藩舊記雜錄〕

十五 義久公御譜中 寫在末吉衆蓮光坊

夫愛岩山^{（若カ）}大權現者、地藏藏薩埵應、欠、忉利天於喜見城親受釋尊付囑、獨二佛中間導師救苦海群生、六道能化大聖也、欠、傳聞、末世及濁亂、當世至澆季爲藺信不爲紀利罰、掛忝改剃髮姿、翻忍辱袂、着降伏甲冑、法性執寶幢、握眞如利劍、乘飛行白馬、遊第一義天、斷無明怨靈、破逆心災妄、勝軍高德秀余神道云々、爰源朝臣嶋津判官義懸憑於冥道知見、任勝於神明冥助、自他本陣互舉旗、双方士率各構刃、將數決興廢、既出立、太刀下令凶徒誅戮、競向雷動響令敵徒敗北、是豈所成神慮、所致信力、渴仰指掌感應銘肝、然則開寶殿玉扉、備尚饗禮奠、獻再拜奉幣、立願成弁、懇篤無外、丹祈無貳者哉、冀者信心願立、^{（本マ）}義久者三所和光并大郎房利生翹下生立、弥崇神道、行仁義、倍貴佛陀、重義理、依之傳武運兵略累代子孫、繼弓馬嘉名重代家門耳、願書成就旨欽言、

天正十二年三月十七日

下之坊 福壽院

代官隅劬住快法上人

〔後薩藩舊記雜錄〕

十五 義久公御譜中 正文在末吉衆蓮光坊

彼快寶上人開門仁、法華爲奉納、其許被致越著、從夫根占可有渡海、路次等之儀尖二罷通度由、彼仁念望之故、壹簡如件、

朱力キ 天正十二

町田出羽守

三月廿六日

久倍判

穎娃

根占皆役人中

禁中、公家、

〔兼見卿記〕

六

正月二日、庚辰、

○中 略

入夜侍從各召寄謠初之、一盞之儀申付了、侍

從方へ被向、二荷・兩種、鯛三・豆腐十三、侍從二茶二袋^{（無上、別義ソウ）}、青女貳十疋、侍從二茶

斤遣之、有三獻之義、子孫繁榮賀之訖、

四日、壬午、○中 略大炊御門經賴書狀到來、荷駄馬三疋可被給之由申來、厩指合候間一疋

可被給之由答、

天正十二年雜載

二二九

無上

五日、癸未、晴、後剋又時雨、侍從乘馬二疋共湯洗、中間共各罷出、下酒了、疊サシ弟來、淵田和泉守菟毫四管持來、對面羞一盞了、鑓冶与二郎火箸持來、下酒了、○中略、萬里小路充房、大坂二下ルコトニカ、ル、正月八日ノ條ニ收ム、使二而喜介銀屋二郎五郎所へ遣、脇指之義也、同ツカマキノ皮・下緒取遣之、

七日、甲申、天晴、○中略清少納言國賢十疋、持來、羞一盞、以客之禮義盃初之、堅辭退也、達而申始之、數剋相談、及暮飯京了、神供遣之方、勸修寺亞相・山科黃門、遣使者修理進、(吉田淨勝)盛方院遣書狀折紙、攝州へ下向參申也、○吉田淨勝、大坂二下ルコト、正月十一日ノ條ニ見ユ、

八日、乙酉、○中略、長岡忠興、丹波ヨリ入京ノコトニカ、ル、並ニ正月八日ノ條ニ收ム、齋了當寺僧衆各來、妙院十疋・周超十疋・智福院一樽・神龍院十疋・松樂庵十疋、仙首座五明一、各以前來飯寺、每度依病者不出座敷也、各羞一盞了、此砌カツラ千百、來、出座敷相伴了、(屋下向シ)混布持來、紅帶一筋十疋、遣之、自御方紅帶二筋遣之、松庵來、進盃、宗林五明三本、南ノ在所ニ在之者也、下酒、○中略、萬里小路充房、大坂下向ノコト、及ビ長岡忠興、丹波ヨリ入京ノコトニカ、ル、並ニ正月八日ノ條ニ收ム、柳原亞相へ遣神供、即返事在之、壽命院賢宿五明一、持來、自門外歸、路次へ人ヲ遣抑留、方々爲禮罷向之由理之間、不及是非也、

月齋・野田勘左衛門各十疋、持參、月齋出京也、○下略、前田玄以、入京ノコトニカ、ル、正月七日ノ條ニ收ム、

十日、戊子、朝之程雪降、午刻晴、(吉田兼右)唯神院殿年忌、神龍院へ齋申付之、社參燒香、直垂、明日出頭、勸亞相へ遣使者相尋之、此方次第之由答、侍從袍於庭田黃門借之、同心、予指貫烏丸黃門借之、安間之由答、侍從指貫万里小路可馳走之由答、○公卿衆、參内シテノ條ニ見ユ、ト、正月十一日

今夜侍從夜遊、寺衆於神龍院相催之、振舞之儀悉申付之了、昨夜者妙心院興行也、其節各名々詠狂歌十首、持遣之、各不及返歌呵々、脇指之シト、メ、小刀之ツカ出來、銀屋二郎五郎申付之、

十二日、庚寅、鞍馬寺物語、貴賤群集云々、一藤康雅來、依他出即飯京了、蓼倉藥師へ詣了、山科黃門書狀到來、服忌令不審三ヶ條在之、後刻返事持遣之、○中略、佐々成政、入京參内ノコトニカ、ル、正月十二日ノ條ニ收ム、銀屋へ中間又右衛門脇指ヲ持遣之、小刀之ツカ直之義也、

十四日、壬辰、天晴、風寒、清三位入道・休齋攝州牢人來、以羹羞一盞了、建仁寺宗仰五明一、若衆一人下京地下人、召連來、打栗一裏持來、羞羹一盞了、玄三若州牢人面ヲ打人也、

狂歌

鞍馬寺參詣
蓼倉藥師

面打

召出來、進盃、面三借遣之、セラ・天マ
ン・トヲシ安親子來、下酒、○中略、羽柴秀吉、物ヲ獻ズルコト
ニカ、ル、正月十四日ノ條ニ收ム、今夕於待從方有夕喰之儀、女房衆ヨリ年始祝義興之、(マ)青女家中各罷向、侍從令沈醉平
臥了、今夜自侍從女房衆禮文、油煙一挺、持來了、

十八日、丙申、神龍院へ齋二向、侍從・同女房衆各罷向了、○下略、御不豫ノコトニカ、
ル、正月十八日ノ條ニ收ム、

廿四日、壬寅、○中略、御不豫ノコトニカ、
ル、正月十八日ノ條ニ收ム、近衛入道殿御使僧御書、明日月次連歌御興行也、

可祇候之旨仰也、混布一折、被持下訖、御使僧對面、明日祈之儀隙入之間、不可致祇
候之由申入也、不能御赴也、

廿六日、甲辰、妙蓮月忌初也、燒香、靈供夫々申付之了、

昨今暖氣、薄小袖着之體也、

二月一日、戊申、○中略、
塗師彌一郎、五明一、來、下一盞了、青女年忌、別火了、

十日、丁巳、天陰、午刻雨下、周超へ向、齋、月齋・妙心院相伴、唯神院殿社參燒香、

直神龍院於佛前燒香、入夜大雨、

十一日、戊午、朝雨已刻晴、毎年茶之義申遣宇治宗好方ヨリ音信、(マ)九柿一袋・一重少鮎、
到來、貳十疋遣之了、侍從南都ヨリ罷上了、

十二日、己未、當番也、及暮參内、柳亞相相談了、

十四日、辛酉、早々下坊へ遣使者兵庫助、後剋下坊可來之由、内義東陽房申來、肴已下
用意申付之、午刻下坊入來、百疋持來、鍋千代一籠・一瓶青女方へ持來、令對面、餛
飩・スイ物差一盞了、次請茶湯座敷一服進之、次飯京了、

廿一日、戊辰、○中略、長岡幽齋、入京ノコトニ
カ、ル、二月二日ノ條ニ收ム、直向清少相談、自万里小路袍借用之間供遣之、(借カ)

○中略、近衛信輔、尾張ニ赴カントスルコト、並ニ禁裏猿樂ノ
コトニカ、ル、二月二十三日、並ニ同月二十六日ノ條ニ收ム、召寄岩切、石舟申付出來、

三月二日、己卯、雨降、山中磯谷方へ以使者与一、杉甘本計堀遣、後剋持來、神壇之東土
居種之、(イ)

三日、庚辰、天晴、兩社神事如常、爰許各禮ニ來、羞一盞了、及晚禁裏爲御禮侍從・予

罷出、先向勸亞相、產穢也、於門外面會、御禮之義相談、長橋之御局へ參申入可然

之由亞相云、即御局へ參申入了、次大御乳入參、(誠仁親王)御方御所・若宮御方御禮申入了、次

上臈之御局、次大典侍御局、各御禮申入了、次向万里小路面會、○下略、兼和、幽齋ト談ズ
ルコトニカ、ル、三月九日

ノ條ニ
收ム、

四日、辛巳、出京、參近衛入道殿、爲御遊山御成、御留主御所也、

五日、壬午、庭前之花爲興行、各調一樽羞之、次在夕食之儀、及深更酒宴、
 六日、癸未、○院中猿樂ノコトニカ、ル、二月二十六日ノ條ニ收ム、五番過自在所申來云、侍從女房誕生也、(長岡氏伊彌)早々可罷歸
 之由申之間、即歸宅、婦子無別義、女子也、先滿足、弥繁昌祝着々々、○長岡氏懷妊ノコト、十一月雜載公
 家ノ條ニ見ユ、晚ニ幽齋へ遣書狀、入夜來、暫相談、歸京、明日歸國之由被申了、○幽齋、丹波
 三月九日ノ條ニ見ユ、

七日、甲申、雨降、自盛方院侍從方へ誕生之祝義兩種貳荷、到來、御方ヨリ此内直ニ持來
 ウフ衣以下相調之、喜介取遣之、

十日、丁亥、天晴土用、○中略、唯神院社參燒香、○下略、秀吉、大坂ヨリ入京ノコト
 ニカ、ル、三月十日ノ條ニ收ム、

十一日、戊子、○中略、宇治之者也、例年茶之儀令馳走者、宗好今度造新屋、屋固御札令所望
 之間、相調之、次守三、花山院息(長尾)男子、連々所望之、喜助取次町人、二才女子、中間与左衛門
 取次三才女子、各相調了、祭地鎮屋敷ニ安鎮、大角主殿允納之、

十三日、庚子、屋固札宇治之宗好方へ持遣之、

十五日、壬辰、出京、向勸亞相、産穢之間、自門外以奏者見舞之由申了、○下略、近衛龍
 山、奈良ニ隠ル
 ハコトニカ、ル、三月十五日ノ條ニ收ム、

廿六日、癸卯、無量院殿月忌、神恩院觸穢也、燒香不參、

廿八日、乙丑、天陰、廿六日ニ宇治へ左馬允ニ壺ヲ持遣之、今日内々予可下向之由申遣、
 然共口中相煩之間、明日邊可下向之間、可相待之由遣書狀、午剋ニ罷歸、茶ニ色中茶・別
 義ソウ、到來了、杉皮十一間取之、一間廿五錢宛也、

廿九日、丙午、天陰、○中略、宇治茶取中之由申之間、爲見物下向了、侍從・(長尾)舜藏主・還竹
 召具、已刻罷着、橋以下初而見之、驚目了、

カシ上林所見物、火倚爐四十八、在之、茶誘之者五百人斗可在之歟、宇治一番之繁昌之由申了、
(久茂)次森所罷向、中々上林三分一之體也、次山田入道宗好、予壺ヲ遣所也、一兩日以前ヨ
 リ遣左馬允、唯今罷向、宗好罷出令馳走了、在夕食之義、各召具者下々マテ申付了、
 卅人余在之、予壺侍從壺ニ誥茶、持上洛了、宗好二百疋、女房へ紅帶二筋、侍從宗好
 二料紙田舎幣、十帖・五明五本、遣之、及暮歸宅、

四月一日、丁未、天晴、○中略、玄三來、相伴、夕食、還竹三人、

四日、庚戌、天晴、午剋曇、普請堀也、霜クスレ堀上也、屋敷之西ニ重堀也、

七日、癸丑、○中略、眞如堂東陽房へ罷向、於茶湯座暫相談之中有小漬、次參德大寺殿、自

上林久茂

森

山田宗好

兼治長女ノ
社參
殿原中間

是歸家、

八日、甲寅、侍從女房衆產穢日數卅日明、息女召連來、二荷・兩種持來、相伴朝飧、次女社參、其砌予付名、御滿、侍從滿千代ト云、以其儀如此、繁昌弥滿足了、殿原・中間・地下女共悉召寄、以強飯吞酒、此義丹後ヨリ使者罷上相調也、後剋使者被下之間、遣侍從片衣、侍從拂底之間、予遣之、然共遣侍從分也、○下略、前田玄以、秀吉ヲ見舞ハンガ爲メ、尾張ニ下ルコトニカ、ル、四月八日ノ條ニ收ム、十日、丙辰、天晴、唯神院殿社參、於神龍院燒香、○中普請、河原者廻數垣申付之、十一日、丁巳、天晴、風、妙心院・舜藏主來、暫相談、普請昨日數垣之堀々之、左京助奉行ニ申付之、○中自牧庵書狀到來、先日人夫以下之儀弥頼入之由申來、相意得之由返事了、

十二日、戊午、當番也、及夕祇候了、柳原亞相・富小路極藤相番也、各祇候相談了、自今夜一人ツ、クツロキ、兩人可勤御番、然者柳原可有退出之由申、尤同心退出了、霄程於伯所勸亞相・大炊御門・左馬允・富小路・予・亭主暫相談了、十四日、庚申、○中略、秀吉、新亭ノ外濠ヲ掘ルコトニカ、ル、四月十四日ノ條ニ收ム、直禁中邊万里小路・勸修寺罷向、參德大寺殿、勸亞相与在、將基、及夕販家、

甲斐屋助左
衛門尉
女盲目

廿日、丙寅、○中喜介京へ遣、五德之事申付之、聖護院在所者甚右衛門尉（鉄）放之灰木ヲルテ、持來、則皮ヲ取、ケツリ干之、廿一日、丁卯、出京、向万里、次參德大寺殿、次向牧庵、自是販宅、廿六日、壬申、○中清三位、今中越中同道、進夕飧、及晚歸京、玄三來、歸京以前音曲有之、越中今春フシ也、客歸京已後出京、向勸亞相、門外ニ遊山也、對面相談中、中山（親經）黃門來、入座敷暫相談了、來廿九日、將基之衆被誘引可有來臨之由申、德大寺殿次第之由被申也、德、（全也）久我殿へ月次へ御出、然間廿九日之義未定也、向清三位、自是販河東、廿九日、乙亥、○中伊賀衆甲斐屋助左衛門尉二三日令滯留、唯今罷下、帷令所望之間遣之、新調、侍從方ニ在茶湯、罷向、妙心院・周超相伴、四五日女盲目二人令滯留、五月二日、戊寅、○中略、和仁王、草薙ヲ疾ミ給フコトニカ、ル、五月一日ノ條ニ收ム、向正親町黃門、（重秀）被請小座敷之由罷向、女房衆對面、給（子マキ）給、暫在之、自是販宅、重香箱出來、ナシ地、代九斗申付、喜介未下、十五日、辛卯、○中自高野還竹來、北野能弁卷敷持來、一盞、十疋遣之、十九日、乙未、神龍大明神へ侍從參社、今日用魚味、去正月ヨリ備魚味、仍用之也、

廿二日、戊戌、天晴、○中江州日野中村与三郎當月祈念之音信、金子壹分・熨斗貳百本、自大通庵曝布一端、自外池女房衆三十疋、例年罷上中間也、兵庫助取次之、庭之松之古葉中間共申付取之、二階尾之屋禰拂除申付之、大通庵ヨリ到來之布御方之女房衆へ遣之、自南都銚（銚方）之風爐三ツ到來、神龍院一・侍從一・予一、三十疋宛也、代即渡遣了、左馬允宇治へ遣、釜之義也、

廿四日、庚子、江州日野中村与三郎方へ御祓・薰衣・香三袋、大通庵へ御祓・紅帶二筋（シヤ）帶也、外池女房衆へ御祓、撫物二色、神供遣之、

書狀之返事滿田方へ申遣了、彼使者今朝認之儀申付之、差下了、醍醐天神之禰宜爲見舞來、楊梅・梅子一籠持來、對面、進一盞了、井ノ水替之、川原之者申付之、ヲカ引松木一本切之、板之儀申付之、壁・中門屋禰・湯殿板敷之義也、

廿六日、壬寅、還竹高野へ歸、無量院殿燒香○中江州日野門屋助右衛門尉當月祈念之音信、百疋、書狀到來、

廿七日、癸卯、屋敷ノウラ普請五六人、川原者四人申付之、○中門屋助右衛門尉御祓書狀之返事相調（信）下使者了、兵庫助取次之、

門屋助右衛門

醍醐天神
井ノ水替

兼治室社參

六月十日、乙卯、唯神院殿社參燒香、
十二日、丁巳、出京、向勸亞相、對面、次清少、次德大寺殿、次參近衛殿、（信）暫祇候了、自是直販宅、
十五日、庚申、○中半夏生廿日已後也、清三位入道來、及暮販京、彼女房衆義（付殿方）ニ在被申結義、相談了、

十六日、辛酉、侍從女房衆產百日過之間社參了、○中
昨日十五日トキ宗加來、刀悉拭之、罷歸之時帷遣之、
十九日、甲子、神龍大明神侍從社參、

廿二日、丁卯、青女母年忌、於神恩院卒度追善、青女登山燒香、
廿三日、戊辰、民部卿法印、當所（アテ）如此、玄以へ以書狀持遣菓子、使者（喜介）返事在之、
○中自木下道正方周超方へ申來、對面、下盃、（青銅參貫六百文、）

廿六日、辛未、八幡近邊森之在所ヨリ申來云、先年誓紙以連署致之、酒之義也、今度此返祈念之儀女來而云、相尋子細之処、右誓紙之筋目無相違、然共依女義恐神意申之、四人祈念之義也、別而令懇望之條、領掌、今朝於神壇調之、修行之、

木下道正

廿八日、癸酉、○中略、羽柴秀吉、大坂へ下向ノコト、侍從息女色直、各召寄進一盞、強飯喰之、ニカ、ル、六月二十一日ノ條ニ收ム、繁昌祝義満足了、自八幡森之在所於取來渡遣之、田口左介取次之、○下略、長岡忠興、上洛ノコトニカ、ル、六月二十八日ノ條ニ收ム、

廿九日、甲戌、○中略、鷹司殿御使、御帷一、給之、先日御成之御禮之御使ニ令對面進盃、○鷹房、近衛龍山等ト共ニ吉田兼和ノ亭ニ臨ムコト、六月二十五日ノ條ニ見ユ、侍從方へ東門三十、被遣之、罷出之由申云々、○中略、長岡忠興、大坂下向ノコトニカ、ル、六月二十八日ノ條ニ收ム、御手洗水ヲ以テ行水、清淨、次入菅貫之輪、○下略、祓ヲ獻ズルコトニカ、ル、六月二十九日ノ條ニ收ム、

〔兼見卿記〕

七

七月六日、庚辰、

○中略、高倉範國死歿ノコトニカ、ル、七月五日ノ條ニ收ム、

參大典侍御局、明日之御

禮申入了、自今日申入義、乍自由、明日星祭修行之旨御理申入、毎年此分也、次上藤之御局、次親王御方、以大御乳人申入、次若御局、次長橋御局、次向勸亞相、所勞養性之間不對面之由被申了、次德大寺殿、次歸宅、

七日、辛巳、○中略、次家中祝儀、次神壇修行、次各禮ニ來、對面、進盃、於神壇七星備七種菓子祭之、

十五日、己丑、

○中略、秀吉、美濃下向ノコトニカ、ル、七月九日ノ條ニ收ム、

例祝各差之、不相替満足了、

廿二日、丙申、出京、伯へ罷向、屢相談了、○下略、炎于祈禱ノコトニカ、ル、七月二十二日ノ條ニ收ム、初亞相來、數刻談了、

廿六日、庚子、無量院殿燒香、

八月二日、丙午、○中略、

入夜雨頻降、當番也、侍從參勤、及夕内々之衆申沙汰、召地下人、雖在之、雨降之間、於陣座在之云々、

廿二日、丙寅、出京、

廿六日、庚午、雨降、無量院月忌燒香之事、持病口中依發病不參、

廿七日、辛未、早天光源院へ彼山伏ニ相添使者喜介、申遣、○中略、千家方へ書狀調來、

内裏之南新町ニ面へイタ在之、取遣之、五十疋ニ所望之、雲州牢人也、不及替可進之由再往申云々、

廿九日、癸酉、禁裏御祓、親王御方・若宮御方各進上、御祓修理進持參了、

九月三日、丙子、天晴、○中略、安田左近允・平左衛門尉重服十三月罷出了、普請、月齋之東

堀之、惣別古堀之、其内猶堀之、左京助奉行之、

五日、戊寅、○中略清少納言息參藏人、明後日七日、拜賀、雜色之狩衣以下借用之由申來、

明日可持遣之由返事了、

祝重邦來、對面、進盃、竹五本山中ヨリ所望、遣之、

九日、壬午、早旦社參、兩社神事如常、

歸宅、祝義、御方之衆各相伴、自御方二荷・兩種持來、

○中略、吉田兼和、羽柴秀勝二鎮札ヲ贈ルコト、及ビ吉田淨勝死去ノコトニカ、ル、十月十七日ノ條、九月五日ノ條ニ收ム、

禁裏爲御禮罷出、侍從口中相煩不罷出、先向勸亞相對面、上へ御禮之義相談、大御乳人へ參申入可然之由諷諫了、即參、先大侍典御局へ參、主上へ御禮之旨申入、御局對面、給御盃、退出、（豐九）駟而可有披露之由仰也、次上臈之御局、御前へ御參之由也、次大御乳人へ參、御方御所・若宮御方御禮申入之旨申、御膳之時分也、御前へ御參也、女房館具申退出、次若御局、次長橋御局、向万里小路、行水也、申置罷出、路次へ使者來、可對面之由云、方々爲禮罷向之間、不及懸御目之由申歸了、參德大寺殿、於路次懸御目、御禮申入了、○下略、吉田淨勝、死去ノコトニカ、ル、九月五日ノ條ニ收ム、

十日、癸未、○中略

唯神院殿社參燒香、○下略、吉田淨勝死去ノコトニカ、ル、九月五日ノ條ニ收ム、

十一日、乙酉、修行三座、万里小路・牧庵來、遂晚炊了、及暮皈京、

十九日、壬辰、神龍大明神侍從參勤了、

廿二日、乙未、（德雲院全宗）德雲軒へ爲談合出京、他出、東陽房へ罷向、在寺、於小座敷相談、德雲

香貝

へ之儀也、入魂了、栗餅茶在之、直歸宅、御番也、予參候、柳原亞相与相談了、貝香

百五十枚、コソケ可進上之由、長橋御局ヨリ被仰出、畏之由請取之、

廿三日、丙申、早天退出、午刻雨降、終日不止、中村与三郎使者差下了、御被_{ゆ。け}具、弓付、

大通庵へ紅帶二筋、其他女房衆へ御祓、滿田方へ遣書狀也、

廿五日、戊戌、天晴、先切之松木、枯之間、切之、左馬允・源三郎ニ遣之、（下）本木一間ニ中二本今朝

取入、大工一人太郎左衛門、茶湯之水棚之邊直之、有尾來、昆布・食籠少持來、昨日木役

壹斗八升歟、當年不弁之間、用捨之儀以舜藏主理之間、即相意得之由返事、爲其禮下

山、此間脚氣以外相煩、然共祝着候、余令下山之由被申了、

廿七日、庚子、○中略宇治ヨリ山田宗好折紙、鯉一、到來、令皈宅、正親町黃門へ相遣之、

修理進遣之、

卅日、癸卯、天陰、○中略、普請、侍從方之藪垣申付之、奉行喜介、

十月三日、丙午、早天退出、齋了、又出京、直ニ向盛方、禮於門外、○下略

十日、癸丑、唯神院殿社參燒香、○下略

廿五日、戊辰、出京、向勸亞相、中山黃門參會、有一蓋之義、

廿六日、己巳、無量院殿燒香、禁裏御謠、堀池致祇候之由申了、

廿九日、壬申、友田上洛、爲見舞罷向、(宗叱)タビ一足遣之、庭上へ被出參會、先客來在之、

仍如此也、申禮罷歸了、直向勸亞相、他行、參德大寺殿暫申談、南豐軒、京州齋祇候也、及暮歸宅、

十一月五日、丁丑、侍從方爲造立作事、今度幽齋被相催、依助成、俄申付也、連々材木

等用意之也、大工三人太郎左衛門・新左衛門入道、橘左衛門、ヲガ引二人、

六日、戊寅、大工・ヲガ引同前、

七日、己卯、○中略、大工・ヲガ引同前、午刻雪降、

九日、辛巳、大工・ヲガ引同前、橘左衛門子兩人自今日相添之也、

堀池宗叱

吉田兼治方
ノ作事
長岡幽齋助
成

十日、壬午、大工・ヲガ引同前、松木一本切之、破風之義也、

唯神院社參、燒香、東陽坊自作日在所ニ在之由聞之、今日茶湯俄興行、招寄了、及暮之間、令逗留、今夜於神龍始霄程相談之由、舜藏主申來之間、罷向、及深更相談了、還竹來、

十一日、癸未、天晴、大工五人・ヲガ引同前、彦四郎大工別屋之水棚申付、出來、自鞍

馬ヲカ板六間持來、召置之、○中略、蘿蔔之義左京助ニ申付之、○中略、鹽田彦三郎子十二才、不

慮來之間、召置了、

十二日、甲申、御番也、及暮參内、相番富少路秀直、持明院相模相談了、(備考)霄程伯所へ罷

向、勸修寺亞相・持明院來、及深更各相談了、

十三日、乙酉、早天退出、

十五日、丁亥、侍從方立柱、下地之分悉出來了、

十六日、戊子、普請、及子刻祭大極、

十七日、己丑、普請、屋禰悉出來了、○下略、秀吉、織田信雄ト和睦ノコトニカ、ル、十一月十五日ノ條ニ收ム、

十八日、庚寅、山中へ遣使者、眞如堂ヨリ相理義在之、藏橋左介召寄、後刻來、杣體相

談了、

十九日、辛卯、神龍大明神へ侍從社參、

自丹後幽齋書狀、今度侍從爲作事料合力八木十五石到來、書狀返事相調遣了、

廿日、壬辰、○中略、北條氏直ノ使者來ルコトニカ、ル、十一月二十日ノ條ニ收ム、侍從作事之用松板廿五間召寄了、○中略

塗屏小手三丁出來、今度新調也、

廿六日、戊戌、○中略、秀吉、妙顯寺歸城ノコトニカ、ル、十一月二十五日ノ條ニ收ム、齋了出京、向勸亞相、(勸修寺書)內府入道對座申禮了、

內府云、今夕一會可興行、予可來之由直談也、再往斟酌、俄之體不取合也、是非相待

之由度々被申之間、可參上之由申了、內府即皈宅、屢亞相与相談了、德大寺殿ニ待申

之由、亞相申理罷出也、亞相ニ後刻於禁中澁谷參御謠在之由被申訖、參德大寺殿、南

豐軒与御將基、(以下同シ)德仰云、先刻自勸內府、予ニ一會興行之間、德へ可有御出之由申來了、

予申云、度々雖令斟酌、直ニ被申之間、不及是非罷向之由申入了、即自內府可參之由

左右在之、德御供申罷向、茶湯座敷へ罷向也、德、次予、向ニ內府入道、次伊勢加々

右衛門入道、丁寧之仕立也、次御茶、加々右衛門タツル也、德、次予、內府へ數度申

入、ウスクらの間、予先可吞、暫辭退、然共御理之間吞之、次內府、次加々右衛門、

茶湯

茶碗別也、茶過罷立、及暮皈宅、

廿七日、己亥、普請侍從方申付之、○中略、秀吉、大坂下向ノコトニカ、ル、十一月二十七日ノ條ニ收ム、葦板三荷取之、鞍馬ヨ

リ持來、(籠カ)鍮治クキ三ツミ、四マカシラ・ナントノ引手一、持來、各代悉渡了、鈴鹿兵庫助娘竹松、

田中在所檣弥五郎子也、近年當所ニ在之、今日替名爲禮來、双瓶・強飯一・折肴、

十二月七日、己酉、今度越州ヨリ到來之金子沽(七)、七百侍從方作事料ニ大方相濟了、但

大工作料一粒モ未相渡了、(之カ)

八日、庚戌、○中略青女出京、及暮罷歸了、(清少納言御被御表ニ所望也、相調持遣了、)

九日、辛亥、天晴、暖氣如春、普請、侍從方之庭芝築地申付之、今日不出來、

十二日、甲寅、天陰、○中略

當番也、(孫女相煩)孫女相煩之間、持明院へ相模之義申遣、相意得之申返事了、

十四日、丙辰、屋固札、大將軍鎮札、天度百座各讀誦之、相調了、今度侍從方之作事南

方也、大塞之間、安鎮祈念了、雨降、

孫女得驗氣、祝着云々、

十五日、丁巳、天度百座讀之、屋固祈念之義也、普請十人斗、丹後長岡入道(國書)ヨリ八木拾石

到來、今度作事合力之義也、都合廿五石・青銅五百疋上來也、去月十一月五日ヨリ至今日大工九人、一日無懈怠申付之、普請在所各數度之義也、○中略

自丹後之八木大工作料方悉渡之、太郎左衛門壹石五斗・新左衛門壹石五斗・吉左衛門壹石五斗・源七郎壹石・弟平次郎壹石・二郎四郎壹石・ヲカ引甚九郎壹石・同新九郎五斗・壹石疊指渡之、○下略

十九日、辛酉、○中略

侍從方之作事大方首尾、

廿日、壬戌、出京、向勸亞相、明日大坂へ下向之由被申了、

内府入道へ罷向對面、明後日廿二、内々招請之處、德大寺殿月次之連歌へ出座指合也、連々同道可被相談之由約諾之間、同者明日廿一、晚二來談之義申之處、同心也、然間參德大寺殿申入、被他行之間申置了、向富小路面談、屢相談了、柳原亞相面談之内、烏丸黃門壹石・正親町黃門來、兩人滯留之中、予罷出、自是皈宅、

休庵へ鯽一、持遣之、他行、申置之由申了、

栗田栗田口疊指召寄、侍從方へ申付之、新帖十六帖、

廿一日、癸亥、午刻勸内府入道・德大寺殿・古市入道來、於客殿暫相談、將碁已下在之、

次於小座敷進夕餐、茶湯、仕立平折敷之體也、兼而申理、如此也、内府入道一樽持來、古市入道五明二、持來、及暮歸京、時々雨降、傘各持進之、

廿二日、甲子、早天勸・德へ遣使者、修理進、自德使者來、

廿三日、乙丑、自勸入書狀到來、不及返事使者へ申返了、於節憚之故不及返事、

佳例煤拂、○下略

桶結

廿四日、丙寅、桶結召寄、

廿五日、丁卯、侍從方之作事今日悉首尾、尤満足了、

廿六日、戊辰、周超請晚炊之間、罷向、何羨カセ・妙心院相伴、妙蓮燒香、佳例餅ツキ、社殿依皆損不相調之間延引、今日於京都少相調之、明日可申付所用了、銀子一枚沽啣、

青銅七百疋、

廿七日、己巳、○中略今夜侍從移徙、拂除已下各申付之、大工三人、○中略

入夜侍從各移徙、一庄召寄祝粥、寺衆方二十疋宛持來、神妙院三十疋也、内々殿原者十疋宛、外様殿原七人、三疋、中間七人、參疋、予百疋持遣之、於新屋各祝義、尤繁昌満足力、來春者社領所へ不知行之分安堵、尤當所之仰擁護而已、

兼治新第へ移ル

廿八日、庚午、天晴、暖氣、醍醐禰宜來、不及對面蓋盃、大工橋左衛門親子侍從方之戸一枚新調之、侍從加級之儀、勸修寺へ以折紙遣使者了、

廿九日、辛未、燒風呂、申刻爲歲暮御禮出京、先參内裏、大典侍御局御禮申入、次上臈之御局、次大御乳人・御方御所様・若宮様へ申入、次若御局、次長橋御局・休庵・万里小路申禮、上乘院、次勸修寺、敢前罷向、參内、又罷向、對面、有一盞之儀、此砌(壬生朝考)官務來、

侍從加級之義未勅許、種々申理之段、不入聞□□公私之儀也、不及是非次第也、若御局へ參此段御理□申入了、次參德大寺殿、對面、次參近衛殿、入江殿□□成也、委細奏者へ申置了、自是歸家、

〔言經卿記〕 五 十月一日、甲辰、天晴、土用、

- 一、北向・阿茶丸等冷泉(爲禮)へ今日禮之被罷向了、
- 一、大和入道宗恕來談了、

- 一、美澤右兵衛門大夫・沙弥福千世・小川善大夫等禮こ來了、
- 二日、乙巳、天晴、土用、夜雨、
- 一、亡文卿御忌日之間、淨花院性心濟(寄下同シ)こ相伴了、
- 一、冷泉へ罷向了、入夜冷泉來談了、
- 一、若狹來了、
- 一、誓願寺・眞如堂等へ暮々參詣了、
- 三日、丙午、晴陰、午刻ヨリ下未、
- 一、因幡堂へ參詣了、山田弥平次へ罷向了、
- 一、冷泉ヨリ海塚(具平同シ)へ文共被遣了、
- 四日、丁未、天晴、
- 一、白川ヨリ烏帽子借用、遣了、
- 一、大和宗恕來談了、
- 五日、戌申、晴陰、
- 一、海塚ヨリ冷泉ヨリ使歸了、返事共有之、

- 一、冷泉・大和宗恕等來談了、
- 六日、己酉、天晴、
- 一、冷泉へ罷向了、
- 一、大和宗恕入來了、
- 七日、庚戌、天晴、
- 一、冷泉へ罷向了、次多上總介^{〔野九〕}忠雄所へ罷向了、一盞有之、談合子細有之、同讚岐守忠宗等談合了、次ニ冷泉へ又罷向了、夕喰有之、
- 一、明王院・曾我入道・秋田紀介等入來云々、
- 一、白川ヨリ烏帽子被返了、
- 八日、辛亥、天晴、
- 一、木屋藥師堂・眞如堂別時分ニ暮々參了、
- 十日、癸丑、天晴、
- 一、北向里へ被行了、
- 十一日、甲寅、天晴、

- 一、眞如堂暮々法談聽聞ニ參了、
- 十二日、乙卯、天晴、
- 一、空中宗悅忌日之間、上善寺眞忠濟ニ相伴了、
- 一、楠甚兵衛妻^{〔成長〕}、北向イモト、朝喰呼之、來談了、
- 一、秋田久大夫ヨリ小袖返了、茶子粉、送之、
- 一、眞如堂法談聽聞ニ參了、次安禪寺殿へ參了、
- 十三日、丙辰、天晴、
- 一、楠甚兵衛妻暮々歸宅了、自昨日逗留了、
- 一、本願寺ヨリ河野越中法橋上洛了、各身上之事也、
- 一、暮々冷泉へ罷向了、一盞有之、
- 十四日、丁巳、天晴、
- 一、冷泉へ罷向了、夕喰有之、暮々冷泉入來了、
- 一、大和宗恕・古市宗超等入來云々、
- 十五日、戊午、天晴、

- 一、早朝ニ冷泉へ罷向了、談合子細有之、朝食有之、後刻北向被罷向了、予食後歸宅了、
- 一、暮々冷泉へ罷向了、次冷泉同道、眞如堂へ參了、
- 十六日、己未、天晴、
- 一、冷泉へ罷向了、河野越中法橋來了、談合子細有之、暮々又罷向了、一盞有之、
- 一、冷泉暮々來談了、
- 一、葉室母儀(頼高)被來了、
- 十八日、辛酉、天晴、
- 一、陽春院殿御忌日之間、淨花院內福泉庵弟子宗祐濟ニ相伴了、
(山科言經室葉室氏)
- 一、安禪寺殿ヨリ市川女ヤ、御使、昨日事共承了、北向同對顏了、槿花振舞了、後刻參可申上之由申了、
- 一、松林院宗順來談了、
- 一、亡母御忌日之間、花開院御墓所へ參了、次誓願寺へ參了、
- 一、暮々ニ冷泉來談了、
- 十九日、壬戌、天晴、

猪子祝言

因幡堂藥師

- 一、圍爐裏口ヲアケ了、
- 一、暮々四條來談了、
(隆昌)
- 廿日、癸亥、天晴、
- 一、安禪寺殿へ參了、吸物一盞有之、次冷泉へ被呼之間、罷向了、河野越中同被來、談合、一盞共有之、次北向・阿茶丸等同被罷向了、猪子祝言有之、一盞有之、
- 一、楠甚兵衛妻、北向同道ニテ被來了、被留了、
- 廿二日、乙丑、天晴、
- 一、因幡堂藥師へ參詣了、心前罷向了、留守了、
- 一、楠甚兵衛妻被歸宅了、
- 一、冷泉へ罷向了、談合共有之、
- 一、大和宗恕被來云々、
- 廿三日、丙寅、天晴、
- 一、花山院養母北向ニ談合子細有之トテ、双錫被持被來了、則北向對顏了、
- 一、暮々冷泉へ罷向了、談合共有之、

廿四日、丁卯、晴、午刻ヨリ雨、夜晴、
 一、北野社參詣了、次安禪寺殿へ參了、香ハコ進上申了、次夕凧被相伴了、暮々歸宅了、

廿五日、戊辰、天晴、晴陰、

一、北野社へ參詣了、

一、北向・阿茶丸等冷泉へ朝凧ニ罷向了、予後刻罷向了、夕凧有之、

廿六日、己巳、晴陰、

一、北向、楠甚妻同道立賣ナトへ被出了、

一、入夜冷泉へ罷向了、談合共有之、河野越中同來了、

廿七日、庚午、天晴、

一、早朝ニ冷泉へ罷向了、談合、朝凧有之、後刻又罷向了、河野越中同來、一盞、談合共子細不相調、無念無他了、河野越中海塚へ下向了、

一、楠甚兵衛殿ヨリ書狀上了、

廿八日、辛未、天晴、

一、晚景ニ永運坊へ阿茶丸令同道罷向了、

廿九日、壬申、天晴、

一、北向、楠甚兵衛妻所へ被行了、直ニトマラレ了、

一、大和宗恕・永運坊・曾我入道等入來了、

十一月一日、癸酉、晴陰、

一、松林院へ罷向了、留守了、次遣迎院へ罷向了、ニナヒコシ令借用了、明日楠甚兵衛妻越前國へ發足其用也、

一、曾我入道禮ニ來了、

一、松林院ヨリニナヒコシカサル、立賣衆也云々、間、則楠甚へ遣了、遣迎院ノコシ被返之間、則遣迎院へ返了、

一、入夜北向被歸了、楠甚妻同道明日越前國へ發足イトマコイニ入來了、勸一盞了、次出行文、雷鳴・狐之札等書之遣了、次北向同道ニテ被歸了、

二日、甲戌、天晴、

一、亡父卿御忌日之間、性心濟ニ相伴了、

立賣衆

狐之札

- 一、冷泉被來了、
- 四日、丙子、天晴、
- 一、永運坊へ罷向了、一盞有之、
- 五日、丁丑、天晴、
- 一、大和宗恕へ罷向了、他行云々、
- 六日、戊寅、天晴、
- 一、暮々冷泉來談了、
- 七日、己卯、天晴、
- 一、夕、ス川原へ菟胡ホリニ、阿茶丸令同道罷向了、
- 一、入夜四條入來了、
- 八日、庚辰、晴陰、雪、
- 一、四條女房衆御茶々、被來了、
- 一、吉田ヨリ指貫所望之由有之、遣了、
- 九日、辛巳、天晴、

- 一、明王院へ罷向了、烏丸町也、冬菊隨身送之、座禪豆有之、次永運坊へ罷向了、冬菊遣了、
- 一、大和宗恕被來云々、
- 一、入夜冷泉來談了、
- 十一日、癸未、天晴、
- 一、松林院へ折敷等令借用、冷泉へ遣了、
- 一、明日北向母儀空中宗悅一周忌也、夕食申付了、家中衆呼了、
- 一、冷泉へ午下刻ヨリ予・北向・阿茶丸皆々罷向了、ウラ座敷ニテ非時有之、先ツトメ有之、大藏寺善勝・上善寺眞巡等也、次非時相伴也、予・冷泉・四條・永運坊・善勝・眞巡・古市入道・佛師中將・同兵部・与二郎・孫四郎等也、
- 十二日、甲申、晴陰、下未、
- 一、冷泉へ罷向了、母儀空中宗悅禪尼一周忌也、ツトメ有之、大藏寺善勝・上善寺衆十人等也、次時有之、相伴、予・冷泉・四條・僧衆以下也、未刻ニ上善寺へ冷泉・四條・予・北向、其外女房衆等被參了、夕食有之、入夜歸宅了、北向・阿茶丸・ヤ、

其外女房衆昨日ヨリ冷泉ニ逗留了、今夜雨故ニ被宿了、

一、松林院へ折敷以下返了、

十三日、乙酉、天晴、

一、冷泉へ昨日禮ニ罷向了、

一、明王院へ罷向了、持明院同被行了、但兼約有之ト被歸了、次夕漁有之、予・明王院

・南部周防守等也、

一、冷泉へ罷向了、一盞有之、北向入夜被歸了、妙雲被來了、

十四日、丙戌、天晴、

一、吉田ヨリ蘿蔔一荷送之、

一、暮々大和宗恕被來云々、

十五日、丁亥、天晴、

一、冷泉へ被呼之間則罷向了、支證寫之、遣了、

一、暮々誓願寺へ參了、次冷泉へ罷向了、一盞有之、

十六日、戊子、天晴、

一、入夜四條來談了、

十七日、己丑、天晴、

一、徳大寺へ罷向了、白川・京極入道等同被行之、御酒有之、

一、大和宗恕入來了、

十八日、庚寅、天晴、

一、陽春院殿御忌日之間、宗祐濟ニ相伴了、

一、嶋田与介來了、夕漁振舞了、

一、大和暮々入來了、

十九日、辛卯、天晴、

一、阿茶丸令同道、東西野徘徊了、

一、暮々四條來談了、

廿日、壬辰、天晴、

一、毘沙門堂被來了、

廿一日、癸巳、陰、

- 一、大和宗恕被來了、
- 廿二日、甲午、天晴、
- 一、ヤ、御料人ニクイソメ了、祝言了、
- 一、明王院へ罷向了、一盞有之、
- 廿三日、乙未、天晴、
- 一、暮々冷泉へ罷向了、一盞有之、
- 廿四日、丙申、天晴、
- 一、明王院へ罷向了、
- 一、曾我入道被來了、
- 廿五日、丁酉、天晴、
- 一、早朝ニ北野社へ參詣了、
- 廿六日、戊戌、
- 一、大和宗恕・若狹守等來談了、
- 一、北向里へ被行了、

- 廿七日、己亥、天晴、
- 一、中御門後室ヨリ正月事始日次所望故之遣了、
- 一、阿茶丸同道、明王院へ罷向了、談合子細有之、次阿茶丸ニ令加持了、次安禪寺殿へ參了、阿茶丸御所様蓋ニ新進上了、
- 一、暮々冷泉來談了、
- 一、嶋田与介來了、
- 廿八日、庚子、下未、
- 一、北向里へ被行了、味噌ヲ拵了、
- 一、大工——キリハン持來了、
- 十二月一日、癸卯、天晴、
- 一、冷泉へ禮ニ罷向了、一盞有之、次明王院・大和宗恕等禮ニ罷向對談了、
- 二日、甲辰、天晴、
- 一、老父卿御忌日之間、松林院性心濟ニ相伴了、
- 一、聖天へ參詣了、四條同道了、次花開院・阿弥陀寺へ參了、次冷泉ニテ夕湊有之、

- 一、入夜四條入來了、
- 三日、乙巳、天晴、
- 一、疊大工召寄了、五帖オモテカへ申付了、
- 四日、丙午、天晴、
- 一、明王院來談了、夕漁相伴了、
- 一、冷泉へ蛤五十遣了、入夜來談了、
- 五日、丁未、天晴、夜雨、
- 一、晚景ニ町五・六町徘徊了、次冷泉へ罷向了、次入夜冷泉來談、同道了、
- 六日、戊申、天晴、
- 一、明王院へ罷向了、次冷泉へ罷向了、酒有之、次同道了、冷泉來談了、
- 七日、己酉、天晴、
- 一、下京へ徘徊了、
- 一、暮々冷泉來談了、
- 八日、庚戌、天晴、

- 一、嶋田与介兩度來了、
- 一、暮々冷泉來談了、
- 九日、辛亥、天晴、
- 一、明王院へ早朝ニ罷向了、一盞有之、
- 一、安禪寺殿内ニ片桐入道羽柴筑前内衆、菊持罷向了、カウセン・安禪寺殿御侍市川下總守等同罷向了、吸物・御酒有之、次安禪寺殿へ菊持參了、
- 一、入夜冷泉、四條等來談了、
- 十日、壬子、天晴、
- 一、嶋田与介兩三度來了、
- 一、明王院へ罷向了、次冷泉へ罷向了、一盞有之、
- 一、冷泉來談了、
- 十一日、癸丑、天晴、
- 一、四條來談了、大和宗恕・嶋田与介等來了、
- 一、冷泉へ北向、阿茶丸等被行了、

十二日、甲寅、晴、

一、早朝ニ舞人上野介所(多忠雄)へ罷向了、談合子細有之、次冷泉へ罷向了、朝食有之、

一、空中宗悅忌日之間、上善寺眞忠濟ニ呼之、

一、嶋田与助來了、冷泉ノ新九郎等來了、嫁聚之談合也、次西武者小路カン齋所へ遣了、

入夜冷泉・四條來、談合了、

十三日、乙卯、天晴、

一、煤拂了、大澤右兵衛大夫呼之、後刻祝言有之、

一、嶋田与介來了、

一、四條被來了、キリ湯へ入了、入夜冷泉來談、

十五日、丁巳、天晴、

一、大和宗恕來談了、

一、明王院・冷泉等へ罷向了、入夜冷泉來談了、

一、楠甚兵衛ヨリ書狀・鮎鮎一鉢等送之上了、

一、大和宗恕來談、

十七日、己未、天晴、

一、大和宗恕入來了、

十八日、庚申、天晴、

一、早朝明王院へ罷向了、

一、陽春院殿御忌日之間、宗祐濟ニ相伴了、

一、入夜冷泉來談了、

十九日、辛酉、天晴、

一、戒光院來了、

一、持明院ヨリサヤマキ借用遣了、

一、楠甚兵へ奴僕之條先日返事遣了、

一、四條女房衆被來、唐橋束帶具談合了、笏・淺履等借用之間遣了、唐橋被來、談合了、

一、冷泉來談了、

廿日、壬戌、天晴、

一、唐橋ヨリ笏・淺履等被返了、

廿一日、癸亥、晴陰、

一、早朝聖天へ參詣了、

一、暮々冷泉來談、

廿二日、甲子、天晴、

一、北向・阿茶丸・ひめ等冷泉へ行ラル、

廿三日、乙丑、天晴、

一、大和宗恕來談、

廿四日、丙寅、天晴、

一、西洞院(時慶)被來了、近衛殿夏御袍潤色事被申了、

一、四條・冷泉來談、

一、興正院西御方ヨリ書狀上了、

廿五日、丁卯、天晴、

一、聖廟へ早朝ニ參詣了、

一、安禪寺殿御乳人ヨリやう頭給了、

一、冷泉ヨリ生鯛一、送給了、

一、冷泉入夜來談、

廿六日、戊辰、天晴、

一、鞍馬戒光坊來了、卷數札・牛玉等送給了、

一、安禪寺殿御乳人ヨリ阿茶丸へコキ板・コキノコ等送給了、

廿七日、己巳、天晴、

一、大工ツルへハシキ、等持來了、晚こ來、二人也、板共ケツラスル、

一、岩屋不動□佐等來了、茶子振舞了、筭共四五了、

廿八日、庚午、天晴、

一、松林院ヨリ阿茶丸へ玉二、送給了、

一、大和宗恕來談了、

一、正月餅ツキ了、

一、四條入夜來談了、

廿九日、辛未、天晴、

一、清和院卷數持來了、
一、入夜冷泉來談、
晦日、壬申、天晴、

一、歲暮禮ニ持明院・柳原・大和宗恕・嶋田与介、天王寺伶人岡・園(兼政)・東儀等來了、
一、明王院ヨリ歲暮禮ニ同宿被來了、
一、誓願寺長老歲暮禮ニ被來了、

〔舜舊記〕

一 正月四日、於左馬允夜會興行、月齋・周起(兼政)・松樂庵・拙子(兼政)爲同道罷也、

御方へ禮樽代十疋、女房衆へ輕粉箱三ツ、

七日、於月齋興行振舞在之、唯神院神供如例年奉捧之、

十日、唯神院殿年忌、寺衆へ齋、

(吉田衆和) 本所燒香、御女房衆禮布襪一束、

十八日、本所へ振舞、本所兩人・御方兩人・御方乳人・中將・ツル・小宰相・小大夫(女)房夕チ、

二月八日、爲南都見物、侍從同道ニ付罷越、同行教常院・宮内卿・民部丞、供衆鈴鹿兵庫助也、

十一日、從南都下向、

十二日、御方ニ夜會興行、粥、

廿三日、雨降、侍從殿へ粥振舞、

廿六日、内裏御能在之、紫震殿之前櫻庭ニテ有之也、○猿樂御覽ノコト、二月二十六日ノ條ニ見ユ、

於當院妙心院・有庵・周起・月齋・周弥・宗圓、此衆ニ點心之振舞在之、

三月五日、於本所花見之興行、各寺衆、又ハ侍共一種・一瓶御遊也、

六日、禁中御能有リ、○禁裏猿樂ノコト、二月二十六日ノ條ニ見ユ、御方息女始而誕生也、

七日、拙子、御方爲禮樽代三十疋女房衆へ遣者也、

十四日、妙心院へ本所請待也、御方・拙子・民部丞・松樂庵此衆也、

廿九日、宇治茶見物トテ本所就同道罷越、見物、山田宗好所ニテ眞壺四ツ見ル也、拙子

ニも茶極上半袋、揃列代半袋送也、

四月一日、拙子所へノ茶申付候也、本葉二斤半在之、ナニカニ小斤在之、

廿九日、晴、晚侍從座敷開之會アリ、

五月十六日、本所御方・女房衆以下悉振舞リ御出也、

天正十二年雜載

七月五日、本所へ目出度事之爲禮義、樽水瓶・索麵三把・瓜十、
十一日、本所嘉例之目出度祝義二罷、樽代、貳十疋、
十二月廿七日、侍從殿移徒、爲禮、寺衆、樽代也、惣殿原衆・中間衆迄樽代也、予、侍從
殿へ參十疋、御女房衆へ水瓶一双・昆布一把・豆腐十疋遣之、
去ル十日唯神院殿十三年忌爲佛事、予執行之、寺衆・殿原衆二齋也、

〔地下家傳〕十八院司 河端 斷絶 下北面 藤原通次

同十二年二月廿五日 (天正) 敘正五位下、

〔地下家傳〕八藏人方 出納 平田 姓中原 職清 職定男、森修理 大夫源基時女、

天文十九年月日 生、

永祿三年正月十五日 敘從五位下十一才、

年月日 任左近衛將監、

天正十一年月日 敘從五位上、卅四才、

年月日 任豐後守、

同十二年三月十日 敘正五位下、卅五才、

平田職清

丹波頼元

〔地下家傳〕一六位藏人付院藏人 小森家傳 姓丹波 頼元

天正十二年九月十四日 敘從五位下、

年月日任典藥頭、任備後守、

慶長五年月日 出家、

山形光政

〔地下家傳〕十八院司 下北面 藤原氏 稱號 山形 光政 光秀男

同十二年十二月十日 敘從四位上、四十四才、 中四、

資宗 光政男

天正十二年十二月三十日 敘從五位下、

松波資久

〔地下家傳〕十八院司 下北面 藤原氏 稱號 松波 資久 光隆男

同十二年十二月三十日 敘從五位上、廿三才、

同日 任左衛門大尉、

藤原豊家

〔地下家傳〕十八院司 下北面 井家 斷絶 藤原豊家 山形加賀守資 宗朝臣次男、

同十二年十二月三十日 (天正) 敘從五位上、

天正十二年雜載

〔改名歎狀〕

柳原家記錄
九十七所收

正四位下行右兵衛佐平朝臣時通誠惶誠恐謹言、

請特蒙天恩、因准先例改時通爲時慶狀

右謹考舊貫、改名字聖代之流例也、爰時通有所存之子細、望請天恩、因准先例爲時慶、將被下宣旨矣、時通誠惶誠恐謹言、歎狀

天正十二年三月朔日

正四位下行右兵衛佐平朝臣時通

西洞院時通
名ヲ時慶トス
改メントス

時通無用改名事宜然之様御奏達所仰候、恐々謹言、

三月朔日

右兵衛佐時通

謹上 頭中將殿

(中山慶親)

〔平松文書〕

三
○京都大學所藏文書所收

正四位下行右兵衛佐平朝臣時通誠惶誠恐謹言、

請殊蒙天恩、因准先例、以本名通字改慶字狀

右謹考舊貫、依有所思令改名者、古今之通規、明時之恆典也、望請天恩、因准先例、早以通字被改慶字者、將仰聖化之無偏、弥知奉公之異他矣、時通誠惶誠恐謹言、

天正十二年三月一日

正四位下

〔三浦周行氏所藏文書〕

一
○京都大學所藏文書所收

藏人所

檢納廣絹拾疋

右美濃國所進當年御服内檢納如件、

天正十二年十一月十六日

出納中原朝臣職清

藏人右中辨藤原賴宣(葉卷)(花押)

〔狩野亨吉氏蒐集文書〕

十四
○京都大學所藏文書所收

官吏生行事官取立事

右史生行事官宗岡朝重、天正十三年五月十二日、先代官務朝芳(正徳)一字ヲ遣取立候、後文祿二年朝重死去、官吏生斷絶候、其後當時行事官初代山口勝次郎紀朝治者、父山城國西郊川嶋住人宗岡綱友ニ而當局家來候處、慶長五年九月、先代朝芳申行取立、官吏生行事官一字ヲ遣、官位宣下候、後到只今代々一字ヲ遣拜補史生、官位宣下候、右證書注左候、

女房奉書

天正十二年雜載

官吏生行事官

仰天正十二
十二年廿八

きやうしくわん事、くわんむにつき候事、まされなき〔事ニカ〕存候まゝ、ありきたること
く申つけ候へのよし、申〔給へく候カ〕、このよしちとつたへ〔まいらせ候乙〕のしく、

藤中納言とのへ

常御座所ヨ
リノ方角

〔諸帖抜粹〕

一、常御座所滿中ヨリ可知方角事〔勘解由小路〕故二位實茂在〔九條〕富卿説云々

一、金神方、

〔兼也〕水無瀬新中納言説云々、
〔三條西實傳〕從在富傳受之由也

實公稱名院前右府也、

常ノ御座所滿中ヨリ六間サキへ

出レハ、其正方ノ兩方へ二間ツ、ヒロカル也、タトへハ卯方兩方へ二間ツ、其次乙方〔甲方〕二間ツ、辰方二間、巳方二間、其サキへ出ル方ノ三ツ一ツ、ヒロカル也、然者兩方へ之一方ノ分十二間也、餘三方可准也、

申庚酉辛戌

辰 乙 卯 甲 寅

申庚酉辛戌

武家、

此一勤事〔昭實〕二條殿申請也、書寫之而已、

于時天正第十二年初秋下旬從一位藤原朝臣兼孝〔九條〕

〔兼見卿記〕

六

正月十三日、辛卯、天陰、御表御被札調之、松井新介母來、双瓶・二

松井康之ノ
母
羽柴秀勝ノ
母

色、鱈一・串柿一把、○中略、秀吉、上洛ノコトニカ、同龜山御次御袋へ音信、次方々へ音信、扇以

下詔之也、

十六日、甲午、天晴、○中略、吉田兼和、羽柴秀勝ニ被ヲ贈ル、毛利河内守母義へ御被・神供、御被

毛利秀頼ノ
母
タミヤ

五也、河州・同母義、□□ヤス部息女也、タミヤ・響也、御まん孫也、各々遣之、鈴鹿喜

介罷出遣書狀、返事在之、百疋喜介料帟十帖、人夫十疋遣之由、喜介罷歸申了、

廿一日、己亥、曇華院殿へ爲御禮參、無御對面、遁齋〔職也〕貳十疋、持參、於門外面會、參近衛

磯邊遁齋

松田政行日
野輝資ノ中
間ヲ殺害ス

入道殿、御對面、日野黃門へ爲見舞罷向、一昨夜彼中間於紫野邊殺害、近日於彼邊致

盜賊、然間自玄以被申付、松田勝右衛門尉入夜彼路次へ罷出相待之處、日野中間通合

理無盡之成敗云々、○下略、御不豫ノコトニカ、ル、正月十八日ノ條ニ收ム、

廿四日、壬寅、天晴、○中略、松田勝右衛門尉爲禮來、五十疋、持來、自門外飯京、即出使者

請之處、既至中川原罷歸之間、不及是非了、

子孫ナキニ
ヨリ祈念

廿五日、癸卯、早々松田勝右衛門尉所へ昨日爲禮遣喜介、
二月八日、己卯、天晴、○中略、秀吉、坂本下向ノコトニカ、ル、二月六日ノ條ニ收ム、自濃州女房衆書狀ニテ申來云、無子孫
之間、祈念之義申來、當座之音信百疋到來、祈禱料之事ハ此方返事次第可調上之由使
者申也、書狀之返事以一書懇ニ申遣了、

男女相剋

男卅、水性、女廿六、未、火性、相剋也、

大原監物

十六日、癸亥、江州甲賀(本向)小原監物書狀百疋、到來、彼室四十一歳、連々無子孫、自去月月水

合性相剋

留、在誕生之様、弥祈念頼入之由申上了、守調遣之、合性相剋之間、先年祈念鎮札等
調遣之、其以來正・五・九月ニ音信了、今度其寄特満足之由申來了、

十七日、甲子、先度申上自濃州祈念之儀上使者也、男卅、女廿六、合性水火相剋也、相生

之祈念、子孫誕生之祈念等之義也、金子貳兩上之、以六百疋可調遣之由申下之処、唯
今之儀乍相届遠路之間、先可調遣分也、彼使者逗留了、

十八日、乙丑、鎮札之箱等大工新左衛門ニ申付之、

廿日、丁卯、自濃州祈念之鎮札等相調之了、

飯川信堅

廿九日、丙子、○中略、(吉田兼信)侍從女房衆方へ、自丹後飯川山城息女女房衆從父兄弟也、當月爲產
生、爲見舞上洛、此方へ來、平產之間、此間ニ滞留云々、鯛十持來、未對面也、

卅日、丁丑、○中略、院中猿樂ノコトニカ、ル、二月二十六日ノ條ニ收ム、自丹後小泉太郎左衛門尉月齋息書狀、鯛二、到來、

今夜返事、五明二本下遣了、○下略、兼和、祓ヲ上ルコトニカ、ル、二月三十日ノ條ニ收ム、

三月十日、丁亥、天晴、土用、○中略、松井新介母來、

十六日、癸巳、玄以爲見舞罷向、(舟橋校覽)清三位入道誘引了、慢頭五十、持參、即對面、在盃之儀

一段懇也、仕合祝着了、○下略、近衛龍山、奈良ニ隠ル、コトニカ、ル、三月十五日ノ條ニ收ム、

四月七日、癸丑、○中略、河田和泉守・宗次郎來、留主之間即歸京之由申了、但羞一盞之由

河田和泉守

申了、

十九日、乙丑、○中略、越州へ好便之間、佐竹羽州・同左近允遣書狀、自羽州茶之義申上之

佐竹出羽守

間、相調、此度差下了、茶之代今度以金子上來之間、左馬允ニ持、宇治之山田宗好方

へ悉渡之相添了、

五月五日、辛巳、天晴、○中略、自丹後長岡入道侍從方へ帷ニ到來、同女房衆方へ到來了、

長岡幽齋

及晚曇、

十六日、壬辰、天晴、○中略、羽柴秀勝ニ祓ヲ贈ルコトニカ、ル、四月十六日ノ條ニ收ム、江州甲賀郡小原監物方ヨリ五十疋・書

狀到來、遣御祓了、

前田玄以亭
へ八朔ノ禮
ニ赴ク

天正十二年雜載

二七〇

〔兼見卿記〕

七月卅日、甲辰、雨降、玄以へ明日拜禮罷向、中山黃門（親權）・五辻源三（為世）

位・齋主（兼被慶志）・清三位入道各對座、百疋持參、奏者松田勝右衛門三十疋遣之、京上下數輩

禮ニ罷出也、在一盞之儀、玄以殊更氣嫌、盃數返在之、盃中山初之、次玄以吞之、次

五辻、又玄以吞之、次予、又玄以、次齋主、次清三位、

八月廿日、甲子、○中（舟橋國賢）自清少納言書狀、丹後ヨリ長治入書狀、干鯉ニ、持來、即返事調遣

之、玄以へ以料紙遣、周超後刻罷歸、他行也、先年肥後社僧上洛之時、禮義之事、道正

西陣也、相違、此段村井時堅ヲ申付之処、休齋令置之不相濟、此度松田勝右衛門へ相談

之処、昨夕召寄道正申聞、兎角玄以へ申聞可然之由松勝申之條、直面ニハ當座之仕合

聞之、少事之禮義利慾之樣可存憚之間、使僧・喜介ヲ遣也、

九月五日、戊寅、○中江州甲賀ヨリ大原監物當月祈念之音信百疋、當月彼女房平産之月

也、祈禱之儀殊更申上間、産生札、百座天度御祓、當月例之御祓御表、相調之、神道修

行三座了、

自越州敦賀女房衆一人尼、六十才計也、來云、夢想之義アリ、面談度之由令懇望之條、對

面數刻相談了、佛法修行之人也、石塚息女之由申訖、今散々牢人也、予爲對面計上洛

越前ノ尼
石塚

神道修行

前田玄以相
國寺ニ於テ
公事糺明

尾池源七郎
半井驢庵
施藥院全宗

之由申了、

六日、乙卯、天晴、大原監物方へ札・御祓返事調下候、使自昨日相待也、

昨日來敦賀ノ女房尼、法文之書物持來、一重栗餅持參、以折紙遣書狀了、書物ヲハ留置

也、

八日、辛巳、玄以へ爲見廻罷向、菓子一折、持參、自昨日相國寺ニ滯留云々、直罷向、松

田勝右衛門相尋之処、於當寺公事有糺明、然間見舞堅禁也、罷出之義中へ無用之由

松勝申之間、不及對面、○下略、吉田淨勝、上洛ノコトニカ、ル、九月五日ノ條ニ收ム、

十五日、戊子、玄以へ爲見廻罷向、菓子五色、石橘・フ・打栗・大豆・アメ、油具持參、

即對面、松田勝右衛門他行之間、尾池源七郎令披露也、貳十疋遣之、玄以一段機嫌入

魂也、（爐）（半井）爐庵對座、少相談罷歸、二重送之、每度如此也、

廿一日、甲午、出京、（施藥院全宗）德雲軒へ葺一折遣之、他行了、及暮販宅、自勢州松島中村与三郎

方當月祈念、例年音信使者罷出、金三朱・熨斗二百本、到來、

十月五日、戊申、善右衛門云、尾州衆女房也、汗穢清淨之儀望之由申云々、有相傳之義、

其上祓ヲ遣之由答、明日女房可來之由、令約束之由申了、

天正十二年雜載

二七一

毛利秀頼ノ母

今度初而遣之、諸事此兩人申付之間、如此了、餅申付之、○中略
毛利河内守母去十八日ヨリ手足ヲ痛相煩、祈念之義自母義書狀、青銅壹貫貳百文到來、不可有別義平癒頓而可祈念之由返事了、

〔北野社務引付〕○山城

淺野長吉千部經ヲ修ス

(天正十二年)
一 八月廿一日ヨリ、經たうにおひて千部御經在、願人坂本あさの彌兵へなり、就其御門(長吉)跡様ヨリ御尋候へ、何とてあん内ハ不申候哉と尋候間、我等申様ハ、我等所ハあん内申候つる、さりなら經たうハよ所の持よて候間、此方へハ其儀不申入候と申候処(長吉)、上様ヲかろしめまらする(い脱カ)のと、越後被申候、何事こかろしめ可申候ハん哉と申候、今度之儀ハ御取合頼入候由申候処(長吉)、今ハ其分重而ハ何様の事候共申とて候、又中日こせかき候ヲ、是もあん内心こ御參候へ由申候也、

國衆伊賀三郎兵衛ノ城ヲ陷ス

〔多聞院日記〕三十一 二月二日、○中略伊賀三郎兵衛城爲國衆速時ニ責取了ト、實否ハ不知者也、

松尾甚太夫

十一月九日、
一、松尾甚太夫陳ノ歸ニ來了、
十二月三日、

伊藤掃部寄子

一、先段於旅所成敗之仁、イノコ平三トテ伊藤掃部ノヨリコ也、嚴重ノ届ニテ衆中ノ貝吹竹坊順良生害了、先代未聞ノ曲事也、

松田縫殿助

一、松田縫殿助息六才、惠心坊ノ弟子ニ昨日入室、今日夕飯汲在之、五明持出了、(略)

〔春日社司祐國記〕○大和

筒井順慶ノ母

一、今日筒井大方殿御社參也、○五月二十三日ノ記事ニカ、ルナラン、

六 三日、天晴、戊申、

松田某内室

一、松田殿内方御社參也、

一、今西内方へ帶一筋給之、一貫引直也、

七 廿八日、天晴、

福住氏

一、福角殿(住)五百文ノ舞在之、ヒタ五十文給候也、

伯樂

〔家忠日記〕三 正月六日、甲馬能も候へて、佐橋と言はくらく越候、

九日、丁馬煩、佐橋越候て少能候、

十一日、己祈禱南城坊被越候、

十四日、壬日待候、くせんちや、宗源ひを御とり候、

十五日、癸會下へり、

日待

鵜殿康秀

松平玄成
松平元勝
築堤

十七日、乙未、雨雪降、くせんちや、太郎右衛門・小兵衛ひを取候、
 十八日、丙申、會下へり、
 廿一日、己亥、岡崎へ禮こ越候、
 廿二日、庚子、會下、東堂大澤より昨日被越候てり、
 廿三日、辛丑、東堂ふる舞候、(鵜殿康秀)鵜八郎三郎殿禮こ被越候、
 廿六日、甲辰、下へ禮こ越候、
 廿七日、乙巳、會下こふる舞こ越候、
 廿八日、丙午、夜大雨降、
 廿九日、丁未、本教坊所こふる舞候、
 二月一日、戊申、新次所こふる舞候、會下へり、
 三日、庚戌、雨降、竹谷へ禮こ越候、備後殿こふる舞候、濱松へ御訴訟こ小兵へを越候、
 九日、丙辰、雨降、(松平玄成)十三郎濱松より越候、
 十一日、戊午、(松平元勝)保々新十(ふか)けんやく、名のへ候、馬・鎧出候、
 十五日、壬戌、ひらんこ入、濱松より知行之内人足すみて中島へ堤つおせこ越候、

永良堤
灸

十六日、癸亥、堤つおせ候、
 十七日、甲子、同雨降、
 十八日、乙丑、同、
 十九日、丙寅、雨降、永良一平所へふる舞よて越候、孫左衛門ふる舞候、
 廿日、丁卯、ふおうすのへり候、
 廿五日、壬申、崇福寺こふる舞こて、ふおうすへのへり候、
 廿七日、甲戌、うちのたやひとうする、
 廿九日、丙子、永良堤つおせ候、雨降、
 晦日、丁丑、ふおうすへのへり候、
 三月一日、戊寅、會下へり、
 五日、壬午、ふおうすへのへり候、
 六月廿二日、小笠原權兵尉、(榑原康忠)榑小平太へ被越候、
 十一月廿三日、乙未、長池よて白繩引セ候、
 廿五日、丁酉、雨降、同池よてあと引セ候、ふおうす歸候、あと白繩、鯉二十本、

廿六日、戊、雨降、小權兵尉殿被越候、

廿七日、己、あたのはら左京殿被越候、

十二月十五日、丁、會下へり、

十六日、戊、中島へ鷹のへこし候、

十七日、己、長池よてあみひるせ候、鯉三十・鮒百とり候、ふろうすのへり候、

廿一日、癸、會下へり、

廿八日、庚、保々においち祝言候、

晦日、壬、濱松へ越年こ本坂ヲ日うけこし候、小笠孫六所こ着候、

小笠原長臣
大河内正澄

〔寛永諸家系圖傳〕二十 大河内正澄 善左衛門尉 ○寛政重修諸家譜大河内正澄譜ニハ「今の呈譜に政澄に作る」トアリ、天正十二年、十五歳にて大權現へ召出さる、○下

青山忠俊

〔寛永諸家系圖傳〕八十 青山忠俊 伯耆守 天正十二年、忠俊七歳のとき、大權現・台徳院殿よ調し奉る、○下

青山重長

青山重長 善四郎、生國參河、天正十二年、重長七歳のときはじめて大權現よ拜調す、○下

竹本光政

〔寛政重修諸家譜〕千二百 竹本光政 權右衛門、天正十二年、めされて台徳院殿に附屬せらる、○下

山成重

〔天正十八年御知行割之記〕青山圖書助成重 仰をかうふり、台徳院殿六歳の御時、御傳となる、知行兩三度増加したまはり、都合一万石拜領すと云々、

此文段よよりて年數を考れば、天正十二年、御傳と成と見へたり、

富士信重

〔寛永諸家系圖傳〕五十 富士信重 市兵衛、生國同前、兵衛ノ上ニ「又二郎」トアリ、

天正十二年、小牧陣のとき、大久保相模守忠隣・本多佐渡守正信を奏者として、東照大權現を拜したてまつり、駿州下形吉原の内におゐて采地をたまはり、○同上書、「大番を其のち關東御入國のとき供奉す、今にいたり將軍家につらへたてまつる、

真田信昌

〔寛政重修諸家譜〕六百五 真田信昌 源次郎、市右衛門、隱岐守、宗家豊後守幸專及庶流庄五郎信育、久次郎幸徳等々今の呈譜に信尹につくる、真田彈正忠幸隆が四男、母は某氏、○中略、天正十年九月二十八日、家後信濃國小縣郡のうちにして逆心を企るものあるのよし、東照宮に言上せしうは、御出馬ありて退治せらるへきむね御書を下さる、十二年、駿河國にをいはしめてまみえたてまつり采地三千石をたまふ、

壬生義雄

〔佐八文書〕

二 壬生
○伊勢

〔封紙ウハ書〕

謹上 八之神主殿

御報

上總介義雄

壬生

如每年之於于御神前御精誠之太麻・鳥子・巡笠給候、御目出度令存候、然者如恆例之、御取花五貫文令進納候、弥武運長久、子孫繁昌之御祈禱憑入候、巨碎者御使可在口舌候間令略候、恐々謹言、

〔異筆〕
〔天正十二甲年〕

正月廿三日

上總介義雄（花押）

謹上 八之神主殿

御報

〔封紙ウハ書〕

謹上 八之神主殿

御宿所

壬生
上總介義雄

〔端裏切封〕

息女伊勢龜
ノ病醫平癒
ヲ謝ス

態令啓候、仍舊冬娘伊勢龜相煩候間、大神樂令立願候處、則平元之間満足候、爲其拾貳貫文之量ニ黄金八兩三分、爲登申候、弥子孫繁昌、壽命長遠之御祈念憑入候、猶彼口上ニも申候之間不能具候、恐々謹言、

〔異筆〕
〔天正十二甲年〕

二月三日

上總介義雄（花押）

謹上 八之神主殿

御宿所

〔佐八文書〕

四 大關
○伊勢

大關

〔封紙ウハ書〕
謹上 佐八神主殿

御返報

美作守清増

如毎年之於御神前有御祈念、御祓并油煙送預候、誠以目出度令頂戴候、態迄御取花三十疋雖輕微至極候、令進納候、尙以無御由斷御祈念所仰候、諸餘令期來信之時候、恐々謹言、

〔異筆〕
〔天正十二年〕

天正十二年雜載

二八一

大關清増

天正十二年雜載

黃鐘十六日

謹上 佐八神主殿

御返報

美作守清増（花押）

二八二

〔伊勢古文書集〕

二上 ○伊勢

〔蜂須賀彦右衛門尉正勝様御墨付〕

其方先代一命之忠切有之候得者、親之爲御恩、我等子々孫々迄見捨申間敷候、此度御師職ニ取立候上者、身付之家來可爲巨家者也、

御師職

蜂須賀正勝

蜂須賀彦右衛門尉

天正十二年 甲申年 ○月日 ナシ

正勝書判

野添新右衛門殿

〔續錦雜誌〕

九 ○信濃

〔和紙〕

〔奉獻納伊勢大神宮

廣田之御師〕

御神樂日記

御神樂日記

須田相模守

滿親

一座

道賢

一座

景實

天正十二年

卯月五日

廣田殿

進之

〔志橋文書〕

○志摩

急度相定條々、

橋三良館殿様御落越候_レ付、唯今者、海秋_{〔秋カ〕}其外之儀御座候_レ付、迫間之郷を急度頼申候、今より後末_ニ至迄、迫間郷不殘橋殿之家來_ニ罷成可申候、然上者、我々をもおろそ_ニら_レ被成間鋪事、今よりハ江之殿_ニ相守可申候、

天正十貳年

岡重良次郎

卯月三日

西喜七郎

三郎館殿様

城源四郎

天正十二年雜載

二八三

世古八郎四郎
 舌古與三左衛門
 大下甚右衛門
 南左衛門次郎
 大地六郎三郎
 元三與助
 間村權八
 中尾備後

乍恐奉願候御事

一、私先祖楠次郎正勝、吉野南帝之御味方ニ而、度々戰功仕罷有候所、吉野没落之節、大和國安部と申所ニ立隱、夫々勢州多氣之國司北畠大納言顯泰卿を相頼引越、國司之幕下ニ罷成、橋次郎正吉と改、爲海賊守禦、勢州迫間郷ニ被爲置、當郷致知行、軍役相務候、和州神樂岡出陣之節者、正吉孫橋三郎和州案内者として、阿保大藏太輔・磯田彦右衛門同道ニ而先鋒被仰付候、依其戰功橋三郎左衛門尉ニ被成下候由、其以後多

氣没落仕候故、私六代以前三郎正元迫間郷家來共助成ニ而住居仕候、右之通之者ニ而罷有候、地士ニ被爲仰付被下、殿様勢州御往來之御節、乍恐御目通ニ罷出、爲冥加奉拜度奉願候、右宜被仰上可被下候、以上、

迫間浦

橋喜三郎(黑印)

享保四年亥七月

向井作兵衛殿

右之通相認、刻十一月十六日作兵衛ニ持參申候所、則田丸御當番金谷孫左衛門様ニ出申、則松坂ニ御遣被成候由、

〔國府宮社記〕

○野々部本

禁制 高之宮

尾張高之宮

- 一、當手軍勢亂入狼藉事
- 一、社頭壞取事
- 一、宮中伐採竹木事

右條々堅令停止之訖、若於違犯之輩者、速可處嚴科者也、仍如件、

天正十二年雜載

二八五

武藏法恩寺

〔寺社書上〕

本所寺社書上六
平河山法恩寺

天正十二年七月廿二日

一、御兩代之大途於御證文之筋目勿論彼得其意候、并先領主治部（編覽）少輔一札之趣、向後不可有相違候、仍而如件、

天正十二年 申年三月六日

乙松在判

乙松

武藏三寶寺

〔武州文書〕

四 豐島郡
上石神井村三寶寺所藏

法恩寺

禁制

一、於寺内剪取竹木成横合非分企殺生事

已上

右於違犯之輩者搦捕可承候、若又權門之者思慮之儀至于有之者、記其交名可有披露候、仍如件、

天正十二年 申年十月十三日

乙松 黒印

石神井

德政

〔意富比神社文書〕

○下
總

德政之事御佗言候、雖迷惑候、爲神慮之候間、任承候、此上御造營・御祭禮以下少も無未熟可被勤之候、爲後日一札仍而如件、

天正十二年 甲申

二月十七日

（高城）
胤則（花押）

舟橋

富中務太輔殿

〔武邊蘭雜集〕

吉備雜書
○常陸

天正十二年 甲申、元日ヨリ雨フルナリ、正月廿日比マテ二日

ト不照ナリ、二月モ一日ヨリフルナリ、九月十八日、駒ク、リ、鍛立、卅日、各越ル、十月四日歸陣也、九月九日ヨリ陣也、

〔鹿島文書〕

二
○賜蘆文庫文書二十七所收

直

天正十二年 甲申正月十九日

（北條）
氏 直（花押）

北條氏直

天正十二年雜載

二八七

高城胤則

駒ク、リ
鍛立

中村弥太郎殿

島崎安定

〔大日本國誌〕

六下 地方長官

島崎安定

左衛門尉

天正十二年、甲申

麻生城ヲ攻メ之ヲ取ル、

宮本氏・井關氏

由緒書ヲ引ク、初メ里見義弘ノ弟義政、

刑部少輔

上總久留里城ニ在リ、義弘ト郤アリ、走テ安定

ニ依ル、

里見系圖

安定義政ヲシテ麻生ヲ圖ラシム、是ニ至テ功アリ、因テ義政ヲ左右臺ニ徒

井關攝津守
義政

シ、其城ヲ守ラシム、義政、井關攝津守ト稱ス、

井關由緒書

略

〔今井文書〕

野上

官途之事

天正十二年
申

六月朔日

晴朝 (花押)

結城晴朝
丹下左近將
監

丹下左近將監殿

〔奥相祕鑑〕

三

岡田堀内泉三家定席之事

相馬隆胤堀
内政胤ト座
席ヲ争フ

當家三家ニ對シ定席ノ起リハ、天正十二年三月廿二日、妙見神夏ノ時、相馬兵部太輔隆胤
ト堀内播磨政胤座論アリ、左ノ上座ハ岡田伊豫茂胤_{後治部少輔改}、右ノ座上ニ隆胤着座シ玉フ、

旗
下

政胤曰、古往ヨリ左ノ席ハ岡田、右ハ堀内著來ル處、今隆胤右ノ上座ニ著ル夏曾テ謂レ
ナシ、先主大膳大夫盛胤、三家ニ對シ御誓約、永正年中也、古來ヨリ三家會合ハ時宜ニ
隨ヒ、禮ヲ以テ也、讚岐守顯胤ノ命ニ、三家ハ旗_下ニ准スヘシ、降參扶助ノ家ニハアラ
ス、古例ニ任ヘシト、亦享祿年中、伊達ト相馬合戰進發ノ首途ノ時、岡田左座、堀内太
夫右座、泉庄次郎ハ岡田ノ次ニ著シ、其軍戰勝利ニテ歸陣ノ節、猶吉例トシテ古例ニ任
スル處ナリ、何ソ此命ヲソムクヘキヤ、隆胤曰、天正九年、堀内四郎逆心、其家斷絶、
其後自身右座ニ著來ルナリ、政胤ハ他家ヨリ堀内ノ家ヲ繼ク、堀内ハ其間暫ク年ヲ經タ
リ、其祖次郎太夫近胤座席ノ證蹟モナシ、泉ハ舊家トイヘトモ、岡田出テ下座ニツク、
然レハ近戚座上ノ例タリ、政胤重テ云、岡田出テ泉下座ノ夏、是證據ナシ、近戚ヲ以テ
座上ノ例アラハ、堀内近胤、相馬三郎胤乘岡田ノ上ニ著ヘシ、四郎逆心以來、隆胤右座
ニ來ル夏ハ、_{ケツサ}闕座ニ依テ也、實例ニアラス、隆胤ハ中村城代草野式部遺跡ト成テ政所職
ヲ續、何ソ一門ノ列ニ加ルヘキヤト、互ニ論判決セス、太守長門守義胤先例ヲ糺問有
テ、古例ノ如ク岡田・堀内・泉左右ノ座ヲ定メ、隆胤右座ノ次ニ著、三家ノ席此時ヨリ
極ル、

天正十二年雜載

〔齋藤文書〕○越後

官途之事、可任三郎右衛門尉候、并一字之儀、景之字遣之候、謹言、
天正十二年

上杉景勝

八月十二日

景勝〔上杉〕（花押）

齋藤景信

齋藤乘松丸殿〔景信〕

〔上杉年譜〕二十九景勝九

名乘之事、憲之字遣之候、謹言、

天正十二年

八月十四日

景勝

柿崎憲家

柿崎弥次郎殿〔憲家〕

〔高野文書〕○上杉家記所收

近年別而抽奉公之條、丸山分・中島分・牧山分出置之、軍役等急度可相嗜者也、仍如件、

天正十二年

直江

兼續（花押）

直江兼續

正月廿七日

兵冠

〔萩藩閱録〕百十三河埜又兵衛

高野左右衛門殿

加冠

天正十二

正月二日

輝元御判

河野與三郎

河野与三郎殿

〔萩藩閱録遺漏〕二ノ四宇野與一右衛門書出シ閱録無之分

加冠

元

天正十二年正月六日

輝元御判

宇野元房

源大事元弘嫡男、實名元房、

〔萩藩閱録〕三十五渡邊小右衛門

任

中務少輔

天正十二年雜載

天正十二年雜載

天正十二年正月廿一日

光永新九郎

光永新九郎殿

輝元御判

二九二

〔萩藩閔閱録〕

七十四
栗屋縫殿

任

縫殿允

天正拾二年正月晦日

輝元御判

栗屋元定

栗屋彌三郎殿
(元定)

〔有福文書〕

受領

伊賀守

天正拾二年二月六日

輝元 (花押)

有福元貞

有福民部太輔殿
(元貞)

〔萩藩閔閱録〕

百六十一
萩町人

受領

受領

佐渡守

天正十二

輝元公

二月九日

御判

高橋新右衛門殿

〔萩藩閔閱録〕

百十七
久芳五郎右衛門

加冠 元

天正十二

二月九日

輝元御判

久芳元直

久芳新四郎殿
(元直)

〔萩藩閔閱録〕

百卅三
弘中六左衛門

惟

天正十二

二月十一日

輝元御判

弘中一郎

弘中一郎殿

〔萩藩閔閱録〕

百四十一
鳥田智庵

加冠

天正十二

天正十二年雜載

二九三

烏田道智

天正十二年雜載

二月十四日

烏田九郎殿(道智)

輝元御判

二九四

〔萩藩閔閱錄〕

六十七
高須惣左衛門

受領 河内守

天正十二年二月廿六日

輝元御判

高須元士

高須彦右衛門尉殿(元士)

〔萩藩閔閱錄〕

百十三
草刈六左衛門

加冠 新太郎

天正拾二年卯月廿八日

元長判(新)

草刈就勝

三吉萬鶴丸殿(草刈就勝)

〔毛利氏考證論斷〕

二十五
中村市平家譜

加冠

天正十貳

五月八日

輝元御判

中村又七郎

中村又七郎殿

〔萩藩閔閱錄〕

四十一
志賀茂右衛門

任 六郎右衛門尉

天正拾二年五月十八日

輝元御判

八幡原元直

八幡原孫八郎殿(元直)

〔萩藩閔閱錄遺漏〕

三ノ三
真鍋長兵衛書出シ

其方息之事、可爲宮龜之由、名付申所如件、

天正拾貳

六月廿日

元感(花押)

真鍋平左衛門

真鍋平左衛門殿

〔萩藩閔閱錄〕

百五十一
河村次郎左衛門

任 二郎左衛門尉

天正十二

八月五日

輝元公

御判

天正十二年雜載

二九五

河村利應

天正十二年雜載

河村與二郎殿(利應)

〔萩藩閱録〕

百四十五
久芳庄右衛門

受領 對馬守

天正十二

十月十五日

輝元御判

久芳途重(途重)

久芳右京亮殿

〔萩藩閱録〕

百六十五
山代裁判

任 甚右衛門尉

天正十二

十二月朔日

輝元御判

角神六

角神六殿

〔萩藩閱録〕

百三十一
石川陳平

加冠

天正十貳

輝元公

石川宗二郎

十二月十八日

御判

石川宗二郎殿

〔毛利氏考證論斷〕

二十五
福原惣左衛門家譜

任 宗左衛門尉

天正十貳

十二月廿六日

輝元御判

福原十郎三郎殿

〔萩藩閱録〕

五十一
國重又右衛門

加冠 元

天正十二

十二月廿八日

輝元御判

國重與次殿(元重)

〔毛利氏考證論斷〕

二十五
教宗寺由來書

〔上書二〕

玉井与四郎殿

天正十二年雜載

國重元恆

福原十郎三郎

門 玉井與左衛

天正十二年雜載

任 與左衛門

天正拾貳

十二月廿八日

輝元御判

〔佐藤文書〕

五 ○東京大學所藏

任 又右衛門尉

天正十二年十二月廿九日

輝元（花押）

佐藤彦三郎

任 佐藤彦三郎殿

〔萩藩閔閱録〕

四十四 信常太郎兵衛

任 市允

天正十貳

十二月晦日

輝元公御判

信常元次

任 信常彌次郎殿

〔萩藩閔閱録〕

八十二 長屋勘兵衛

任 左馬助

天正十二年十二月晦日

輝元御判

長屋元和

任 長屋小三郎とのへ

〔萩藩閔閱録〕

九十一 林平八

任 善右衛門尉

天正十二年極月晦日

輝元公御判

尉 林善右衛門

右、善右衛門儀、林肥前就長弟、只今林仁左衛門家之初代、

〔萩藩閔閱録〕

百三十九 坪井左兵衛

任 左助

天正十二

十二月晦日

輝元御判

坪井新四郎

任 坪井新四郎殿

〔毛利氏考證論斷〕

二十五 長沼九郎右衛門家譜

任 宮内丞

天正十二年雜載

天正十二年雜載

天正拾貳

十二月晦日

長沼又四郎

長沼又四郎とのへ

輝元御判

〔忌宮神社文書〕

○長門 第二回探訪

御任官之事、可爲中務大輔者也、仍狀如件、

天正拾二年八月三日

右馬頭(毛利輝元)(花押)

二宮大宮司

長州 二宮大宮司殿

〔二神文書〕

○伊豫

假名

假名

新四郎

天正十貳年

河野通直

卯月十四日

通直(河野)(花押)

二神新四郎

二神龜松殿

〔改正原田記附録〕

○筑前 下

官途之事、依望令補任候者也、

天正十二年五月一日

信種(原田) 花押

原田信種
洞右京進

洞右京進殿

壹岐守事、依望之令補任者也、

天正十貳年五月朔日

了榮(原田)

原田了榮

洞三郎左衛門殿

加冠 泰忠○兒玉韞探集文書二八、
「泰」ヲ「恭」ニ作ル、

天正十貳年十二月日

了榮

濱藤次郎殿○兒玉韞探集文書二八、
「濱」ヲ「後」ニ作ル、

〔佐賀諸家系圖〕

大木統清

兵部丞

天正十二年雜載

一、天正十二年、蒙大友屋形義統加冠、號隼人助統清、其後從父屬于御當家、

〔竹田津文書〕〇豊後

一字之事統宣遣之候、恐々謹言、

三月廿七日

(大友) 義統 (花押)

竹田津傳允殿

大友義統
竹田津統宣

〔松浦文書類〕一

道可公賜赤崎彦五郎加冠目錄

加冠

信貞

天正拾二年

卯月十一日

(松浦) 道可

赤崎彦五郎殿

松浦道可
赤崎信貞

〔鳥濱家文書〕〇薩摩

天正十二年正月一日日記

一、御出仕巳ノ時、先ツ年越之番衆御目見得シテ扇子給、次ニ各御目得有、

彌渡氏ノ正
月嘉例
元旦

畫師

一、御社參、午之刻、

八幡百文、天神ハ佛(精カ)、建部百文、諏方(也)二百文、愛宕百文、住吉佛(精カ)、

一、飯院、酉之時、ケヅリモノ・芋ノ汁・猪、五ヘン、

一、鳥濱越後守家ヨリ御酒・炭・萩折上ル、是ハ彌渡殿元祖當國ノ御下向之舊例カ、

御座

(彌渡重長) 殿様・二彌渡常陸守殿・三彌渡駿河守殿・四彌渡伊豆守殿・五角殿・六下村殿・七岩松殿、

ヨコクワ 九立(彌渡) 彌渡九立ト云人也、但畫師、

客居 二山城坊(彌渡)・三野久尾殿・四野間殿・五堀内殿・六東殿・七鳥濱殿・八神河殿、

右山城坊之座敷ハ、昔ハ竹崎殿座ニテ候得共、重長ヨリ被給候、但二男ニテ有之候間、如此カ、

一、殿原飯院座敷之夏、

殿様・西本・西方、

肥後殿 去年・今年不參、

富山殿

ヨコ 柏原殿

江田殿

御酒三反

藥丸殿

鯨嶋殿 兒之間不參、

客居 山本殿 去年・今年不參、海老方、

一、園林寺へ御禮、青銅三百文・ヘイジ一具、

一、寶屋庵へ御禮、青銅二百文・鈴（銀）一對、

正月二日、

一、成園寺御禮、錢三百文・ヘイジ一具、但寺ニテハ酒五ヘン、

一、眞言衆祝有、酒五ヘン、片ソナへ、芋ノ汁・サウメン・ノリノ汁・山イモノ汁、
但御前ニテハ三ヘン、山伏衆モ同座、

一、廻船衆參候、冷酒ハ納戸ヨリ出候、其後シツケンノ酒納戸相伴ス、

一、タクミ・紺（銀丸）・内侍、祝子參、何モ御酒給ル、

一、ヘタノ老名參リ、斗入ノ酒給、并村々ヨリ蛇進上申ス、

廻船衆
工匠
紺搔

二日

一、當年申祭ニハ河窪殿御代ニ被參也、

一、三日柴打ニハ角殿被參候、錢二百文、三日・四日ノ佛精在リ、

一、岩殿寺へ御禮有リ、但御酒持參、五ヘン、御肴片ソナへ、イモノ汁・ケイラン・カ
ブノ汁・サウメン、御座、殿様・常陸殿・駿河殿・伊豆殿・孫左衛門殿・藥丸殿、

岩殿寺・二牧院・三野久尾殿・四堀内殿・肥後殿・七目木殿・江田殿、

正月四日、

一、大始良ノ飯院、次ニ西俣ノ飯院、

園林寺御齊（イキ）アリ、

一、僧祝有、酒五ヘン、引出物、茶袋、包丁被給候、

園林寺へ錢三百文・同伴百文・イフン（シカ）シヤ二百文・積翠寺へ百文・光嚴寺百文・了宗寺百文・
龍淵寺同・寶屋庵同・寶光寺同・崇仲庵同、

六日、參人衆 妙光寺・伯庭庵・天松庵・林松庵

有泉庵

七日、竹崎周防守參ル、

八日、

九日、御一家中御寄合有、御座ノ次第、

殿様・二常陸殿・三駿河殿・四伊豆殿・五角殿・六川窪殿・七西方殿・八江田殿・九下村殿、

与五郎殿

ヨコ

新納民部大夫殿

一、野久尾殿・二野間殿・三堀内殿・四東殿・五鳥濱殿・六山本殿・七園田殿、御前ノ御座

御之上

重長御懷ノ事

御カコイサマ

十日、

十一日、勝雄寺へ御齊有、御座ノ次第、

一、勝雄寺・二野久尾殿・三野ノ間殿・四伊豆殿・五角殿・六肥後殿・七二郎左衛門殿・八藥丸殿、

殿様・二牧院・三常陸殿・四禰寢又七殿・五禰寢權頭殿・六禰寢禪八郎殿、七鳥濱殿・八江田殿、

十日、積翠寺へ御時アリ、御座次第、

一積翠寺・二牧院・三野久尾殿・四河窪殿・五肥後殿・六科木殿、

殿様・二常陸殿・三駿河殿・四牧院・五科木殿・六藥丸殿、

十二日、野間殿年頭トシテ麿嶋へ參上、

十三日、重長御懷カコイへ御座ノ次第、

殿様・常陸殿・野久尾殿・江田殿、

御カコイサマ 民部大夫殿

十四日、爲年頭、串良へ形部大夫殿被遣候、

十五日、鹿屋へ上脇被遣候、

十六日・十七日・十八日・十九日・廿日・廿一日、

廿二日、麿嶋へ御參上、御供衆、駿河守殿、御上方ノメシク足ハ龍淵東禪寺ヨリ出候、

玄番殿是ハ上脇ノ代 江田殿

西原

肥後殿 亦淵門殿
伊豆殿 内藏助殿

藥丸殿

瀬戸山
二郎(マ)
八四郎

廿三日、 志々目殿

廿四日、 神川殿

廿五日、 御連歌、 駿河守宿所、

廿六日、 御屋形様へ御出仕有、

進上前(八九)ニ、 殿原衆ニテ上候得共、 今年ヨリハ北郷殿(時久)モ持參ノ御太刀上候、 其外方々ノ御

人衆モ今年ヨリハ持參ノ太刀ニテ候、

折紙書様

進上

御太刀

一腰

青銅

三百疋

以上

平七郎

百疋ハカヘリ候、

樽ニツ・モチ・味明・山イモ・猪・魚、

御兩人サマ、 是ハ恆例ニアラス、 當時ノ義也、

一、 樽ニツ・モチ・ミカン・魚、 右衛門大夫殿へ、 是モ恆例ニアラス、

一、 青銅百疋・太刀、 右衛門大夫殿、 同百疋・太刀、 平田殿、 同百疋・太刀、 下野殿、

同百疋・太刀、 圖書殿、 同百疋・タル一ツ、 白濱殿、 同百疋、 福昌寺、 同百疋・樽一

ツ、 本田殿、 是モ恆例ニアラス、 當時ノ義也、

青銅三百文上ケイガ、 同三百文下ケイカ、 同百文土器作ニ被下候、

一、 廿七日、

廿八日、 御城ニテ御寄合ニテ候、

廿九日、

卅(百脱カ)

二月一日、 御暇御給ニテ候、

二日、 雨天、

三日、雨天、

四日、麿嶋ヨリ御出船ニテ候、其夜ハ湊ノカリヤへ御逗留候、

一、天正十一年三月三日、蓬餅ニテ御一家中御酒御奇合有、

一、同四日、日刃隈本^(肥)御番立、殿様自身御立在、

御供衆

常陸守殿代ニ形部太輔殿 与五郎殿 越中守殿

積翠寺代ニ 二郎左衛門殿 弥七殿 池端殿

了淵寺代ニ 内藏助殿 河端殿 江田殿

但馬守殿 肥前守殿 村山殿 平三郎殿

又六郎殿 舍人助殿 八郎四郎殿 民部左衛門殿

園田殿 神河殿 紀伊助殿 仁四郎殿

秀阿弥 海田殿 村ノ小五郎殿 深川殿

太郎殿

此外足輕衆・中間衆ハ別之行日記ニ在、

土持久綱

五月十一日 隈本ヨリ御歸城、

一、六月十八日唐ヨリ醫師來ル、

右之外ニモ色々雖有之皆悉省之、

○肥後隈本在番ノコト等、便宜合致ス、

〔諸家由緒〕

○舊典類聚 土持家由緒書

一、同十二年十二月、義久公^(島津)御諱之久之御字彈正忠^(綱美)へ拜領仕、久總^(綱美)与改號仕候、久之

御字之御誓紙今以格護仕候、

〔對馬古文書纂〕

洲河生虎眞氏所藏文書

景續之事依望不可有子細之狀如件、

天正十二

八月十四日

洲河治部丞殿

昭景^(宗) (花押)

宗昭景

洲河治部丞

〔對馬島廳所藏文書〕

○對馬

天正十二年雜載

天正十二年雜載

冠者并

實名

滿秋

天正十二年

八月十四日

平山彦二郎殿

景滿(從孫)(花押)

佐須景滿

平山滿秋

冠者并

實名

滿家

天正十二年

八月十四日

平山与七良殿

景滿(花押)

平山滿家

醫藥、治療、疾病、死歿、

月齋死去

〔兼見卿記〕

六

三月八日、乙酉、今朝舜藏主令出京、罷歸云、月齋死去、昨夜申時分

以外令腹痛、辰剋逝去、中々不及療治之由申了、數年當所ニ令堪忍、日夜相談之処、

頓死之爲體驚入、愁嘆々々、跡之義周超ニ申付之、今夜自長兵入、月齋跡へ千疋持來

云々、跡職萬端不相調之処、得力之由、周超申了、今夜則葬送、於真如堂山、火葬云

々、

昨朝幽齋下向、爲見舞月齋令出京、○幽齋、丹波歸國ノコト、三月九日ノ條ニ見ユ、清少納言所ニ令滞留、發病了、

十五日、壬辰、○中略、近衛龍山、奈良ニ隠ル、コト、三月十五日ノ條ニ收ム、月齋息太郎左衛門へ上、今度月齋義ニ付而

也、於門外面會、

廿六日、癸卯、○中略、口中以外發病、去年八月祭禮ニ發、今度又相煩了、○下略、吉田兼治、誠仁親王ヲ見舞フコト等

廿七日、口中少驗也、ニカ、ル、四月二日誠仁親王ヲ見舞去ノ條ニ收ム、

四月十日、丙辰、天晴、○中略、クコノ葉ヲツム、桑葉・五ヶ葉三色茶ニ仕義、主殿允・横

田兵庫允申付、出來、

三色茶

天正十二年雜載

二色茶
五ヶ茶ヲ良
薬トス

十一日、丁巳、天晴、風、○中木瓜葉・合カウケワシ觀葉二色茶ニ仕之、昨日三色之茶ニ爲可加之也、五ヶ茶ト云ヲ一段之良薬之由申之間、如此、主殿允當番也、申付之、

五月六日、壬午、入夜予左之片顔ヲ痛、終夜相煩了、

九日、乙酉、○中牧庵へ遣書狀、半身之痛、薬之義申遣、自先剋神龍院へ來之由使者罷歸云、即相尋之処、此方へ來也、普請場ニ在之、牧庵來、此間半身之痛様體相語、一薬令調合可進之由被申之由、相添使者遣了、明日大坂へ下向之由被申也、長岡越(忠興)中守(本朝)息煩之間、罷越之由被申了、

〔兼見卿記〕七 七月二日、丙子、出京、(勸修寺晴豊)向勸亞相、此間所勞也、

六日、庚辰、○中次向勸亞相、所勞養性之間、不對面之由被申了、
八月廿八日、壬申、口中發病、腫痛、

〔舜舊記〕一 二月一日、高野法印年忌、米一斗爲齋料來也、月齋・妙心院・智福院御齋衆也、

三月八日、於清少納言殿月齋死去也、

九日、月齋へ香典貳拾疋送也、

四月五日、御方女房衆ヨリ杉原十帖爲藥料給也、(吉田兼善)

八日、月齋之月忌ニ齋ニマカル也、

廿七日、月齋五十日之在之、(齋院九)

六月十九日、月齋之百ヶ日齋アリ、

七月十三日、墓參也、

〔言經卿記〕五 十月二日、乙巳、天晴、土用、夜雨、

一、高野永運坊ヨリ薬曰被返了、

五日、戌申、晴陰、(戌)

一、御乳カ子ニ小瘡之由申間、付薬五香散、子カ御乳愛洲薬等所望之間遣了、

六日、己酉、天晴、

一、盛運ヨリ益母薬所望之間遣了、

八日、辛亥、天晴、

一、大和宗恕入來了、薬方書之、予養生薬方也、所勞氣之間、内々頼入了、

九日、壬子、天晴、八專入、

一、曾我入道入來了、藥之拵了、勸一盞了、(味)四條・永運坊等入來了、次大和宗恕・秋田紀介等入來了、

十日、癸丑、天晴、

一、多上(忠雄)總介所へ罷向談合了、次藥種取寄了、○下略、山科言經、冷泉爲滿等ヲ訪フコトニカ、ル、年末雜載學藝ノ條ニ收ム、

一、秋田久太夫來了、氣付藥遣了、暮々又來了、○少有之、小袖借用之間海松色マハセ借遣了、

十八日、辛酉、天晴、

一、安禪寺殿へ昨日御禮ニ參申了、市川委申談了、市川妻ニ氣付藥遣了、

十九日、壬戌、天晴、

一、楠(成辰)甚兵衛妻ヨリ(縣下向シ)广香丸所望之間、一貝遣了、

一、冷泉下女紅梅、愛洲藥所望遣了、血道氣歟、脉取之、

廿一日、甲子、天晴、

一、冷泉暮々入來了、同下女脉ヲ取之、四物湯ニ桔梗・紫蘇葉加テ、三包遣了、同侍今

楠成辰

保童圓

橋二郎衛門尉蜜柑五持來、阿茶丸ニ音信了、

廿二日、乙丑、天晴、

一、安禪寺殿御乳人ヨリ、保童圓調合之次有之者、言傳分共二十疋被送給了、

廿三日、丙寅、天晴、

一、□講堂東藏坊祖母ハヤメ藥所望之間、二包遣了、

廿四日、丁卯、晴、午刻ヨリ雨、夜晴、

一、持明院(嘉孝)ヨリ當腹所望之間、一匁遣了、

廿五日、戊辰、天晴、晴陰、

一、冷泉下女紅梅來、脉ヲ取之、大驗、猶藥申之間、四物湯ニ桔梗・人參・紫蘇葉等加テ三包遣了、

廿八日、辛未、天晴、

一、楠甚兵衛妻ヨリ五香散所望、遣了、

廿九日、壬申、天晴、

一、冷泉下女いま愛洲藥所望之間、一包遣了、

五疳保童圓

楠長譜

- 十一月一日、癸酉、晴陰、
- 一、楠甚兵衛へ書翰相遣了、同妻所へ愛洲藥・麝香丸等遣了、後剋遣迎院令借用遣了、
- 二日、甲戌、天晴、
- 一、安禪寺御乳人ヨリ五疳保童圓所望之間、粉ヲ進了、
- 五日、丁丑、天晴、
- 一、楠長^{〔讀〕}安孫女ハ才瘡病之由被來了、丸藥キリ藥、遣之、
- 七日、己卯、天晴、
- 一、楠長安妻虫クイノ藥所望、同下女同藥所望遣了、
- 十一日、癸未、天晴、
- 一、小川善大夫母腹痛之由申間、广香丸一貝遣了、
- 十二日、甲申、晴陰、下未、
- 一、永運坊ヨリ藥製注百五十種記了、送了、祝著々々、
- 十三日、乙酉、天晴、
- 一、永運坊へ藥製法禮ニ書狀遣了、

- 一、五疳保童圓・人參丁香散^{〔劑カ下同シ〕}一濟ツ、調合了、
- 十四日、丙戌、天晴、
- 一、小川善大夫虫クイ齒藥所望、遣了、
- 十五日、丁亥、天晴、
- 一、永運坊ヨリ藥白借用之間、持遣了、
- 十六日、戊子、天晴、
- 一、大和宗恕へ罷向了、普請之間、不及罷向、次永運坊へ罷向了、數刻令雜談了、後刻香附子五匁・桔更^{〔題〕}三匁送之、内々所望之由申、藥屋ニ申處ニ、持クレラル、
- 十八日、庚寅、天晴、
- 一、安禪寺殿へ參了、保童圓八百粒進上申了、阿茶丸同道、御酒有之、田樂有之、
- 廿一日、癸巳、陰、
- 一、永運坊ヨリ藥白返了、
- 廿三日、乙未、天晴、
- 一、曾我入道被來了、藥白借用、則コシラヘラル、

耳瘡藥

- 廿四日、丙申、天晴、
- 一、冷泉下女紅梅先日藥所望之、得驗氣、ス、・豆腐・魚等禮ニ持來了、
- 廿六日、戊戌、
- 一、田付——ヨリ耳瘡藥所望之間遣了、
- 廿七日、己亥、天晴、
- 一、持明院ヨリ大腹皮・木通・薰香一核ツ、所望之間遣了、
- 十二月二日、甲辰、天晴、
- 一、大和宗恕咳嗽之間、見舞小者忠衛門尉遣了、
- 六日、戊申、天晴、
- 一、早朝ニ持明院來談了、朝食相伴了、次永運坊來談了、豐心丹二百粒持來了、
- 十二日、甲寅、晴、
- 一、持明院ヨリ藥研借用、遣了、
- 一、愛洲藥六濟調合了、
- 廿一日、癸亥、晴陰、

豐心丹

二條尹房室
九條氏ノ七
回忌

- 一、曾我入道來談、藥臼借用、勸酒了、
 - 廿三日、乙丑、天晴、
 - 一、四條妻御茶々ヨリ愛洲藥、妙雲ヨリ人參丁香散所望間、兩所へ遣了、
 - 一、持明院ヨリサヤマキノ刀・藥研等被返了、
 - 廿五日、丁卯、天晴、
 - 一、妙雲ヨリ腹痛之由、广香圓遣了、
 - 廿六日、戊辰、天晴、
 - 一、安禪寺殿御乳人ヨリ保童圓所望之由、十疋給了、
 - 一、○中次安禪寺殿へ參了、保童圓四百粒進了、御酒有之、次明王院・冷泉等へ罷向了、
- 〔多聞院日記〕三十一 正月十九日、於大乘院御母儀(尋惠)勸向院(二條尹房室九條氏)二品養椿大姉七廻追善、(英辨)講子、問明禪房、探客英印、題龍女成道講問一座在之、轉齋兩尺ラカン供卅人程請用、宿へも御膳送被下、忝事也、講衆東林院・專識、陽教、以上、歸雪下、
- 廿八日、禪識房煩付、爲祈禱大般若轉讀修之、賢良房法印・玉藏院・淨教房律師、良勲、忍禪房擬講・專堯房、明禪房、長印房、定舜、光春、延宗

阿彌陀院代
官乘春

- 、・實專、・長學、・良光、
- 一、政丸舊冬ヨリ雖出候、蓮成院色々被申間、召歸了、
- 一、禪識房藥、宗喜ヨリ出了、
- 二月五日、
- 一、昨日四日、政カヲウチ死了云々、六十九、
- 六日、退出了、十新下了、仙學房來、日中申付之、アミタ院代官乘春死云々、有徳ノ仁、
堅貪ムセ病ニテ死了、此中黒ト云有徳ノ仁、天王寺ニテ萬部ノ經取立ノ内、二千部讀
之云々、浦山敷事也、○下略、筒井順慶、大和越智城ヲ修築ス
ルコトニカ、ル、二月六日ノ條ニ收ム、
- 七日、○中略勝舜房五師來九日十三廻、弟子舜禪房今日引上、ラカン供沙汰之間出了、
- 九日、○夜明夜雨下、明テ止了、於明王院勝舜房五師十三廻ノ追善、施主尊識、問講不定、
講愚、問者實淨房、題若論顯理、捧物百疋ヒタ、出仕廿疋、ソトハ一本遣了、
- 十三日、爲禪識房祈禱、長賢、仁王經修之、南井坊・金勝院・蓮成院・長印、・常如院・
堯舜房・金藏院、以上日中後大門様へ參了、社頭能在之、
- 十四日、

仁王經

松倉重次追
善

- 一、爲禪識房祈禱、從良勲房律師百座仁王講修之、札來了、懇切之儀也、
- 一、從中飛禪識(中坊飛禪守秀祐)、爲見廻助丞被上了、一大事、
- 十七日、靈供備、御墓へ參了、
- 十八日、
- 一、善堯房墓石塔散々碎之間、蓮成院依懇志新調立置了、長胤之子僧にて一段知音之
故也、同道勲行了、
- 十九日、
- 一、禪識、煩大事、今市ノ内方妹之間、見廻ニ被來了、五十疋樽代被持了、
- 廿日、靈供備了、禪識房少減了、來間レンニテ一具、是ノヲ一具遣之、
- 廿二日、
- 一、禪識房煩一昨日ヨリ腫氣引、今日ハ大旨減ノ様、不思儀ノ拾物也、
- 三月三日、
- 一、來十二日、(松倉重次)松權百ケ日爲追善、於穀屋千部經在之、○松倉重次死歿ノコト、十
一年雜載死歿ノ條ニ見ユ、
- 六日、

一、禪識房母ヨリ日中内衆勸之、被汲了、新三郎吉野ヨリ下向了、
七日、本願正忌之間、ラカン供沙汰之、常如院中薦得請、雨下難治事也、
八日、常如院親父第三廻、ラカン供如形在之、ス、一對持出、雨下、
九日、木津甚五郎母死、五旬隙開了トテ來了、
十日、土用ニ入、禪識房煩又惡ク成了、沈思々々、
一、定舜房父昨日九日ニ死了、夏中因明初門辭退ニ可成、
十一日、

禪識房

一申初點ニ禪識、死了、言語道斷、不及是非次第也、九之時ヨリ入室、廿九才入滅、葬禮以下一圓自私申付之、籠僧般若寺妙光院并客僧一人、
十二日、雨下、昨夜桶へ入認了ト、不便々々、故一夜不被眠而夜明了、
十三日、
一、昨日從畑中飛使トシテ、北左馬太夫・辻子助丞兩人上セラレ、禪識房死去付、跡之道具悉去出ノ間、菟毛角モ私任ト申上了、外聞旁令迷惑事也、葬禮・中陰如形事ハ、我等ヨリ無相ノ失墜ニ仕テトラスヘキ通、再三存生ノ時申渡ヲ、如此飛ヨリ申ハ一段

外聞沈思々々、萬事成次第迄也、

十四日、

一、未貝定葬禮了、引導眉間寺定順房へ申、悉假リ役也、禮堂ニハ長賢房得業・竹内虎市・森岡半太夫・辻助丞・北左馬太夫出了、自類衆南井坊・金勝院・長印房得業・珍藏院・花藏坊・常如院・長善房・堯舜、良光、以上、大乘院殿ヨリ南院寬舜被出了、忝事也、入夜大霰下了、

十五日、朝之間南井坊・金勝院來、安養報記談義了、來廿二日、吉祥院母儀一廻講問之用也、

十八日、

一、從中飛申トテ、北左馬太夫・辻助丞兩判ニテ、禪識房跡一圓此方へ可去出之通申來了、及暮雨下了、

廿二日、於吉祥院母一廻、講予、問明禪房、客南井坊、題安養報記、請定、表白如形、新調捧物三百疋送之、風呂在之、門跡へ見廻申了、首咒合六十五万八千返了、
廿三日、禪識房交合各へ遺物送之、夜着トンス母へ、紙箱・小茶ワンス、禪ノ婦北殿女房、重

箱^{三重}一、今市ノ上へ、鈴一對辻助丞へ、白帷市介、ソメ帷一、チキカ男へ、ナへ大小二、タラ持・ツケ物桶・ミノコイ一、乳へ、ホツケンノ小袖連宗へ、愛染一ソク、堯舜房へ、アヤノケサー、花藏坊へ、以上、エンコノ舍利同遣、

廿四日、

一、今市へ禪識房形見遣之、以次大方殿へ雜帟二束、かゝへ米二斗遣之、

廿五日、^{○中}阿ミ夕院煩付、梅軒藥之事被申間、申遣了、社參了、安居道具新造へ入畢、

廿八日、社參、常同道了、方逆修於蓮藏院在之、學專房弔經在之、四把ハ僧ニ令書之、

長賢、二ワ半、

廿九日、^{○中}禪識房忌中今日結願了、百疋妙光院、五十疋客僧、眞言院ニ石塔立之、代

四斗、供養ノフセ十疋、般妙へ遣之、万事夢々、

卯月四日、兩面ノ紬洗仕合了、日中後灸治了、腰兩所百ツ、三里五十ツ、梅軒ニシル

シ了、

九日、

一、實相坊死去了、近來ノ行者、臨終ムサく歎、

十六日、舜長房・新十郎參宮云々、禪識、卅五日之間、問講不定、御同學衆十人之分ニテ沙汰之、愚代ニ堯舜房申了、問講百疋ツ、出仕廿疋ツ、客三十疋、題反他昨是、講師金勝院、問者堯舜、客興善院・南井坊、ソトハノ外ハ音信不取之、ラカン供衆十人、眉間寺・妙光院請用、ソトハ來分興善院・南井坊・南喜院・陽教、良懃房、延宗、光春、圓滿院・堯舜、專識、眉間寺・金勝院以上十二本、香典返了、菜五、引物フシルニツメソウメン、フセ四貫八百五十文入了、

十七日、三侯門ノ御忌日へ出了、早日老者各出了、重欲故也、悲事々々、

廿一日、

一、於當室幽贊談義始之、窪城伊豆公ヨリ先段聳ノ矢田殿煩付、別而當社へ立願之隨一、依之本服之間、果遂事、以新藏院内儀堯舜、へ傳テ申間、且爲果遂、且ハ爲初心之衆稽^{古殿之}、誘引始行之、丁衆事陽教、堯舜、長學、長善、良光、舜恩、以上、

廿三日、

一、^{○中}禪越、六七日ラカン供、法花一部連宗へ申付之、

晦日、

一、備前衛門太郎見廻ニ上、メン十把・芋持畢、
禪識、今日七々ノ間、法花同音三人_ニて申付之、ラカン供内衆ニテ沙汰之、今日ニテ
開隙了、

五月二日、於四恩院恆例千部論在之、長識房律師今日卅三年歟、作善在之云々、
四日、

一香觀房煩大事付、跡之事談合之間、存分書遣了、使不届違逆了、
五日、

一、又六上、長母大事、則明日南へ下、ヒセンへ狀下了、又六道ヨリ呼ニ歸上了、

一、長賢房母久煩、今日未刻死去ノ由注進、俄下向了、去廿九日古齒落ト夢見シ、ハヤ
ク七日ノ内ニ合了、

七日、

一、仙學房上洛、麥マツキ被持了、幽贊談義了、藤坊母煩見廻ニ上由也、

十日、○中略助二郎風氣藥遣了、

十三日、父正忌、深宗一部、アソコ善春一部、淨圓一部申付之、

廿二日、

一、去十九日歟、不空院長學阿闍梨死了、七十九ト云々、〔秘〕古英盤法印一段之知音也、不

便々々、

廿六日、

一、香觀房煩付、跡ノ事供僧坊ニ申置由也、下書事以長印房申間、少々書遣之、不可有

法重、〔量力〕

六月六日、

一、寛舜手ノ大ユヒニ腫物出來、針沙汰之処、血モ不出、肉出テ、事之外煩、私無沙汰

ニテ如此、不知事ヲ仕、幸智教ニ見スレハ、一向針ヲ嫌者也、蛇眼丁ト云丁也トテ、〔蛇下同シ〕

出タル肉ニネリ藥ヲ付テ則驗也ト、能々可意得事也、身ハ一、病ハ四百四、アチキナ

キ事也、

一、香觀房煩、脇ノ下ニ腫物、氣腫也ト、爰元ノ衆ノ分ニテ不成、仍良圓カ兄ナル間、

智教呼越、則根ヲ悉取り、腫物ハ平愈也、〔愈〕惣體ハクタヒレ大事々々ト云々、

十日、

蛇眼疔

康光作大刀

- 一、長得母今日卅五日、如形追善在之、
- 一、禪識房遺物ニ中飛へ大刀遣之、康光作、一段見事也、主祕藏無極一ノ道具也、追善ニ有度事ナレトモ、兄之間遣之、次ニ内儀へ一荷・兩種遣了、連宗使ニ雇了、
- 一、金勝院・蓮成院度々煩付、且爲返禮麵廿把ツ、遣之、
- 十三日、
- 一、昨日明皇院腰違惱ト云々、二階ヨリ落云々、年寄力衰故也、
- 十五日、
- 一、昨夜神人屏風藤三死了、若官方五臈也ト、孫介御番廿九日ニ可上、悲喜眼前々々、十九日、
- 一、香觀房得業死了、久煩苦痛、不便々々、若年ヨリ知音、悲歎々々、五十三才、サテく惜命々々、生得果報者、アミ夕院新建立、大喜院買得修造、寺役モ可有沙汰仁也、弟子モ五六人仕立了、明神ノ可有御加護モ之処、早逝不思儀々々々、
- 廿日、
- 一、當月初、香觀房逆モ可死ト覺悟シテ、算置ニ定日ヲ占結サセケルカ、來十三日歟、

算置

不然ハ十九日ト占來ル由、長印房被語了、昨日死去ナレハ、誠正々算ノ上手也、愚身モ此算師ニ命期尋定、可有覺悟事也、

- 廿一日、
- 一、香觀房葬送今日在之云々、不便々々、蓮成院新造屋參籠被來了、
- 一、葬送ノ時、コシノ前後ニ伴シタルハ、一七日ケカル、也ト、
- 廿二日、禪識房百ケ日、法花同音五人申付処、般妙持病ニテ不被來、フセ十足ツ、
- 廿四日、於青龍院、井院方逆修在之、結衆禪識房・予、頓寫在之、四把ノ内ニワ長賢、書之、ニワタラスノ分私書遣之、

霍亂

- 廿五日、
- 一、○中略今曉ヨリ霍亂心煩之間、西坊藥爲申請了、夕蓮不顧淨宗談義來了、
- 七月四日、長賢房南へ夜中ヨリハカ參了、日歸ト云々、三觀院上交了、
- 七日、
- 一、來九日、圓明院親父五十年忌付講問在之、諷誦表白ノ事、明禪房ヨリ被申間、老屈之上、萬事取亂雖無寸暇、諸事懇之上、此比殊牛黃圓調合詵之間、不及力、炎熱拭斷、

如形書遣之、

十一日、

一、來廿四日、香觀房卅五日講問、講師事遣否^言ノ由申間、同心了、十四日、

一、御忌御出仕了、フセ無之、靈供、ラカン供如例、白五升長キ、

十七日、大門様へ參、彼是談合申上了、來十一日法乘院殿一廻追善、講陽教、問者探、客南井坊之通申定了、三藏會來月十日以前可有御汰沙之通、則勸修坊事申調了、會合談儀ニ兩人來了、○大乘院尋圓、寂スルコト、十年八月十一日ノ條ニ見ユ、

一、牛黃圓一劑於金勝院調合、四分一、藥十二兩來了、代、炎熱之時分造作之至、尤令祝着了、夕蓮來被語了、

一、去十二日、春日ノ局ト云、七十二才トヤラン東林院ノマ、母、有徳ノ人也、死去ノ故ニ、十六日早旦ヨリ在京了、鳥目二百疋口入了、

廿四日、香觀房律師卅五日追善、講愚、依遺言如此、問者探、願春擬講、題大悲闡提、問・講米一石ツ、客南井坊ヒタ百疋、出仕三十疋ツ、

八月三日、於賢聖院先師興政擬講一廻追善、講禪舜、得業、問實禪房五師、題從餘相分、論へ出了、蓮成ノ風呂燒各入了、日中以前ハ雨下了、定姓比量談義專英筆讀終了、六日、寶壽院親父嘉幡對馬、戒名定祐舜勝房ト云、卅三年作善講問在之、探講堯舜、問竹林院、題從餘相分、客沙汰之、扇子百五十文、一本遣之、定姓比量談義篇目交合了、

九日、來十一日、法乘院殿一廻、扱も無程移來了、万事夢也、ラカン供御沙汰付、廻請事被仰付之間觸了、人數五十四人歟、

一、長印房腹煩、仰天了、宗喜藥ニテ無殊儀云々、

十一日、於大乘院一廻御作善在之、○中略歸ニ堯舜房來テ、中旬會合談義了、十二日、

一、常如院來被語、瘡煩由被申了、クサキノ古葉遣之、

十四日、於八講屋群參大般若在之、午貝ノ過ニ終了、

十六日、午ノ過ニ終了、今度ハ一段各情^種ニ入、早速成就了、炎早并國中安否故也、○炎早ニ

ヨリ、諸社寺ニ勅シテ、雨ヲ祈ラシメ給フコト、並ニ繪旨ニヨリ、興福寺、祈雨ヲ行フコト、七月二十二日ノ條ニ見ユ、日中飯良敷房、長印房、陽教、

・春榮、以上汁菜長賢坊ヨリ沙汰之、母ノ百ケ日也ト、芋ノ飯申付之、於賢聖院夕飯、大御堂筭勘在之、長賢房代ニ出、愚身ハ度々雖有使不出、來十八日、大御堂可有筭勘之通既廻請フル、処、堂ノヤネ瓦葺事不出來之間、旁々先延引了、知足屋ヨリ退出了、若君様へ見廻了、干餅・ケ持之、寬舜へ麵五ワ遣了、シカキ

廿九日、

一、昨夕東林院殿京ヨリ御下也、弥三此間以外煩、ラウサイ心也、有梅軒ノ藥ニテ減也、九月二日、

一、興善院講頓寫、禪識房（母）經法花ノ分ハ律僧ニ交ヲ詔、廿正フセ遣之、深（密カ）經ハ長賢、ト私トシテ交了、墓所へ可遣之用也、

十一日、

一、政丸今曉ヨリ虫氣煩、如何、全不食云々、

十二日、政ニ梅軒藥吞ル、少ヨシト申、夕ハ拔群減也、尤々、

廿三日、

一、米四斗五舛白米ニ春了、新三郎腹煩、梅軒ノ藥ニテ驗也、

廿八日、

一、サツマヤ新五郎廿五日ニ國ヨリ歸、道ニテ病出、荷テ來云々、有梅軒脉ニ申遣了、

十月廿一日、○中廿四日五重正命日、會合フセノ米ルス淨春ニ申付、可引之旨申渡了、

廿四日、淨春正忌之間、於西屋五重會合修之、差別不見云々、題隱尙顯勝、フセ於西屋

淨春ルス申付、支配五石二斗六升入了、

一、藥屋松千代來始了、

廿七日、今曉サツマヤ新五郎死了、若年ヨリ久召遣、不便第一也、廿二・三才歟、万事

夢也、後前速遲之間也、

十一月十六日、

一、助二郎會津ニテ腹煩死了ト、扱々八才ノ時ヨリ養育、當年卅三才歟、數年見ナレ悲

愍ノ処爲商賈奥州へ五月二下、如此死去、不便々々、悲涙難押、生得父母ニモ不孝

也、愚身ニモ不孝也シ、雖然幼少ヨリ育來ル間、悲事無極、老衰ニ先立、前後迄也、

無端々々、

廿日、

サツマヤ新五郎

商人助二郎

學侶集會
良勲房權少
僧都ニ轉任

一、長賢房母去五月ニ死故、觸穢ノ間、今日ヨリ出了、常如院へ遣、
一、サツマヤ新五郎死ル故、虎市丸輕服也、依之内々ヒタ、レ上下用意、無足、又無本
意間、學侶集會今日供目代始ニ在之間令披露、除服許可之間、可召遣之通、尤本望
也、良勲房權少僧都ニ今日轉任了、

十二月三日、ラカン供ノ仁王經修之、掃除ニ未取亂了、
十一日、

善春

一、市ノ善春於忍辱山物ニ狂ヒ、及喧嘩生害了、近年松縫懸目トテ、ナラ中恣ニ非公事
共令沙汰了、其冥罰ニテ物ニクルヒ自滅了、十三重聖也、其跡へアソコ善春入了、
十二日、國ヨリ狀來トテフルテヤ助四郎來、助三郎ハ八月二日・三日ノ比、坂東ノ會津
へ越テ、腹中煩、十四日ニ往生ト云狀來了、言語同斷、不便無極、九才ヨリ見育、當年
卅二才ニ成、兩山垂悲愍之處、當年五月廿日ニ國へ下トテ、安居へ違乞ニ來テ越了、
其後二度越中ヨリ狀ヲ上了、仕合惡之間、無力會津へ下、申カタニシフ團ニテ候へハ
ト申上了、滅數ニモ愚身申事斗心ニハ可在之、不便々々、中々不及言慮候事、當年ハ
三月十一日禪識、死去、十月廿八日サツマヤ新五郎死、八月十四日如此、抑いくなる

年にて如此若者共先立哉、悲歎悲々々々、

十四日、助二郎命日、餘以不便之間、爲吊法花同音十一人申催処、二人指合ニテ九人
來、十疋ツ、布を遣、ラカン供沙汰之、

一、蓮成院古法印正忌トテ、ラカン供ニ長賢房・予出了、

廿四日、社參了、サツマヤ虎市、刀指新十郎ト云、二荷・三種持來之間、二百疋遣了、

藤ニ袴著召上了、蓮藏院專教房七廻、ラカン供出了、顯春正命日、ラカン供了、良勲
房律師・祐觀呼了、蓮成院風呂申付之、若君様へ兩種・樽一荷・茶一器持參了、

廿九日、

一、一乘院ノ北小路大夫中風煩云々、順良ハ生害、彼是仕合不吉也、隨分御修學也、魔
障ノ至也、金剛院ハ御堪當也、高天ノ都維那ハ死去、上座ハ難老者也モ御堪當也、 咲
止々々、

一、舜恩房夕部來語了、當年ハ香觀房得業・禪識房兩人死去、春勝房中臈ニテ落、興隆寺ニナル、・慈明坊
・長識、當年七臈ニテ落テ根ノ尾ニナル、寶光院・圓禪、落テ目安古分云々、寺
門零落也、

〔春日社司祐金記〕

天正十二年甲申正月以來社頭御神事移殿日記

天晴、四月廿一日、

一、去二日瀧水上人死、今日見付了、

三日穢物取除ト云々、

今日ヨリ卅ケ日間瀧水穢間不汲者也、

〔春日社司祐國記〕

和○大 六 廿四日、天晴、

一、猿澤地^也二人死而被替ト申也、

同三人死在之、上由也、

八 十日、天晴、^甲

一、今日内方ヲコリ時ノ立願ノ二百卅座ノ御被スマシ申也、

一、八 廿三日、^卯

一、今西祐國ハ、夜丑時分ヨリ大虫ヲコリ一段迷惑候、

ヒカン中日^也、

八 廿四日、天晴、^戌

一、^中略 祐國ハ自昨夜ノ大虫迷惑、出仕不申者也、送膳無之、

瘡

大蟲

金剛院内室
腫物

八 廿五日、天晴、^己

一、祐國虫不入落也、

八 廿七日、天晴、^辛

一、若宮拜殿^{北原中務}一藤神人死失也、

九 三日、天晴、^丙

一、金剛院ヨリ内方シモツ一段煩之由候て、人來申者也、

九 七日、天晴、^庚

一、金ヲサ、エ今西内方御出也、事外ノ煩氣由也、

九 八日、天晴、^辛

一、金ヲサ、エ伊賀殿同道申參也、

一、若神主殿ヨリヲサ、エ米五升被下申也、

一、宿ありの与次郎方へ御供の^{（マ）}とくとす、一具ト御やり也、是ハヲサ、カタメ也、然者一段祝着申候て伊と酒在之、

九 十一日、天晴、^甲申、

天正十二年雜載

三三九

灸

- 一、御神供以後ヲサ、へ藥付行也、
- 九 十三日、天晴、丙戌
- 一、夜やいと二百枚祐國仕也、
- 九 十四日、天氣、丁亥、
- 一、金おさ、へ今西内方被參也、
- 九 十六日、天晴、己丑
- 一、伊賀殿へ藥取こ入下也、
- 九 十七日、天晴、庚卯
- 一、金ヲサ、エ今西内見舞こ出也、
- 九 十八日、天晴、辛卯
- 一、今日金さ、の子ヲ、月こ一斗五升ツ、卅日こ米ヲヤリテ、チン子こ里物こ渡也、口入与三ヲヤ也、
- 一、先今日米二斗子こ付ヤル也、
〔九脱カ〕
廿七日、天氣、庚子

チン子

五リウエン

- 一、宮田殿〔マ〕テ五りうゑん今西内方一あいかる也、
五文の酒 上殿かる也、
〔十脱カ〕
- 二日、乙巳、雨下、
- 一、金さ〔お脱カ〕、か子くる也、
- 十 九日、天晴、壬子
- 一、金おさ、か子廿日ほと此方ニヲキ、今日返申也、
- 一、十一 廿八日、雨下者也、
- 一、ヲソ一、二斗七升の、今西内方藥、

〔蒲庵稿〕 月溪妙圓禪定尼三十三回忌

這爛枯木、滄○滄然而雲雷興、沛然而河海流、蔚然而蛟量升○龍昇、彪然而虎豹騰、百卉滋而以○ナ煦然、穠麗之極、固○之以下三字ナシ、不可言宣、深本根於空劫那畔、抽枝葉於威音已前、其芬芳也徹十方諸國、其瑞氣也遍刹界○海無邊、維時天正十二年歲舍甲申仲夏廿九日、某禪定○ナ尼累其○ナ回忌者、卅三○三白于茲、津陽難波居住孝信女、就于平安城北龍寶山裡

古溪宗陳拈香法語

摠見禪院、遠分淨財、光賁齋筵、彫裝虛空藏頓書妙法蓮、謹集現前雲侶、諷演大方廣十方佛母陀羅尼之次、假手小比丘宗陳、(古卷)燒此一片、欲結三緣、以供琅殿裡古佛本師大覺如來、今日教主能滿諸願大悲菩薩、本邦大小神祇、傳法諸祖、護法諸天、(殿以下佛號略不記二作ル)所集勝因、爲灵位、(淑)資嚴覺果者也、夫以、(惟)某風前玉樹、夜裡、(裏)裏梅檀、師蔭涼風顛漢、(跡)跡欺木塔老婆禪、畫不成描不就、仰弥高鑽弥堅、勝善分身、直下入鷲嶺翁記荊、摠持得肉、端的承熊耳祖單傳、七通八達左轉右旋、重綴伽陀一絕、(コノ)問祝讚、(二)字アリ、遠大以祝延、(以下三字ナシ)云、三十三回水逝川、忌辰令我憶華鮮、如何耐、(西)此恩波得、(去)去東海兒孫億万年、(因)因、(刊本蒲庵稿ヲ以テ校合ス)

〔大雲山誌稿〕

編年 天正十二年甲申

六月廿二日、紹欽子永照首座卒、

〔大雲山誌稿〕

二十七末寺 普門寺

鐵鏡永照首座、紹欽子、天正十二年甲申六月廿二日寂、繼龜年席住退藏、

永照號、永照知客、真蹟在退藏、(出于花園遺臭、○中略、花園遺臭錄所收道號頌二同シ)

永照

是菴按、右號頌題作永照號者蓋誤也、恐鐵鏡、彰未見本紙、

〔花園遺臭錄〕

龜年三

永照號永照 知客、真蹟在退藏、

跳出作家爐鞴中、非金非石影玲瓏、依倚荷葉滿地綠、彷彿芙蓉初日紅、

永祿辛酉冬(四年) 龜年書□印

〔正法山誌〕

一人物 紹欽
○大和

紹欽者三好之一族、事于細川高國、當時大爲人貴重、歸依龜年矣、但馬山名宗詮、(新豐)號三友院、亦歸依龜年、及龜年遷化、遺命令紹欽贈遺物之茶碗於宗詮、宗詮返書現在東林院、紹欽之子有照首座、龜年住退藏、遷化之後、令照首座嗣席、令直指後見、(宗詮)蓋紹欽大功于退藏、(給力)結御朱印之力、(一)出于紹欽、故龜年令照繼席、照早世、因令照之弟出家繼席、北高是也、(靈雲院古帳有永照名)

〔參考〕

〔花押彙纂〕

釋家 之部

紹欽
三好氏ノ族



○妙心寺文書十山城
天正十年七月晦日付算用狀

○龜年禪愉、紹欽ニ私領及ビ道具等ヲ任スコト、永祿四年九月十一日ノ條ニ、直指宗鰐及ビ宗津、無明院領ノコトニツキ、永照等ニ幹旋ヲ依頼スルコト、天正十年十二月十七日、前田玄以、昌藏主ヲシテ、無明庵ヲ繼ガシムル條ニ見ユ、

〔翰林五鳳集〕

三十四
悼和甘哀傷但分韻

利陽能化玉岡大禪師七周忌、天正第十二秋之初十莫、伏值利陽能化前禪興玉岡大禪師七周忌之辰、頃罹微疾、不離枕席三旬餘、不識歲月之逝、于時閑室禪伯來告予曰、今月某日當玉岡大禪師七周忌之辰、翁記之否、乃袖香辨爲大禪師要供茶菓、予聞之、

瑞興七周忌
拈香法語

且駭且嗟老淚灑然不快、予東遊之日、就大禪師聞講周易、十旬而終之、恩義大哉、先是禪伯寓利陽十餘霜、從大禪師說通經籍之奧、龍拔萃於杏壇之諸徒、加之代能化爲諸徒講書傳、其寸望誰不仰止哉、然則予之於禪伯、可謂異姓兄弟、於是不勝感激、設伊蒲塞、供養近寺淨侶、諷演棧嚴神呪之次、賦伽陀一篇、聊充菲薄（德）尊云、（熊卷）同
大興聖業魯東家、萬卷蟠胸小五東、八月回春再來相、德香不改七梅花、

〔鐵山集〕

下
塔婆

遠州太守雄林宗英禪定門三白忌之塔婆

萬澤君泰三
回忌

諱景三年一夢中、落花時節覺猶空、杜鵑啼雨告何事、洗出青山有文風、本年天正十二甲申三月初八、廼甲陽万澤住主前遠州太守雄林宗英禪定門第三白忌之辰也、孝子君基摘十真如花、獻八功德水、就本庵供佛齋僧、漸寫也、懺摩也、泥視四双獨妙、塊看廿五圓通者也、白業至矣盡矣、散場之次、老塔婆出來、云、何打一偈不褒讚之、予云、心外無法、滿目青山、無事莫生事矣、唯、梵釋漫誌焉、○萬澤君泰歿スルコト、天正十年々末雜載死歿ノ條（補遺）ニ、君泰、父遠江守ノ十三回忌ヲ修スルコト、元龜元年正月四日駿河花澤城攻圍ノ條ニ見ユ、

綠叟道順上坐十七回忌之塔婆

天正十二年雜載

何勞十七辰、日々は玄眞、一路泥丸雪、寒梅不隔春、如上一偈乃爲綠叟道順上坐十七回
忌、書以掛之於高顯者也、孝勳至矣盡矣、看脚下都盧一團鐵、唯、天正十二閏逢沼灘甲申
十一月今日、擔取來歲作噩五月十有二日、以建旃、

溪芳妙泉大姉十七年忌之塔婆

山河大地箇那一靈、孝心片々萬木凋零、來歲酉五月十有五、廼溪芳妙泉大姉慈明忌之
辰也、即今當日孝子各々借八功德水於懺摩場、獻十眞如花於伊蒲塞至哉、會麼無功德、
咄、天正十二甲申十一月十五日漫誌焉、

〔鐵山集〕下火

神○眞珠照徹鐵心腸、今日低摧萬慮忘、石女舞成出世曲、催花簷雨□□□、○三字達當
々ニ作ル、照

岩妙珠禪尼天正十二甲申正月
十八日閏維廿日、

決云、希有々々、正月蓮華猛火涼、咄、○佛眼禪師語錄
ヲ以テ校合ス

北堂何更隔西天、六月孝梅薰大千、越鳥啼終人不見、槿花露碎晚風前、梅甫妙孝大姉下

火天正十二甲申○天以下
○佛眼禪師語錄
○佛眼禪師語錄
ニ作ル、六月十八日、ヲ以テ校合ス、

祖師心印露堂々、雪月風花任起亡、即往南方脚跟下、寒梅依舊吐清香、道印禪門下火

天正十二甲申
十一月十八、

〔鐵山集〕下火

心溪妙法大姉活火天正十二甲申三月十二日○天正十一年
日ニ作ル

大地山河心外法、元歸一念太分明、落花飛絮現公案、百歲光陰鳥亦驚、

到這裏、妙法大姉還會麼、若又不曾、問取舜若多去矣、百年後眼光落地時、作麼生、

四大分離底端的、木鳩火裏一聲々、咄、○佛眼禪師語錄
ヲ以テ校合ス、

桂甫宗林信女百年後活炬甲之万澤遠江寺○守殿後室、

薰入門逢林際噴、女身即是本來身、百年夢駭閻浮、枕胡蝶一飛不隔、○コノ下ニ
春一字アリ、

宗林信女

般若四種看經、冷笑馬郎示鎖骨、

法華三昧得意、熱瞞龍女脫凡鱗、

天正十二年雜載

無想無願、元是新活計、
到這裏

即心即佛、何尋舊主人、

阿轉々轉轉々々 文彬々質彬々

如上閑絡索、即宗林信女現當二世受用底、更有向上那一句、山僧如何指陳玄矣

擲炬云、看々鐵牛產出紅麒麟、咄、
天正十二年甲申、佛眼禪師語錄
臘抄佛成道日、ヲ以テ校合ス、

〔門主傳〕

二十四
○華頂要略十三所收

龍池院二品法親王、

慶福院

天正十二年六月
同廿九日、慶福院卒、

秀與生西

〔淨土傳燈總系譜〕

中 生西

字秀譽、投于能信、剃染受業於山城州川嶋村、建冷聲院、又住桂極樂寺、第三

天正十二年九月廿九日寂、

〔玄朔道三配劑錄〕

天正十二年ノ秋

平野道是患泄瀉、每曉一二次小腹微痛、足冷食如形、脉沉細、五十余日不能、予作腎瀉

而治之、四神圓ノ藥味ヲ粉藥ニメ、米湯ニテ與之、三五日而愈、

平野道是

顯如病ム

〔顯如上人貝塚御座所日記〕

○山城

一、御門跡於此比依御不食、竹田法印五月十

九下向、

廿日餘ノ御不食也、
其内ニ不同アリ、

廿日ノ朝診脉被申、不苦由候、御藥調進候、但御同篇よて、廿

七日ニ筑州御陣所尾州へ來月番ニつきてコサル、也、廿七日發足、

○羽柴秀吉、尾張竹鼻
ヲ攻圍スルコト、五月

十日ノ條ニ、美濃大垣城ニ入ルコト、六月十三日ノ
條ニ、大坂ニ歸ルコト、同月二十一日ノ條ニ見ユ、

〔倒痢集〕

呂翁宗熊居士、俗名熊内藏介、天正十二夏五單三、於尾州邊羅岳革之厄、

有悌妹感慨之餘、造一基卒堵婆云、頌曰、

呂望非態驚一聲、夜來喚覺墨甜城、薰風吹送黃梅雨、月掛雲間弓樣橫、

〔唐招提寺文書〕

○大和

維天正十二年黃鐘下旬□□四天相當照海大和尚廿五廻之御遠忌、爲謝法身長養□師德、新

嚴八幅之輪壇、入阿遮羅明王之三昧地、勤修八千枚之燒供、是則滅罪之中要術、抑又降

廣成道之化儀者哉、依□懸念、尊魂證阿耨芥之妙果、結功德無窮、故伽藍繁榮而三千馱

都播□瑞、戒法守護龍王倍增威光、然者信心行者并列座淨侶、現當之願望一々成弁御之、

乃至緣無緣親疎順逆平等拔濟、謹、

於招提寺玉榮房ノ護ノ讀之、

照海 戒壇院長老名匠也、

維天正十二年

兼者有信心禪尼、詣此靈場、拋隨分財產、

勵逆善成就之懇篤、然則

奉頓寫大乘妙典一部八軸并開結心阿等處也、

恭於三千馱都之寶前對座、(マ)

前ニアル間不書也、

爰相當先妣妙昌禪尼五七日之忌景、營_ニ供佛施僧齋會_ヲ情以、宿_{來會}一樹之陰、是多生之緣、_{下結}汲
 一河之流_末爲他世之契、然者幽儀松羅交意而幾歲月、芝蘭並枕_又多年、在生之時一事一
 言無_レ忤者、終夜半日伺五者、然_所侵_{サレ}病患_ニ去_ル冬_ノ比_赴他界_一悲哉、紅顏翠黛_粧
 反_爲無常之煙_ト、綾羅錦繡袂留霑南浮露、今當五七日忌景、更傷別離意、再會何_可、非春
 風非秋月、一生永隔爲朝暮夕霞、所殘_者鸞鏡披匣每向怪_{衣カ}、絲竿付見添思、芳蘭春花思共
 □閑窓之哀歎獨者、剩息男息女幼雉_稚之遊、家內誰如悲母愛之、哀哉、梁下燕養雛而含哺、
 野外之雉修巢而覆翅、見之弥_増愁歎_涙、雖_レ然歎而無_レ由、如_{不カ}如沒後追善_ヲ營、立、(マ)

維天正_{十脫カ}二年、兼者春秋二季時正者、滅罪生善之良辰、_{修作之成就}逆善勝業者、本師釋尊之教勅也、依

之當所面々諸輩企_ニ此等之白善_一處也、所其志者、先祖聖靈離苦得樂、同屬_ニ請證果阿羅
 漢_ヲ、營種々僧齋、一日無相之修善_{トス}、烈座之諸衆現當_ニ世所願成弁、重乞伽藍常住、
 社頭繁昌_榮鄉內泰平、諸人快樂、篤信氏人等者武運長久、息災安隱、乃至入來聽聞族心中
 所願成就滿足、法界利益平均、(マ)

維天正 相當先師實雅大德卅三廻之遠忌、抽_ニ報恩謝德之丹誠_ヲ、夫自若年入室之日_ニ至
 法身長養之今_ニ、悉彼在恩德_{師長}一字千金之文、欲報有餘、然今拋_ニ恆沙天之懇志、取修追福
 般若理趣經一部十軸_ヲ書寫_シ、同經王之入_ニ三昧祕法_ヲ勤修_シ殊造_マ、
 此三字ハ細字也、

維天正十二年蕤賓上旬第七天、兼有信心禪尼、詣此靈場、拋隨分之財產、勵逆善成就之
 懇篤、

然則

奉頓寫大乘妙典一部八軸并開結心阿等處也、恭於三千馱都寶前對座、一面燈炬列_レ光_ヲ、
 新_タ所_レ書者、四千餘行之次第六万九千文字也、

一々筆墨鮮ナリ、作法已慇懃ナリ、誰レカ云レ^{イルカセスト}忽緒之^{レテ}、

依之屈^シ無學聖客^ヲ、凡聖僧齋ヲ營ム、

極聖何^ソ不^レ鑿^ニ一毫之微志^ニ乎、

尤^モ以^テ足^レ爲^ス善根之證明^ト耳、

〔寛永諸家系圖傳〕^{百五} 町野

某 伊豆守、
○寛政重修諸家譜町野氏譜「某、伊豆守、幸行が呈譜、經幸に作る。」ニ作ル、

秀長 備前守、

繁仍 左近、

秀長 天正十二年八月十九日、とし七十七^ヨて逝去、法名淨琮、
○寛政重修諸家譜秀長譜、足利氏ニ仕フルコトヲ載ス、

〔高代寺記〕^{○攝津}

一、永正年中ヨリ以快賢爲住持、

羅漢講勸請伽陀奥書云、依闕當用事書寫畢、雖外見其憚多候墨付畢、永正二年十二月十三日、高代寺少貳快賢、自是永祿七年甲子マテ六十年、是^{ヨリカ}ハ快意代也、天正十二年甲

申年五月十三日ニ快意逝去ス、以快善爲住持、永祿七年ヨリ二十一年、

〔寛永諸家系圖傳〕^{百十} 九鬼

定隆 宮内大輔、
法名明甫、

淨隆 宮内少輔、
法名淨明、

澄隆 弥五郎、
淨心、

嘉隆 右馬允、
大隅守、

澄隆 淨隆死去の後、澄隆叔父嘉隆と力をあはせ、ともに田城の城にありて、七島の凶徒としばく戦といへとも、勝事を得ずして、勢州朝熊嶽にしりそく、そのち合戦數度にいたりて終^ニ田城に^ウへる、

〔寛政重修諸家譜〕^{九百五十一} 九鬼

定隆 宮内大輔、

淨隆 宮内少輔、

嘉隆 大隅守、

天正十二年雜載

澄隆	彌五郎
女子	
嘉隆	右馬允、大隅守

澄隆 父淨隆死するのち叔父嘉隆と力をあはせ、ともに田城の城にありて、しばしば七嶋の徒黨と戦ふといへとも、澄隆等利をうしなひ、伊勢國朝熊嶽に遁る、その後合戦數度に至りつゝに田城を取返しふたゝひこれに住す、天正十二年十一月二十三日、田城において死す、法名淨心、妻ハ坂内兵庫頭某の女、

太宗永播

〔龜山志〕

下 歷代志下之一

第四代太宗永播禪師、不知何許人、謁大雲和尚剃落、且得其法

隨緣遊方以涉日也、愚庵延召讓席而退、師繼席鳴法道已有年矣、天正十二年八月十二日

唱滅、葬于本山之北、後移今之所、

竊惟、依大雲禪師而披剃受具、且得其法、嗣其席者、正是四人、其法兄是東榮、次是寬

室、愚庵、太宗也、大雲退位雲興、則令東榮嗣其席、後爲本山開祖而住、且退位、則令

寬室嗣其席、而寬室退位、則讓席愚庵、又愚庵退位、則讓席太宗、不教他人妄嗣師席、

可謂師資相承、兄弟甲乙以負住持之任者、視今佩一師之印而嗣諸刹之席、則稍又異也、其之謂似世俗將其家繼時、依兄弟之序以俾嗣其家者、則予其辨之、俗家只令祖父血肉所分者嗣於其家、以永於其係也、僧家專令佛祖慧命所傳者嗣於其席、以久於其法也、

〔寬永諸家系圖傳〕

百七 鈴木

重政

雅樂助、生國參河、

重直

越後守、生國同前、

信重

兵庫頭、生國同前、母は清康君の息女、

伊直

久右衛門、生國同前、母信重に同じ、

重直、清康君をよひ大權現につゝへたてまつる、天正十二年三月十三日足助にをひて死す、法名泉孤、

〔寬政重修諸家譜〕

千百五 鈴木

重政

雅樂助、母は某氏、

鈴木重直

重直 越後守、母は某氏、
重吉 市左衛門、

信重 兵庫頭、之方が呈請し兵庫助
と作る、母は清康君の御養女、
伊直 久右衛門、母は信重よおなじ、

重直 清康君より東照宮に歷仕し、天正十二年三月十三日、足助庄にをいて死す、法名泉孤之方が呈請し、譜泉古、三河國加茂郡の妙昌寺に葬る、妻は清康君の御養女、

〔諸氏家牒〕下 鈴木 尾州

重長 市之進、三郎大夫、一之、又一直、實帶刀重興男、元龜元年四月十四日卒、峰室泉孤、

重顯 喜三郎、兵庫、越後守、參州足助眞弓城主、仕神君、天正十二年二月十三日卒、梅谿英春、

康重 喜三郎、伊賀守、本重次、同城主、慶長六年八月十三日卒、香樹院殿土歸萬國普秀、

〔香積寺過去帳〕河

梅谿英春居士 天正十二甲申年三月十三日 紀三郎重顯鈴木

鈴木重顯

〔三河堤〕二 板倉 碧海郡

好重 板倉八右衛門、松平好景に從又、永祿四年四月十五日、好景に東條義照に永良堤に戰つ時ニ、好景終に戰死ス、好重モ又苦戰ノ討死ス、四十二才、法名源宣、

板倉忠重

忠重 板倉左衛門、天正十二年卒ス、

勝重 四郎左衛門、從五位下、伊賀守、自幼禪僧ト成リシヲ、或年板倉一族皆戰死ス、依釣命還俗ス、五百石ヲ賜、慶長八年蒙釣命、京都所司代ヲ勤、二万石ヲ賜フ、

定重 喜藏、天正五年十月、於遠州小山城討死ス、

〔寛永諸家系圖傳〕百二 神谷

吉久 助兵衛尉、生國三河、

長直 金七郎、

吉久、水野下野守の家老たり、天正十二年六月二十七日參州刈屋にをひて死す、七十七歳、法名全忠、
○寛政重修諸家譜神谷吉久譜異事ナシ、

〔菅沼家過現名帳〕高野山平等院本

三州野田古川長作
覺圓禪定門
天正十二年九月十二日
天正十二年雜載

神谷吉久

〔寛永諸家系圖傳〕 百十 門奈

門奈直宗

直友 五郎大夫、

本國遠江、○寛政重修諸家譜門奈直友譜ニハ「今の呈譜に藤太郎秀直に作る」トアリ、

直宗 太郎兵衛、

生國同前、

直友 善三郎、生

國同前、

宗勝

助左衛門尉、生國同前、○同上書、門奈宗勝譜ニハ、「門奈鉄右衛門正安が祖、初重里」トアリ、

直宗 今川義元・同氏眞よつうふ、

(徳川家康)

駿州落居の後、東照大權現遠州濱松よおハしますと

き、召出されつうへたてまつり、すなはち同國「○同上書、コノ間ニ、豊田郡のうち」トアリ、岡村駒場をたまふ、天正十二年五月十八日、六十三歳よして死す、法名淨永、

〔井出文書〕 井出氏傳記

正次 甚助、志摩守、

從五位下、

母與津氏女 天正十二年申七月十六日卒、法名蓮如、

井出正次母

〔龍雲寺過去帳〕

○駿河 天正十二甲申

月窓抄心信女 九月廿日

如淀童女 十月三日

却岩鈔永大姉 八月六日 木内氏

〔月江寺過去帳〕

○甲斐 十一日

天正十二甲申

祠堂

明庵了光禪定門

尾張寺小林宗賀齋

小林宗賀齋

廿二日

天正十二甲申

笑院闇公記室

〔新編相摸國風土記稿〕

三十三 足柄下郡之十二

早河庄 中島村

吉祥院 淵芳山ト號ス、(福嚴寺)同末、永祿元年

僧仙岩守鶴建、天正十二年九月廿九日卒、本尊釋迦、

天正十二年雜載

〔新編相摸國風土記稿〕

三十八 足柄下郡之十七 曾我里 曾我原村

舊家貞吉 中村ヲ氏トス、元ハ曾我氏

ナリ、○中略、中村氏ノ（教助）其子兵庫助元助、元助ノ弟左平太祐久ハ本國ニ下向シ、當所ニ住

ス、天文七年六月五日卒、祐久多門祐之ヲ生ム、天正十二年二月朔日卒、祐之ノ子平次左衛門稠助、稠助ノ養子多門

亮祐良ノ時、氏ヲ中村ト改メ、曾我郷ヲ始近邑十五村ノ庄屋タリ、○下略、天正十八年豊臣秀吉制札ヲ下スコトニカ、ル、

〔新編相摸國風土記稿〕

六十一 高座郡之三 大庭庄 香川村

玄珊寺 香川山ト號ス、曹洞宗 大庭村宗地

頭本間氏某、先祖平兵衛季忠、菩提ノ爲ニ建立ス、

系圖或ハ季勝ニ作ル、遠州ノ人、法號金剛開院樹心玄珊、天正十二年四月廿七日卒、

山冷室長嚴、慶長五年十月廿日卒、本尊釋迦、

〔新編相摸國風土記稿〕

六十七 高座郡之九 龍像寺 岡野氏墓

大和守 夫妻・越中守

融成入道江雪夫妻等ノ碑アリ、

○口ノ碑清徳院知岩宗仁、天正十二年三月七日、室梅林院董窓妙香、天正十四年六月三日、室圓珠院華心妙英、慶長十七年十一月十一日等ノ文ヲ彫ル、

〔寛永諸家系圖傳〕

百二 熊澤

吉重 和泉、生

國武藏、

中村祐之

本間季忠

〔新編武藏風土記稿〕

七十一 橘樹郡之十四 川崎領 潮田村

光永寺 字下辻ニアリ、禪宗曹洞派同郡下末吉村

ニシテ三寸許、開山ハ純應ト云、此人俗姓ハ今川氏ノ末流ニシテ、入野將監光興ト云人ノ三男ナリ、○中略、文祿四年九月十日純應死歿ノコト等ニカ光興ノ嫡男中務光行ノ嫡子ヲ潮田左馬介光永ト云、光興初ハ入野ト名乗シカ後ニ潮田ニ改シトイヘリ、コレハ

當所ニウツリ住テ在名ヲ名乗シニヤ、光永カツテ一字ノ寺閤ヲ愛ニ營ミシニヨリ、潮田山ト號シ、光永寺ト名ツク、○中略、永祿十一年正月廿三日光永ノ法號ヲ花岳了臺大禪定門ト云、天正十二年三月十八日卒セシ人ナリ、父子トモニ當寺ニ位日力行歿フコトニカ、ル、

牌ヲ安セリ、本堂六間半ニ六間、東向ナリ、門モ同シ、

〔新編武藏風土記稿〕

九十 多摩郡之二 木曾郷 鶴岡村

圓成寺 境内除地千六百五十坪、小名宿ニアリ、淨土

モト小田原北條家ノ侍ニテ、山中修理亮トイヒシモノナリ、後ニ通世シテ僧トナリ、當寺ヲシラキシト云、天正十二年寂セリ、按ニ山中修理亮ハ北條左京大夫氏綱ニツカヘテ數度武略ヲ顯ハセシ功ノ者ニテ、ソノ比武士司ニ補セ

○新編武藏風土記稿、

山中修理亮

〔新編武藏風土記稿〕

三六一

天正十二年雜載

〔新編武藏風土記稿〕

三六一

天正十二年雜載

〔新編武藏風土記稿〕

三六一

天正十二年雜載

〔新編武藏風土記稿〕

三六一

天正十二年雜載

〔新編武藏風土記稿〕

三六一

天正十二年雜載

〔新編武藏風土記稿〕

三六一

天正十二年雜載

〔新編武藏風土記稿〕

三六一

天正十二年雜載

〔新編武藏風土記稿〕

三六一

天正十二年雜載

〔新編武藏風土記稿〕

三六一

天正十二年雜載

〔新編武藏風土記稿〕

三六一

天正十二年雜載

〔新編武藏風土記稿〕

三六一

天正十二年雜載

〔新編武藏風土記稿〕

三六一

天正十二年雜載

〔新編武藏風土記稿〕

三六一

天正十二年雜載

〔新編武藏風土記稿〕

三六一

天正十二年雜載

〔新編武藏風土記稿〕

三六一

天正十二年雜載

〔新編武藏風土記稿〕

三六一

天正十二年雜載

〔新編武藏風土記稿〕

三六一

天正十二年雜載

〔新編武藏風土記稿〕

三六一

ラレシコト、北條五代記ニ見ヘタリ、又小弓御所御没落記ニ云、天文六年、八正院義明討死ノ時、小弓ノ侍逸見山城入道祥仙モツ、イテ討死セントセシトキ、山中修理亮ヨキ敵トメサシテ馳來リシカハ、祥仙イサキヨク首ヲノヘ討(ト股カ)マシト詠セリト云云、修理亮カ心ハヘオモヒヤラルヘシ、本尊彌陀ノ立像ヲ客殿ニ安置ス、コノ像ハ惠心僧都ノ作ナリト云フ、長二尺ニアマレルナリ、

尊榮

〔新編武藏風土記稿〕

百六十一 入間郡之六 未勘 下奥富村

廣福寺

天台宗、仙波中院末、藥王山地藏院ト號ス、開山尊榮、永祿十一年當寺ヲ草創シ

テ、天正十二年七月十一日寂セリ、○下略、元和九年十一月七日、徳川家光鷹狩ノコト等ニカ、ル、

〔新編武藏風土記稿〕

二百七 埼玉郡之九 百間領 中島村

醫王院

新義真言宗、東村西光院末、稻荷山宗祐寺ト號ス、當寺ハ名主徳右衛門カ先祖嶋村出

嶋村道明

羽宗明ト云モノ造立セリト云、宗明カ先祖ハ嶋村彈正左衛門高智ト號ス、○中略、享祿四年六月、下ヘ下リテ當村ニ住シ、天正十二年八月十五日卒ス、出羽宗明ハ其二子ニシテ寛永元年十月五日卒ス、法名ヲ宗祐ト云、本尊不動

〔新編武藏風土記稿〕

二百三十一 榛澤郡之二 深谷領一 萱場村

清心寺

淨土宗、下總國岡田郡飯沼村弘經寺末、石流山八幡院ト號ス、○中略、天正八年二月、當寺創立ノコト等ニカ、

岡谷清英

ル、開山萬譽玄仙、慶長十年正月七日寂ス、開基ハ上杉氏ノ老臣岡谷加賀守清英、法名ハ皓月院圓清譽心居士、天正十二年十一月八日卒ス、按ニ、谷野村皎心寺モコノノ開基ニシテ、ソコノ傳ヘニハ、元龜年中ノ卒トイヒ、又過

去帳ニ加賀守、法名安仲皎心庵主十五日トモ記セリ、カクマチマチノ傳ヘアルカ上ニ、當寺ニ傳ル所ハ卒年モ法諡モ差ヘリ、イツレカ正シキヤ、本尊彌陀ヲ安セリ、

〔新編武藏風土記稿〕

二百三十七 那賀郡之三 白石村

光嚴寺

禪宗曹洞派、榛澤郡末野村少林寺末、威音山ト號ス、○中略、天正十九年十一月、當寺ハ

猪俣邦憲

モト臨濟宗ニテ、開山圓融禪師峻翁令山ト云、應永十五年三月六日示寂ス、其後猪俣能登守邦憲亡父菩提ノ爲中興開基シテ今ノ宗派ニ改メ、且寺モ父ノ法號ノ二字ヲ摘ミテカク銘セリ、ソノ石塔墓所ニアリ、明庄院光山宗嚴大居士ト號ス、天正十二年十二月朔日卒ス、コノ頃ノ僧ヲ天翁恩大和尚ト云、寛永二年某月二十七日寂ス、○下略、寛永三年

〔武藏國 佛地院過去帳〕○武藏 六日

(上野群馬郡) 澁河眞光寺

什海法印

天正十二申八月

〔日本洞上聯燈錄〕

十 龍穩節菴良筠禪師法嗣

天正十二年雜載

武州龍穩天室禪睦禪師、上總長南平氏子、依州之三途臺薙落、學台教、聞龍穩節菴禪師法雷遠震、逢餐風德、乃往造焉、一見器之親炙積久、遂入闔奧、及菴退席衆請住本寺、師勉受之、天正丁丑移領最乘、兩載復歸龍穩、上堂師姑是女人與麼會便不是、師姑是女人與麼會方始是水不洗水、金不博金、要識不遷義、日出東方夜落西、天正甲申八月二日寂、

龍穩天室禪睦禪師法嗣

武州龍穩布州東播禪師、信州安田氏子、十四得度、十八歲預天室座下、委心請法、

○下略

〔本化別頭佛祖統紀〕

十九 東都下谷宗延寺開山日精上人傳 附日倥列傳

師諱日精、號三光院、不詳何許人、蚤入空門、智行兼備而美也、相州小田原城下有報新氏宗延者、道契殊厚、敬待竭志、延偶相勝地造一精廬、併孟衣資爲師供之、師亦感其誠、安心穩坐讀誦、唱題之外無他事也、宗延老矣感疾而逝、師憐之、以告官、封廬爲香花地、扁呼報新山宗延寺、隸身延山、時之堂頭慈雲新上聞而容之、天正十二年甲申師偶遭

微恙、自知不起、召法子日倥叮囑寺職、唯竣終焉、十一月六日如眠氣終、窆骸於山後矣、

〔里見家過去帳〕

高野山妙音院本
○紀伊

里見義弘

常灯 瑞龍院殿在天高存居士

安房上總下總太守源朝臣里見義弘爲菩提義頼建立、

天正十二甲申季三月二建、天正六戊寅五月廿日

常灯 祥光院殿高嶽梵長大姉 大善根

安房上總下總太守源朝臣里見義弘御簾中、

天正十貳甲申季二月十三日二建、

夜燈進上 一露幻產童女

安房上總下總太守源朝臣里見義頼御息女、

天正十二年雜載

天正十二年雜載

天正十貳二月十三日二建、

常燈

法印頼長

安房府中寶珠院七代目之住持、
天正十貳甲申季三月廿一日逆修也、

乳 法印有鑒

房陽寶珠院、
天正十二二立、永祿元季六月七日、

乳 安叟正龍禪門

房州岡本ノ薦野殿、
天正十貳十一月十八日、

先譽道通

二濱ノ住、窪田因幡守、
天正十貳三月建、

觀空妙察

岡本大納言殿猿渡雅樂守息女、
天正十貳季二月十三日立、

直心見性居士

金谷鮎川正木兵部大輔、
天正十貳三月一日立、

正木兵部大輔

華屋妙榮信女

岡本兵部少輔母、
天正十貳季林鐘

〔上總國諸侯大夫過去帳〕

高野山西門院本
○紀伊

賀藤家

妙圓禪定尼

久留里賀藤越前守老母、
天正十二壬午年四月十五日、

〔常陸日月牌過去帳〕

高野山清淨心院本
○紀伊

乳 常務眞壁田口二郎左衛門立之、
雲昇道高禪定門

逆修

天正十二年三月廿一日

日牌 常務ウシユク爲家中江戸崎館ヨリ、
皎月妙澄禪定尼 淑靈

天正廿二年申六月二日、取次小林出羽、

乳 常務眞壁田口玄番爲親立之、
安臻道意禪定門 靈位

天正十二年未極月九日

天正十二年雜載

田口爲親

泊崎備前守

月 常務掃岡爲息泊奇備前守立之、
行翁幻順 靈位

天正十二年二月廿九日

松本筑前守

日牌 常務鹿嶋爲娘松本筑前守立之、
松臺妙霜禪定尼 靈位

天正十二年申霜月五日

月 常務鹿嶋内タイホウヨリ立之、
枇山明源禪定門 靈位

天正十二年申二月十三日

日牌 常務眞壁爲親之小神野右馬助
拾翁善周禪定門 靈位

天正十二年申二月廿九日立之、

月 常務完倉爲老母羽生藤八郎立之、
妙春禪定尼 靈位

天正十二年十二月十七日

月 常務完倉爲老母田村備前守立之、
妙悅禪定尼 靈位

天正十二年三月廿四日

月 常務完倉ナカツカ肥後守立之、
道椿禪定門 逆修

天正十二年三月廿一日

月 常務眞壁笠倉
道秀禪定門 靈位

天正十二年申三月六日

平塚左近大
夫

日牌 常務海老嶋爲親平塚左近大夫立之、
江月宗天禪定門 靈位

天正十二年六月廿一日

北條筑前守

月 常務北條筑前守爲息女立之、
花總妙舟禪定尼 靈位

天正十二年極月四日

月 常務笠間爲上野介サカトコウシツ
達久善通禪定門 逆修

天正二年申三月廿一日立之、

月 常務眞壁客人
妙蓮禪定尼 逆修

天正十二年甲申十月一日

天正十二年雜載

天正十二年雜載

月 常州下館水谷太郎左衛門尉爲御乳立之、
妙壽禪定尼 靈位

天正十二年六月廿九日

月 常勢完會ヲチノ爲ニ閑居立之、
妙芳禪定尼 逆修

天正十二年甲申十月一日

秋元筑後守

月 常勢江戸崎秋元筑後守内方
妙仙禪定尼 逆修

天正十二年甲申二月朔日立之、

月 常州府中爲中谷彈正忠老母立之、
的翁宗端禪定門 靈位

天正十二年四月廿二日

石嶋大和

月 常勢海老嶋石嶋大和家中立之、
妙壽禪定尼 逆修

天正十二年甲申十月朔日

日牌 常勢江戸崎爲家中文六郎立之、
花庭芳春禪定尼 靈位

天正十二年三月十一日

日牌 常勢戸崎菅谷源六郎ノ爲老母立之、
源滴宗心禪定門 靈位

天正十二年甲申十二月八日

月 常勢竹原梶取与衛門尉ノタメニ立之、
月叟淨心禪定門 靈位

天正十二年十二月十九日御す立之、

月 常勢江戸崎爲一不齋從家中立之、
心叟長全居士 靈位

天正十二年甲申五月廿七日

月 常勢小田爲友光大膳ノ豊前守立之、
惣譽榮光 靈位

天正十二年甲申八月四日

天正十二年雜載

池田甲斐守

月 常務府中池田甲斐守タメニ家中立之、
道肝禪定門 靈位

天正十二年甲申四月廿二日

小泉大炊助

月 常務府中小泉大炊助老母立之、
道空禪定門 靈位

天正十二年甲申四月廿二日

月 常務完倉爲与五郎松延大炊助
盛喜禪定門 靈位

天正十二年甲申八月五日立之、

〔常總遺文〕

七 「赤松新右衛門所藏」
多賀谷氏并御家中過去帳拔書

高野山法生院谷 地藏院
花谷

多賀谷重經

日 妙高禪定尼 多賀谷下總守殿重經御建立、
天正十二年甲申五月十一日、取次里子心性房、
(牌下同)

香丸豐後守

道仲禪定門

下妻香丸豐後守爲子息立之、
天正十二年三月十六日、取次本宿福壽坊、

丹下右馬助

日 松兼妙長禪尼 下妻丹下右馬助爲老母立之、
天正十二年九月廿四日、

〔清淨心院過去帳〕

伊 〇紀

那須資胤
同 資晴

江月院殿蘆錐雪公大禪定門

下野那須殿建立、
天正十二年甲申二月十二日、

〇那須資胤歿スルコト、天正
十一年雜載死歿ノ條ニ見ユ、

〔三好家過去帳〕

高野山持明院本
〇紀伊

備後尾道
城戸

天正十二年
孔 淨清禪定門逆修

備後尾道
城戸

七月廿一日

天正十二年
孔 妙清禪定尼逆修

備後尾道
城戸女中

七月廿一日

天正十二年
孔 月清玉照禪定門靈位

備後尾道
小城戸

霜月十六日

東兵庫助

天正十二年雜載
孔 花岳妙春禪定尼

月牌 備後勿三吉住東兵後助立之、
天正十二年甲申六月十八日、

天正十二年雜載

〔河野家過去帳〕

高野山上藏院本
○紀伊

道安禪定門

靈位

豫州渡邊伯耆守殿建立之、
天正十二年甲申年三月九日、

庵說正泉

靈位

豫州爲松田美作守殿建立焉、
天正十二年甲申年五月廿二日、

宗祐禪定門

靈位

豫州渡邊四郎右衛門殿建立焉、
天正十二年甲申年十一月廿二日、

〔本土寺過去帳〕

○上
○下總 六日

武劔澤田妙昌寺

日護 天正十二年甲申
十二月

〔本土寺過去帳〕

○中
○下總 十八日

原肥前殿ノ上

法行尼 天正十二年甲申
正月、邊田ニテ、

十九日

日理 天正十二年
甲申十一月
大泉律師

〔本土寺過去帳〕

○下
○下總 廿七日

松田美作守

神田宗義

眞如院 京都大原忠菅母
妙永 天正二十一年十一月

廿八日

妙意 天正十二年
甲申十二月
經藏坊母

〔常總遺文〕

二 神田氏家系

重常

明應六年十二月十一日生、幼名右門、天文十八年
四月二日、四十八才ニ而死去ス、俗名平左衛門、

宗義

大永二年十二月十一日誕生、幼名昇、天正十
二年四月三日、六十三才ニ而死去ス、平三郎、

宗穗

天文十五年十月二日生レ、幼名金太郎、慶長九年八月
三日死去ス、行年五十九歳、法名仙壽、俗名藤兵衛、

〔和光院過去帳〕

○常 三日

道覺禪定門

六日

天正十二年甲申

天正十二年雜載

天正十二年雜載

道香 川内主膳
即說之親

七日

天正十二年甲申七月七日
道祐禪門 和光院第六
代有勝父

十六日

天正十二年甲申九月
妙祥禪尼 (實重之)
外岡伯耆守老
母、七十九才

〔赤濱妙法寺過去帳〕

陸○常

天正十二年甲申

妙受靈

五廿三日
門前二郎衛門女房

蓮主靈

六月廿
八日

妙要靈

十月三日
新田
原口丹後守ノ内

妙曉靈

十一月
十四日 日顯□悲母

〔美濃國諸家系譜〕

青木

直守

勘解由子、青木隅右衛
門尉、或新左衛門、

青木直之

直之 直守子、青木
新左衛門、

一矩 青木修理、紀伊守、後
入道而宗也、云、

某 青木新右衛門、仕蒲
生飛彈守藤原氏郷、

晴直 青木武助、仕板
倉伊豫守重形、

女子 山岸作十郎
光長妻、

直之 母ハ氏家常陸介友國入道卜全妹也、仕齋藤左京太夫義龍、弘治二年丙辰四月、

鷺山合戰ニ義龍方也、住安八郡青木、爲嫡流家、天正十二年甲申七月十二日死、年
五十一、

〔美濃國諸家系譜〕

遠山

景友 遠山刑部少輔、入道宗
庵、惠那郡明地城主、
(知下高)

友春 遠山藤四郎、相模守、民部入道、號宗
寂、或宗俊共云、惠那郡明地城主、

秋季 遠山河内守、久須見氏、仕織
田信長、出參州桶狹之合戰
(前卷)

友政 遠山久兵衛、始木曾明照ニ
住之、惠那郡苗木城主也、

遠山友政

天正十二年雜載

三七七

三七六

某角野高四郎、惠那

某郡香戶野ノ城主、

某郡吉良見六郎、惠那

某郡吉良見城主、

某遠山左衛門、住惠那

某郡大船、飯羽間共云、

某岸山

某遠山新九郎、

某仕信長、

友政 仕織田信長、

天正十二年甲申六月死、

年六十一歲、

〔北高禪師詩集〕

○信濃

□生規範勤三從

五障忽消空合空

□還鄉活路太

不留朕迹乘狂風

夫曰 義窓貞範禪定尼

友政 仕織田信長、天正十二年甲申六月死、年六十一歲、

常住作用 勤生產業充衷

皆与實相 不相違背真通

若能如是、老去無地獄、亦

无天堂、世間之樂及涅槃樂、

擲火、良久云、南山燒炭北山紅、

于時天正十二年甲申八月吉日

〔黑川大衡系譜〕

○陸

源姓黑川氏大衡家族譜

景氏 正統上同、○顯氏ノ條、「黑川氏正統也、

傳記見家譜、因略之末之倣」ニ作ル、

重定 細川藤三郎、源

重定 天文十五年二月、爲黑川郡宮床邑主細川源左衛門源重信見養爲嗣、

天正十二年六月四日卒、年五十六、母同、宗氏、

〔出羽白鳥家回想錄〕

谷地古城主白鳥十郎長久公之系圖寫

政茂

天正十二年雜載

三七九

白鳥長久

長久 白鳥十郎、母八宮内郷藤原維廣娘、
長久妻山形城主源義光朝臣娘也、

法名 大陽院殿丹山膺公大禪定門

天正十二年甲申六月七日逝去、

〔諸寺過去帳〕

中 高野山過去帳

梅岳宗春禪定門

越前府中丹羽小平次、天
正十二年甲申正月十日

〔赤松有馬家回向名簿記〕

高野山赤松院本
○紀伊

天正十二年甲申十二月九日

孝橋重房

高巖寺重質道堂居士 孝橋新五郎重房

後修理亮

〔赤松諸家大系圖〕

○播磨

第十 赤松義則

上原 圓山 孝橋 佐
用 横山 中村 小河

秀時 孝橋新五郎、
修理介、

重房 新五郎、
中村修理太夫、

景利 中村孫
之進、

慶長十二年
效ストノ説

朝枝春元

重則 中村小三郎、
左馬介、
吉房 中村牛
之助、
重利 中村小太郎、
孫兵衛尉、

重房 天文十六年生ル、住揖西郡中島、与別所小三郎長治、天正二年二月一日、籠三
木ノ城、而天正八年正月、長治自殺ス、於父移籠因羽鳥取城、明年六月、餓盡キ城
中不能如何、因是魁將吉河・森下・中村三人自殺シ、以テ乞救衆共之命、敵許之、
三將早メ而死ス、城兵盡免ル也、此時重房販播羽揖西郡中島、慶長十二年二月九日
卒ス、六十歳、諡高巖院重質道堂大居士、

〔吉川家臣覺書〕

二 聞書

朝枝加賀守

若名ワ弥次郎、其後右京又加賀守ト云、元ワ朝枝・境トテ吉川家ノ兩臣タリ、然ニ加
賀守代ニ到テ牢人仕儀ハ、興經公毛利元春公ヲ御養子ニ被成ル、処ニ、興經公御惡逆
之由訴人有之、毛利元就公ヨリ興經公御切腹被仰付節立ノキ候也、○毛利元就、吉川興經父
年九月二十七日 此段者道入尋常物語申候者、其節加賀守興經公工色々御諫言申上候処ニ、
ノ條ニ見ユ、御證引ニテ無之、加賀守所存ワ、畢竟某申共、只今之通ニ守護仕ヲ力ニ彼思食御證引
ニテ無之ト存シ立ノキ候、御頼ミニ被思食臣下共不罷居候時ワ、御逆心毛直ルカト存、

一端立退候也、

一、夫ヨリ安藝ノ奴田隆景公御領内ニ罷居候ヲ、隆景公被聞食付、元春公工御理被仰達、御分別候故、御家頼ニ被食置候事、

一、左候エテ年々御奉公仕ニ付テ、有田式部少輔跡式七拾五貫拜領候事、

一、御座敷工被食出、有田御名ラセ候事、

一、有田ト申ワ、小早川ニテ高家也、委細ワ小早川ノ御系圖ニ有之、

一、藝弐嚴嶋御陣、陶ト御弓矢之時、同國之大立・廿日市エ毛利家悉ク御出候、嚴嶋本城ニワ隆景公御人數被籠置、御三殿色々御談合之中ニ、於今ワ野嶋・來嶋御頼無之テワ難叶トテ之儀ニ付、兩家居城与弐工爲御使者加賀守被指渡、則時兩家共同道候テ罷歸候事、○毛利元就等、陶晴賢ヲ安藝嚴島ニ破ル

右之證據、兩家ヨリ加賀守エ書狀有之、

一、在候エ手兩家ノ者共ト御談合候エテ、兩家着船之時、未明ニ御打渡候、隆景御持ノ城工御籠城被成ニ、加賀守御供仕罷渡、陶ヲ被追崩節、兩度高名ニテ、御感狀二通隆景公ヨリ被遣候事、

一、陶御退治故、防長兩國ワ元就公御手ニ入、其ノ明ル春周防ノ内ス、マ之城御攻落

節、○毛利元就、周防須々萬城ヲ攻ムルコト、弘治三年三月ノ條ニ見ユ、加賀守一度高名ニテ、御感狀一通有之、

一、同年、周防ノ内大野ト申所ニテ貳拾五貫御加増拜領之事、

一、其ノ次年、筑前立花道接・高橋・秋月三人衆エ中國御味方被仕候ハ御出陣有度之由之御使ニ、加賀守三ヶ年之間上下仕、三人衆、其外ニモ御一味可申上之由被申衆有之付、立花御陣思食被立事、○立花鑑載、毛利元就ト謀リテ大友氏ニ背ク

一、彼國御下被成元就公・元春・隆景公御連判之御書被成候、其紙面云、

其方三ヶ年身勞故、今度立花御出陣御本望ニ被思食候、弥於方角走廻ル一申キ者也、

一、彼國工罷下候手ハ、ハカタノ小福寺ニ宿仕、方々被廻候事、

一、山口ノ城市川經佳爲籠処ニ、豐後ヨリ義長ヲカタライ入、叛逆ニ付、○大内輝弘、周防

コト、永祿十二年十月、彼國御退陣被成候テ、則時ニ彼叛逆ノ兩人被打果、山口ニ隆景公ヨ

リ加賀守ヲ一年被殘置、明ル年、奴田工被罷歸ル、然ル処ニ、ハカタノ小福寺ノ万念和尚彼寺讒咀有之ニ付テ、小福寺ノ住不相成ニ付テ、加賀守被頼被罷上候、右之段隆景公申上ニ付、奴田ノ蓮華寺ト申寺ニ百貫御付候テ、萬念和尚ヲ被置、其後輝元公工被仰上、吉田ノ洞春寺ノ住ニ万念和尚被成候事、

一、其後豫^(教通)河野彈正殿御遠行被成、御息四郎殿御幼少ニ候故、隆景公ヨリ加賀守一人被付置、彼國ニテ河野家ヨリ知行百貫拜領被爲仕候事、付タリ、
 隆景公ヨリ豫州罷渡ニ付、藝州大崎ノ内ニテ廿貫拜領候事、
 一、河野大方様ヨリ半兵衛母加賀守妻ニ被遣候、母本國土佐ノ國、吉良殿一老天竺飛彈守^(朝枝)息女、居城ワ土佐ノ内浦ト申所也、長祖加邊殿^(宗我部)彼城攻被落父子三人切腹被仕候処ニ、彼母二歳ノ年、ヲチ連レ落、豫^(宗我部)勃^(朝枝)ドフコノ町ニテソダテ、河野殿エ上ケ申事、
 一、其後半兵衛出生候テ、藝^(朝枝)勃^(宗我部)本領百廿貫、甥ノ有田右京ニ讓リ候事、
 一、豫^(朝枝)勃^(宗我部)一國弓矢事、何モ諸國人下知法度、奴田ヨリ被仰付被罷居候事、
 一、其後彼レ年寄ニ付、御理リ被申上、奴田エ罷歸、又其跡エワ有田右京ヲ被遣候、二三ケ年ノ中加賀守死去、
 戒名三甫宗玄居士、天正十二年十月九日、慶安五年マテ六十九年也、
 一、加賀守舍弟一人有之、朝枝三郎左衛門ト申、興經公御切腹之節、被仰付相果、右之子右京、彼レ幼少ニ付テ、今田上野介殿御理ニテ出家ニ成被置候処ニ、加賀守實子無之ニ付テ、上州エ申請、奴田エ置越、弥四郎ト申候、桂伯耆殿ノハイト右ノ右京トワ

一腹ノ兄弟也、

〔吉川家臣覺書〕

三 洞泉寺過去帳

森脇飛驒守

天正十二月

松翁全柏

森脇飛驒守

同年

華庭妙芳

同女義

同年

布帛妙宣

同協内

同年

孝翁全舜

高川^(門左)彦右衛門方老母

同年

惟照金光

井上次郎右衛門方

天正十二

安生^(一養號)血脉

醫師

天正十二年雜載

天正十二年二月廿四日

妙金禪尼

三八六

楊井武盛

〔萩藩閔閱録〕

百六 楊井甚平

楊井但馬守武盛 始万壽、弥七、右京亮、武盛代より屬御

〔毛利氏〕當家、天正十二年四月十七日死、

豐嶋對馬守

〔萩藩閔閱録〕

百四十六 豐嶋半右衛門

豐嶋對馬守天正十二年二月十三日死、

〔坂西城主安藝舊記〕

○阿波

一

安藝飛彈守義治

〔驛下同〕

安藝八郎重治

〔マ〕天正十二年庚寅年

德音院殿義山宜公大居士 神儀

十二月廿一日卒去、

前曰坂西之城主安藝飛彈守義治公、前御菩提所上板野郡勝瑞村見姓寺葬、當寺後世ニ至、阿淡六守ヨリ寺領 石寄附ス、

右者、上板野郡坂西之城主安藝飛彈守義治公之御二男安藝六郎兵衛治久、同郡吹田村

住居仕、御代々御巡國之節、御檢使通行之節、御宿仕候、然處長曾我部元親、天正年

中軍勢催、坂西ニ押寄、祕術ヲ盡戰、味方不殘討死、依後開城、然處安藝飛彈守義治

二男安藝助左衛門儀、先年山口之城主宇津鹿島守養子ト成、宇津貞光守宗治改、一万

八千石相守罷在候處、右開城ニ附、坂西城主安藝八郎重治貞光守ニ多ク養育預内、天

正十九年、此時新田康賴攻來、康賴之箭先當貞光守宗治討死、兄安藝八郎手勢引連康

賴討止、依是脇方八千石預、此時住居宗治嫡子虎千代、于時八歲、此時家臣楠左馬亮

依惡逆、毒害之爲相果、天正十九年九月中旬、小笠原家隨後、山口城ヲ見定メ改、豐

臣太閤ヨリ安藝八郎ニ賜、天正廿年正月、宇津伊豆守重治ト改、先知无相違領、依楠左

馬亮義綱始一族悉自滅亡、後世諸人は名七人重子之墓ト申傳、

○下略、元龜三年十一月二十一日小笠原宗治位牌、天正十

〔圓興寺過去帳〕

○伊豫

天正十二年八月六日

鎮舜律師 當寺先住四十世、當所仁科氏、

〔土佐諸家系圖〕

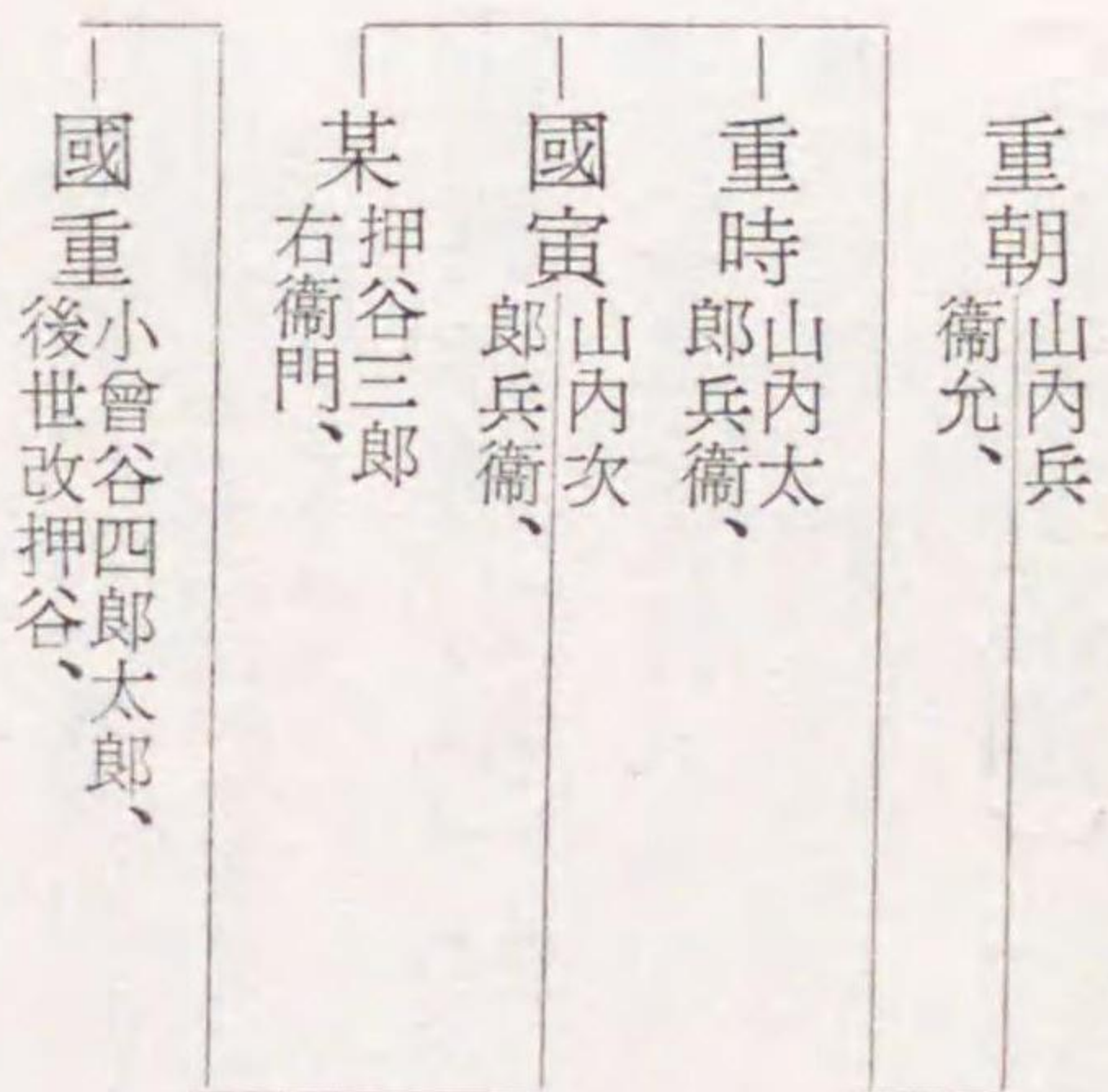
二十

藤原氏系圖

天正十二年雜載

三八七

山内國寅

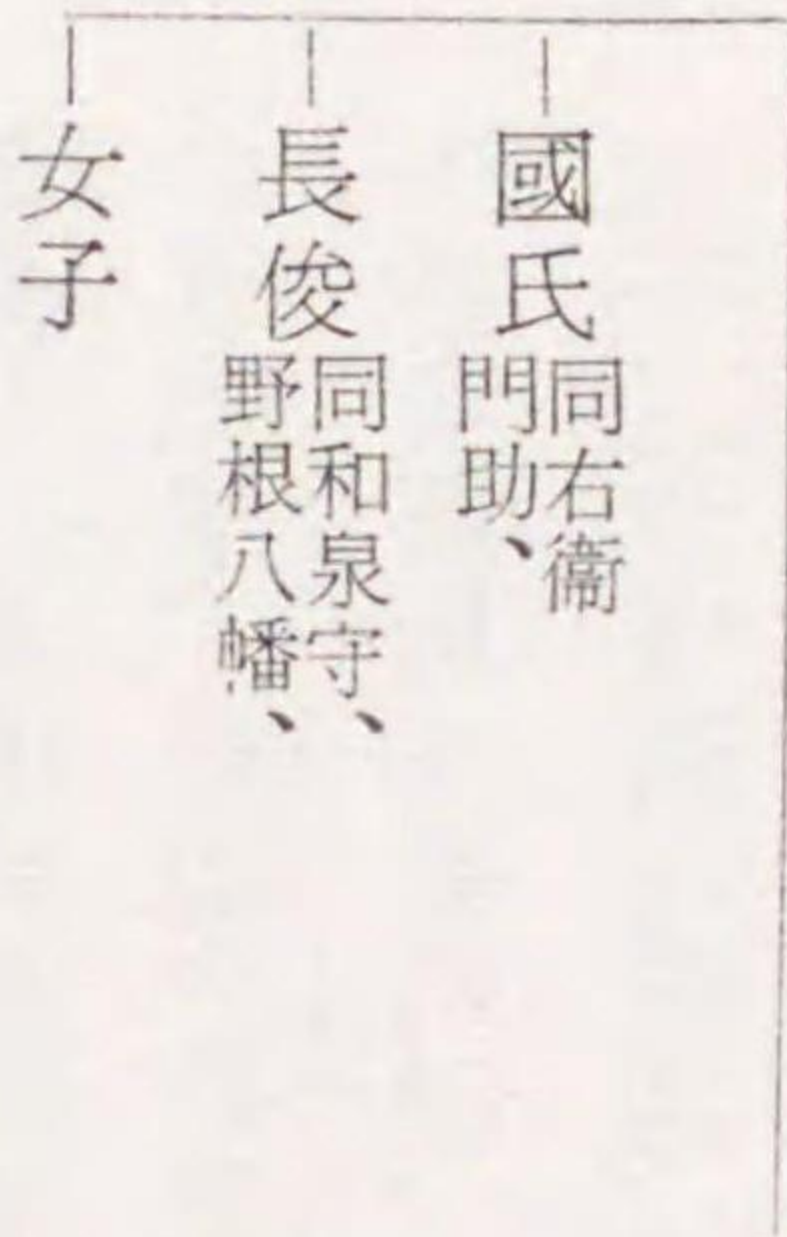


國寅 生于永正二年乙丑、天正十二年甲申六月三日卒、行年七十才、

〔土佐諸家系圖〕○土佐 惟宗略系圖

國長 同左衛門尉、野根城主、

惟宗國氏



國氏 イニ、五六丁西ノ中村ニ營于別莊、踊樂、以此油斷而爲元親被討、天正十二年七月十五日也、元龜元年有古文書、

〔成富家譜〕

一、成富甲斐守信種辨才利口ニシテ武ニ秀テ、(龍造寺)隆信鎗長十七人ノ其中也、○下略

一、天正七年己卯信種七十二歳、致老衰如睦、甲冑難勤ニ依テ、隱居ノ願申上ル故、(龍造寺)政家公被聞召、其儀ナラハ、先以甲斐守本領ノ内、長島ニテ二拾町分ノ所、長男久藏へ被下ノ由被仰出、明ル天正八年、信種隱居ノ體也、此久藏早世シテ子孫ナシ、妻室ハ直茂公ノ御姪子、小川武藏守信俊ノ息女也、○下略、龍造寺政家、信種ノ所領ヲ其子茂安等ニ分テ與フルコトニカ、ル、十一年七月十日ノ條ニ收ム、

一、(天正十一年)同年信種法體シテ常三ト號ス、今年ノ冬、常三直茂公ノ御居所筑後國柳川城へ赴キテ申上ケルハ、近年隆信公ノ御政務荒々敷御慈悲ナキ御行跡、國家御長久アラサル基ニテ御座候、我々式存入モ候へ^レ、貴公ノ御諫言サへ無御用事ニ候へハ、力ニ不及、乍此上ハ佛神ノ加護ヲ祈リ申ス外無御座候、某事最早致極老カ身衰へ候ニ付、隱居入道ト罷成リ、御軍用ニモ不相立候條、御暇申上、上方罷登リ、諸社へ致參籠、太守ノ御行跡ヲモ被相正、御家御長久有之候様ニ祈誠申度旨願申スニ依テ、直茂公尤ニ被思召、宜キ首尾ニ被仰上、常三入道頓テ致上洛、伊勢・八幡・加茂・春日・愛岩(岩)・北野

成富信種

清水等ノ諸社へ參籠申シ、隆信公ノ御武運ヲ祈リ奉リ、翌ル天正十二年ノ四月迄上方罷在、下國シケルニ、佛神ノ力モ不叶ニヤ、去ル三月廿四日、於島原戰死ノ由、龍〇造寺隆信、敗死ノコト、三月二十四日ノ條ニ見ユ、道中ニテ承リ、落涙袖ヲ混シ、源九急キ歸着ス、其後常三入道太守ノ御戰死ヲ無限歎キケルカ、無程病氣差發リ、同年七月廿八日卒去シケリ、行年七十六歲也、法名常三院宗眞日應ト號ス、葬本行寺、

〔上井覺兼日記〕 十五 貳月、

一、廿三日、圓福寺早朝來儀也、福昌寺大賢和尚十五日御死去之由候、就夫、鹿兒嶋へ使僧ニ頼入候、尤私にも越有へき事候間、領掌被成候すれ共、頃脚氣然々無之候條、代僧被遣候てハ如何候する哉之由也、當者代僧可然之由申候也、

〔松前舊記〕 九 五代慶廣君

十二年、順譽和尚寂す、一説は十六年寂すといへり、同年七月十五日、炭西寂す、

同七月廿六日、盛廣松〇の母死去す、生蓮院と號、盛廣出生之事本文より見へされとも、母ハ河野加賀守好通の娘ふるへし、松前家譜ニハ盛廣ノ母ヲ村上季儀女トス、

狂歌

學藝、遊戲、

〔兼見卿記〕 六 正月五日、癸未、晴、後刻又時雨、中略 午刻晴、風寒、狂哥三首詠之、

遣還竹、

をしふへて人の心を直さんとまつ正月よむらふみうゝと
天神のニカとてあひせし梅の枝よさうせてもてる花ひらのもち
わり草をたゝきおこせる七日よハ目をも鼻をもすゝるこそうつ

若狹筆

十六日、甲午、天晴、暖氣、中牧庵貳十疋、若州衆筆一段上手也、四管持來、青女水引二把、醍醐禰宜串柿一把持來、對面、直垂、進盃、白川衆先度來、田中五郎筆一・宗無筆一・田中與一筆二、五明之返禮兵庫助ヲ持遣了、舟橋枝繁自清三品休齋來、侍從ニ手桶十六也、先度約諾持來、吉田兼和予方へ請、於茶湯座敷一服進之、今朝月齋・侍從於予方茶湯一會興行、茶無上引之、茶之時分、妙庵・休齋來、各一服進之訖、侍從清三品へ爲禮罷向之由申、出京了、

茶湯

吉田兼和、羽柴秀勝ニ被ヲ贈ルコトニカ、ル、正月十六日ノ條ニ收ム、

廿九日、丁未、天晴、中略、兼和、御殿ヲ上ルコト、並ニ秀吉入浴ノコト、參近衛入道殿、御客來之間即退出、直向清少納言、暫相談了、自是向盛方院ニ請茶湯座敷、在一盞之義、上野佐

茶湯座敷